

ベズクライニイ ソンカ、ええつ——本當かい、昨日牝雞を買つたつてのは？嘘を言ふんじやないぞ、確かな人から聞いたんだからな。

ソンカ黙つて泣いてゐる。

スウラ 猶太人が牝雞を買ふ時には、猶太人が病氣か牝雞が病氣さね。ソンカ・ツイトロンの餓鬼は今にお陀佛だよ、昨日死にかけたんだから今日はおしまひさ——達者な小僧だから、死ぬにも時間がかかるよ。

ベズクライニイ 餓鬼が斃りさうだつていふのに、彼女は何だつて此處へ來やがつたんだ。

スウラ 商賣をしなくちやならんからさ。

ブリケス 商賣をしなくちやならん。

ソンカ泣いてゐる。

スウラ 昨日は何にも食はないで、今日が日を待つてゐたのに、明日はお客と幸福が來るなんて今日も空頼みをして何にも食べられまいよ。幸福！何が幸福だか誰が知るもんか。神様の前ぢやどんな人間だつて同じさ、だのに二錢カペイカの商賣をするものもありや、三十錢カペイカの商賣をする奴

もあるんだからね。何時も三十錢カペイカの商賣をする奴もありや、二錢の商賣をする奴もある、それに何の爲に人間が幸福になるんだか誰も知つちや居ないさ。

ベズクライニイ 昔は俺も三十錢の商賣をしたものだが、今ちや二錢カペイカほつちよ。昔は高貴なクワスなんてなかつたものだが、今ちやそれがちやんとあるんだ、だのにその商賣が二錢だからな。運なんて當にならんものさ！

ブリケス 運なんて當にならんものさ！

スウラ 昨日悴のナウムの奴が來やがつて、おつかあ、父さんは何處だ、なんて訊くんだ。だから、言つてやつたのさ、親爺の居所をつきとめてどうするんだ。お前の親爺のダキツド・レイゼルは病氣で不合せだよ、今にきつと死んぢまうんだ、一人で神様と身の上相談をするつて海岸はまをうろついてるんだがね。今に死ぬんだから、父さんの邪魔をするんでねえぞ——言ふことがあつたら、おれに言ふがええつてね。すると、ナウムが言ふにや、ちやあ、言ふがね、おつかあ——俺も死にさうだよ、おつかあ。ナウムの返事がかうだ。所で、わしの老ぼれ亭主のダキツド・レイゼルが歸つて來るとかう言つてやつたのさ、お前さんは未だ潔白なものだら

う？神様に毒づいて死んじまうがいい。お前の息子のナウムが死にかけてるからつてね。

ソンカ一層強く泣く。

プリケス (突然當りを見廻し) えつ……お客が買はなくなつたらどうするんだ？

スウラ (愕いて) まるつきりだつて。

プリケス (恐怖をつのらせて) さうさ、急にみんながまるつきり買はなくなるんだ。さうしたら俺達あ一體どうするんだ。

ベズクライニイ (不安さうに) そんな馬鹿げたことがあるものか、まるつきり買ひ手がなくなるなんて。そんなことがあつて堪るものか。

スウラ そんなことがあるものかね。

プリケス どうして、あるとも。不意にみんな買はなくなるんだ。

一同恐怖に捉はれる。ソンカさへ泣き止んで、蒼ざめて愕いた黒い眼で人氣のない往來を見廻はす。太陽は川捨なく照りつけてゐる。遠方の曲り角にアナテマが現はれる。

スウラ お客さんだよ。

プリケス お客だ。

ソンカ お客さんだ。お客さんだ。

再び泣き出す。アナテマ近寄る。この暑さにも拘らず、彼は上等の羅絨製の黒のフロック・コウトに黒い網帽、黒の手袋といふ扮装。襟飾だけが白くて、彼の全體の衣装に莊嚴と極度に似つかはしい様子とを與へてゐる。彼は背が高く、髪は白いが眞直ぐで整然としてゐる。呪はれた者の顔色は灰色がかつて鈍黒く、頬だちはいかつく、自分に言はせると美しい。アナテマが網帽を脱ぐと皺に刻まれた巨大な額が現はれる、胡麻鹽のもやもやした髪の毛の生えた釣合の取れない大きな頭。怪物のやうに大きい額と同じくアナテマの首は奇形的な特徴があつて、細くて長すぎる位。重味でもあるやうに、頭を神経的に曲げたりつつ張つたりする、そして奇妙に物好きに、不安な、危かしい風にする。

スウラ 旦那様、ソオダ水を一杯いかがでございますか？地獄みたいなのこの暑さでは、一杯召上りませんかと暑氣當りで命を取られまいものでもございませんよ。

ベズクライニイ 本物の高貴なクワスはいかが！

プリケス 堇水！ さあ、堇水！

スウラ ソオダ水に、ゼルツェル鱈泉！

ベズクライニイ 彼女のソオダ水を飲んじやいけませんぜ——彼女のは鼠が糞り、油蟲がへたばるつて代物ですからね。

スウラ イワン、お客様の横取りをして恥かしかないのかい——飲めるなあ狂犬位のお前さんの高貴なクワスのことなんか一口だつて言やしないぢやないか。

プリケス (嬉しそうに) お客さん。お客さん。手前どもぢや何にもお買ひ下さいますな、お願ひですから。お買ひ下さるには及びません——お目にかかれば結構なんで。ソンカ、お前、解るか——お客さんだよ。

ソンカ 解らないよ。眼が見えないの。

アナテマは一同に愛想よく挨拶しながら紺帽を脱ぐ。

アナテマ 有難う。喜んでソオダ水を一杯頂戴しよう。それから高貴なクワスも一杯。だが、商人ダキツド・レイゼルは何處だか知りたいたいものだ？

スウラ (愕いて) 此處ですよ。ダキツドにお用なんで——妾は家内のスウラでございますよ。

アナテマ ああ、レイゼルのおかみさん、わしはダキツドに逢はなくぢやならんのだが、ダキ

ツド・レイゼルにね。

スウラ (疑ふやうに) 何か悪いことを話しにお出ですすね、ダキツトにやそんな立派な羅絨の着物を着た友達は一人もございまんからね。さういふことならお歸りなすつた方がよささうですよ——ダキツドは留守だし、何處に居るんだか申し上げませんよ。

アナテマ (怒つて) なに、心配することはない。何にも悪い報知を持つて來たんぢやないんだから。だが、さうした愛情を見るなあ實に愉快だ——お前さん、そんなに旦那を好いてるのかね、レイゼルのお主婦さん。きつと、力の強い丈夫な男で、うんと金儲けをするんだらう？

スウラ (顔をしかめ) いいえ、老ひぼれの病人で、働く譯にはゆきません。でも、神様や人様には何にも悪いことを致さないものですから、仇だつて悪くは申さないのでございますよ。旦那様、此處にゼルツェル鑛泉がございます、ソオダ水よりや上等なんで。暑くつてお宜しかつたら、お掛けなすつて、ちよつとお待ち下さいまし、ダキツドはおつつけ此處へ参りますから。

アナテマ (腰を下し) ああ、お前さんの亭主のことぢやうんといひ話を聞いたよ、だが、病氣で老人だとは知らなかつた。子供はあるかね、レイゼルのお主婦さん。

スウラ 六人ございましたが、上の四人が死にましたので……

アナテマ (氣の毒がリ) それはそれは。

スウラ はい、旦那様、ひどい暮しをしたもので。残つてるのは二人切りでございますよ。倅のナウムは……

ベズクライニイ 假病をつかつて、一日中町をうろついでる無頼漢さ。

スウラ お止しよ、イワン、正直な人間を悪く言つて恥づかしいかい。ナウムが出歩くなあ掛取りだからね。それに、旦那様、手前共にはロオザといふ娘がございます。でも、悲しいことには、綺麗すぎましてね、旦那様、餘り器量がよすぎますので。幸福——幸福つてどんなものでございませう。痘瘡で死ぬ人があるかと思へば、かかりたくてもかかれない者もございませうが娘にはそれが無いので、花弁みたいに綺麗な顔をしてるのでございませうよ。

アナテマ (愕いた風をして) 何だつてそんなことをよくよするんだね。美といふものは——神様が人間に下すつた贈物さ、神様はそれで人間をお褒めなすつて、お自分の方へお近づけなすつたんだ。

スウラ 誰が知るものですか——神様の贈物かも知れませんが、それとも申し上げようとは思ひませんが、誰か外の人の贈物かも知れませんが。でも、隠さなければならぬなら——何だつて人間に綺麗な眼があるんだか、妾には合點が参りません——煤や埃塵の下にしまつて置かなくちやならないでしたらね。美しさなんて——本に危険な寶物でございませうよ、悪者に美しさを隠すよりは、盜坊にお金を隠す方が餘程わけがありません。(疑ふやうに) ロオザを見にいらいつしたんぢやございせんか——ぢやあ、お歸りになつた方が宜うございませう。ロオザは留守でございますし、何處に居るんだか申しは致しませんからね。

ブリケス お客さんだよ、スウラ、氣をつけろよ、お客さんだぜ。

スウラ さうだよ、さうだよ、ブリケス。だがね、買ひに来たものを買ふでもなきや、探してゐるものだつて見つかるものかね。

アナテマは愉快さうに笑ひながら、面白がつて話を聞いてゐる。誰かが話した始めると何時も彼は首を延ばし、ちよつと横へ傾けながら話手の方へ頭を向ける。俳優のやうに覺め面をして、驚愕、悲しみ、怒り等の表情を浮べる。然し妙な時に笑ひ出す、だから、話手を幾分威したり吃驚りさせる。

ベズクライニイ ぼらうたつて駄目だぜ、スウラ、それぢや、お客さんは買ふ氣でも賣れやしないよ。どんな商賣だつてねかしときやあ、値打がなくなるつてもものさ。

スウラ (涙を流し) 何て悪者だ、イワン。お前には十錢貸しがあるのに、何かといふと妾達の悪口ばかりだ。

ベズクライニイ 俺の言ふことなんか放つとくがいいさ、スウラ。俺が悪黨なものも饑しいからよ。黒いフロツクの旦那、あつちへお出でなさいよ、スウラは正直者だから、百萬お出しなすつても、娘を賣りやしますまい。

スウラ (熱して) さうとも、さうとも、イワン、有難うよ。所で、旦那様、ロオザが器量よしだなんて誰が言ひました？嘘ですよ——お笑ひなすつちやいけません、そりや出鱈目ですよ、死にさうな罪人見たいにみつともない兒ですからね。汚ないつたら石炭船の穴から這ひ出した犬みたいで、顔は痘瘡だらけだし、粘土や砂を取る原つばそつくりですよ。右の眼には老ひばれ馬のやうな白障眼（まぶた）、大きな白障眼（まぶた）がありますしね。あの娘の髪（かみ）の毛をごらんなさいまし——半分は鳥がほつき廻つてもじやもじやになつた毛みたいですよ。それに腰を曲げて歩きま

してね、本當ですとも、腰を曲げて歩くんでございますよ。あんな者をお連れなすつたら、みんな旦那様を笑ひものにして、唾を引つかけたり、町の腕白小僧共が旦那様をそつとさせときやあしませんから……

アナテマ (愕いて) だがね、レイゼルのお主婦さん、わしは聞いたんだが……

スウラ (悲しきうにして) 何にもお聞きなさるものですか。本當に、何にもお聞きなさりやしませんよ。

アナテマ でも、お前さん、自分で……

スウラ (頼むやうに) 妾が何か申しましたか？やれやれ、旦那様、女つてお饒舌りなものでございませぬ、女は自分の兒をひどく可愛がるものでしてね、綺麗だと思ふのが常なんでございますよ。ロオザは——器量よし！(笑ふ) ねえ、考へてごらん、ブリケス、ロオザが——器量よしだつて！

笑ふ。町の方角からロオザが近付いて来る。彼女の髪（かみ）の毛はもつれてもやもやして居る、そして黒い、きらきらした眼（まなこ）を被ふ位である。顔に何か黒いものを塗り、醜い服装をして居る。すつとした

若若しい足取りで歩いて来るが、見知らぬ紳士を見ると、老婆のやうに腰を曲げる。

スウラ ほんら、ロオザが参りました、ねえ、旦那様。ああ、醜い女だこと。あの女を見る度にダキツドは泣くんでございますよ。

ロオザ (無意識に怒つて眞すぐになり) わたしより醜い女はいくらだつて居てよ。

スウラ (説付けるやうに) 何だね、ロオザ、お前よりみつともない娘が世間にゐるもんかね。(哀願するやうに囁く) 器量を隠すんだよ、ロオザ。盗坊が来たんだんから、ロオザ——器量をお隠しつたら。夜になつたら妾自分でお前の顔も洗つて上げれば、髪も梳いて上げるよ、さうすりや、お前は天使のやうに美しくなるからね、妾達はみんな跪いて、お前にお祈りするよ。盗坊が来たんだよ、ロオザ。(大聲に) 又お前に石を放りつけたかい。

ロオザ (嗔れ聲で) ええ、ぶつつけたわ。

スウラ 犬もお前に飛びついたの？

ロオザ ええ、飛びついたの。

スウラ ねえ、さうでせう、旦那様。犬だつてさうですもの。

アナテマ (愛想よく) うん、わしが思ひ違ひをしてたらしい。残念だが、お前さんの娘さんは

本當に美人じゃないね、見るのも辛い位だよ。

スウラ もつとも、彼女よりみつともない娘もございますからね、でも……お出で、ロオゾチ

カ、あつちで仕事をおし——不器量で可哀さうな娘は働くよりすることがありませんやね。お

出よ、ロオゾチカ、お出でつたら。

ロオザは繕ふための縫綴片を取つて店の中へ隠れる。沈黙。

アナテマ 店を持つてから大分になるかね、レイゼルのお主婦さん。

スウラ (落付いて) ダキツドが病みついてからもう三十年にもなりますよ。彼が災難に逢ひま

してね、兵隊の時分、馬に踏まれて胸を傷めたのでございます。

アナテマ 兵隊だつたのかね、ダキツドは？

ベズクライニイ (口を挿み) レイゼルには無頼漢の兄貴があつたんです。モイセイつて名のね。

スウラ (歎息して) モイセイつて名だつた。

ベズクライニイ 兵役につく時が来たたら、モイセイの奴、伊太利の船で逃げちまやあがつた。

だから、代りにダキツドが取られたんでさ。

スウラ (歎息して) ダキツドが取られたんです。

アナテマ 不公平な話だな!

ベズクライニイ じゃ、この世で真直ぐなことに逢ひなすつたことがあるかね。

アナテマ 逢つたとも。お前さんはきつと不仕合で、何も彼も真黒に見えるんだらう。だがね、今に正義があるつてことが解るよ、解るとも。(氣さくに) ちえつ、わしはすることがないものだから、始終世界をうろついでるんだが、正義くらいお目にかかつたものは先づないね。どう言つたものかな、レイゼルのお主婦さん——上等の犬にくつついでる蚤よりや、世間には正義の方が多いものだけ。

スウラ (笑ひながら) だつて、蚤のやうに捕へ難かつたら……

ベズクライニイ 蚤みたいに刺しやがつたらどうするだ……

一同笑ふ。町の方から埃と汗に塗みれてぐつたりした手風琴師が来る。傍を通り抜けようとして、急に立止まり何か恐ろしい曲を弾き初める。

スウラ 行つておくれよ、御生だから行つておくれつたら。音楽なんぞに用はないんだよ。

手風琴師 (弾く) わしにも用はねえ。

スウラ 何にも上げるものがないよ。行つておくれ。

手風琴師 (弾く) じゃあ、弾きながら死んぢまはあ。

アナテマ (寛大に) レイゼルのお主婦さん、お願ひだから、何か食ふものと飲むものをやつてくれ——わしがみんな拂つて上げる。

スウラ 親切な方だこと。おいでよ、お前さん、食つたり飲んだるするがいい。だがね、水の代は取らないよ、妾が上げるんだからね。

手風琴師掛けて食るやうに食ふ。

アナテマ (愛想よく) お前さんはもう永いこと世間を歩き廻つてるのかね、音楽家?

手風琴師 (氣難かしく) 以前にや猿が居たんだがね——音楽と猿さ。猿は蚤めに食はれるし、音楽はびいびい言ふようになる、だから、わしは首を縊る木を探してるんだ。それだけさ。

少女が駆けて来る。物珍しさうに手風琴師を眺め、それからソソカの方を向く。

少女 ソンカ、ルウジヤはもう死んじまつたよ。

ソンカ もう？

少女 ああ、死んだよ。種子を貰つてもいいかい。

ソンカ (店をしまひながら) いいとも。スウラ、お客さんが来たらさう言つておくれよ、明日また商賣をしますからつて。さもないと、店をすつかりたたんじまつたんだと思ふからね、聞いたかい、ルウジヤが死んだつて。

スウラ もう？

少女 ああ、死んだよ。この音楽家何んか弾くの？

アナテマはスウラに囁き、彼女の手の中へ何か押し込む。

スウラ ソンカ、お前に一圓上げるつて、ほら——一圓だよ。

ベズクライニイ そいつあ——いいなあ。昨日は牝鶏、今日は一圓か。貰つとけよ、ソンカ。

一同食らやうに銀貨を眺める。ソンカは少女と退場。

スウラ 旦那様、大層なお金持ですね。

アナテマ (満足さうに) うん！わしは大した仕事を持つてるんだ——わしは辯護士さ。

スウラ (素早く) ダキツトには借金なんかごさいませんよ。

アナテマ なに、レイゼルのお主婦さん、そんなことで来たんじやないよ。もつとわしが解つてくれたら、わしは持つて来たんで取るんじやない、上げるんで取り上げるんじやないつてことが解るんだがな。

スウラ (幾分びくびくして) 神様のところからおいでなすつたんで？

アナテマ わしが神様のところから来たんなら、わしにもお前さんにも光榮過ぎることだがね、レイゼルのお主婦さん。所が、わしは自分から来たんだ。

ナウム近付く、驚いて客を眺め、疲れたやうに石に掛ける。鳥のやうな胸の大きな青白い鼻をした、背の高い瘦せぎすの青年。周囲を見廻はす。

ナウム ロオザは何處に居るんだ。

スウラ (囁き聲で) 静かにおしよ、彼處に居るよ。(大聲に) ええ、ナウム、掛金は取れたかい。

ナウム (元氣なく) ううん、おつかあ、取つて来なかつた。俺あ死にさうだよ、おつかあ、み

んな暑いつてのに、俺あ寒くつて寒くつて仕方がねえ。汗をかくだが冷汗よ。ソンカに逢つたが——ルウジャが死んだつてな。

スウラ お前、未だ死ぬもんかね、ナウム、未だ生きられるよ。

ナウム (元氣なく) うん、俺あ未だ生きてらあ。何だつてとつつあんは來ねんだらう？もう來る時分だになあ。

スウラ 鱗を洗つとくんだよ、ロオザ。此の旦那がもうさつきからダキツドをお待ち兼ねなんだが、未だ歸つて來ねえ。

ナウム どうしてさ。

スウラ 知らないよ、ナウム。お出でなすつたからにや、何か御用だらうさ。

沈黙。

ナウム おつかあ、俺あもう掛金なんか集めねえぜ。父^{とち}さんと濱へ行くんだ。俺の運を神様に
お訊ねする時が來たんだからな。

スウラ お訊ねするんぢやないよ、ナウム、お訊ねするんぢやないよ。

ナウム ううん、神様にお訊ねするんだ。

スウラ (哀願しながら) いけないよ、ナウム、お訊ねするんぢやないといふのに。

アナテマ どうしてだね、レイゼルのお主婦さん。神様が何かよくない返事をなさりやしない
かつて心配するんだね？もつと信じなくちやいけないよ、レイゼルのお主婦さん、ダキツドが
そんなことを聞いたら、まさか褒めやしまいで。

手風琴師 (頭を上げ) お若いの、お前さんかい、神様と話がしたいといふのは。

ナウム うん、俺だあ。どんな人間だつて神様と話せらあな。

手風琴師 さう思ふかね？ぢやあ、新らしい手風琴をお願ひしてくれよ。こいつあ駄目になつ
たと言つてな。

アナテマ (同情するやうに) 蚤が猿を食つちまつたから——新らしい猿が入るんだつてことも
な！

笑ふ。手風琴師を除いた外の者は幾分疑つて彼を眺める。手風琴師は立上つて、無言のまま手風琴
を取る。

スウラ どうしようつていふの、音楽家さん。

手風琴師 わしあ弾きたいんだ。

スウラ 何故さ？音楽なんかいらないつて言つてるぢやないか。

手風琴師 どうも御親切さま。

何か恐ろしい曲を弾く。手風琴はきいきい鳴つたり、途切れたり、びいびい音をたてる。アナテマは夢想するやうに眼を空へ向け、手でやつと解る位のタクトを取つて口笛を吹く。

スウラ やれやれ、何ていやらしいことだ。

アナテマ レイゼルのお主婦さん、こいつあ……（口笛を吹き）世界の調和つてやつさ。

暫く會話途絶える。切々な手風琴の吹える聲と、アナテマの夢見るやうな口笛が聞えるばかり。太陽は用捨なく照りつける。

アナテマ （有頂天になつて）わしはすることがないもんだから、世界中を歩き廻つて居るんだ。

尙一層引きつけられる。突然手風琴は永く耳に残るやうな腹がれたびいびいた音をたてて途切れる、アナテマは手を上げたまま失神する。

アナテマ （疑つて）何時もお終ひはそんな風かね。

手風琴師 もつといけないこともあるんだ。さよなら。

アナテマ （開衣の隠しなきぐり）いけない、いけない、そのまま歸つちやいけない……お前さんはわしに本當の喜びといふものをくれたんだ、お前さんに首縊りはして貰ひたくない。これはつまらんものだが……元氣を出すんだね。

スウラ （愉快さうな驚愕のうちに）お顔を見ただけぢや、且那樣がそんなに面白い、御親切な方だと誰だつて思や致しません。

アナテマ （煽びるやうに）まあ、レイゼルのお主婦さん、さう褒めるとまごつくぢやないか。首縊るより仕様のない可哀さうな人間を助けちやいけないつて方はないからね。だが、あそこに見えるのは、尊敬すべきダキツド・レイゼルぢやないかね。

道が右手へ曲つてゐる方を眺める。

スウラ （同じく眺めながら）ええ、ダキツドです。

一同黙つて待つてゐる。埃つほい路の上に、曲つてゐる向ふからダキツド・レイセルがゆつくりと歩

きながら現はれる。彼は背が高く、骨ばつて、長い灰色の捲髪と同じやうな髭を生やしてゐる。高い頭の圓い縁なし帽子を冠り、手にはダキツドが路を測る杖を持つてゐる。毛深い下つた眉の下から下を眺めて、同じく眼も上げずにゆつくりと腰をかけてゐる人々の方へ近付いて来る。そして兩手で杖に寄りかかつて立止まる。

スウラ (立上つて恭々しく) 何處に居たの、ダキツド。

ダキツド (眼を上げずに) 濱にゐたんだ。

スウラ あそこで何をしてたの、ダキツド。

ダキツド 波を見てたんだ、スウラ、そして何處から來て何處へ行くんだつて聞いたんだ。俺は人生のことも考へたよ、スウラ、人生は何處から來て何處へ行くんだつてな。

スウラ 波は何とか言つたかい、ダキツド。

ダキツド 何にも言はねえ、スウラ……寄せては又引いてゆくだけだ、濱にゐる人間は無駄に海の返事を待つてゐるんだ。

スウラ お前さん、誰と話をしたのさ、ダキツド。

ダキツド 神様とだ、スウラ。今に死ななくちやならんこの老ひぼれの猶太人ダキツド・レイゼルの運を神様にお訊ねしたんだ。

スウラ (心騒ぎを感じて) 神様は何とおつしやつたんだい。

ダキツドは眼を伏せて黙る。

スウラ 悴のナウムもお前さんと濱へ行つて、自分の運勢を聞いたがつてゐるよ。

ダキツド (眼を上げ) ナウムも直き死ぬんかい。

ナウム うん、父さん、俺あもう死にかけてゐるんだ。

アナテマ だが、あの、皆さん……わしが命と幸福を持つて來て上げたのに、何だつて死のことなんか話すのだね。

ダキツド (振向いて) お前さん、神様のところからお出でなすつたのか。スウラ、あんなことをいふこの方は一體誰だい。

スウラ 知らないよ。お前さんを永いことお待兼ねだよ。

アナテマ (嬉しさうに走り廻り) ああ、皆さん、お笑ひなさい。だが、ちよつと氣をつけて、わ

たしが皆さんを笑はして見せますよ。氣を付けて、皆さん、氣をつけて。

一同緊張した注意を持つてアナテマの口元を眺めてゐる。

アナテマ (書類を取り出して嚴かに) お前さんはアブラム・レイゼルの息子ダキツド・レイゼルではないか。

ダキツド (驚いて) うん、わしだ。だが、まだ外にダキツド・レイゼルがある——かも知れん、わしは知らん——みんなに訊いて見るがいい。

アナテマ (止める身振りをして) お前さんには三十五年前に伊太利の船フォルトウナ號でアメリカへ逃げたモイセイ・レイゼルといふ兄はなかつたかね。

一同 ええ、ありました。

ダキツド だが、兄がアメリカにゐるとは知らなかつた。

アナテマ ダキツド・レイゼル、お前さんの兄のモイセイは——亡くなつたよ。

沈黙。

ダキツド 俺あとづくに許してやつたのに。

アナテマ 死ぬ時に、二百萬弗(取り巻いてゐる人々に向つて)——つまり、四百萬圓にもなる自分の財産を全部——お前さんに遺したのだ、ダキツド・レイゼル。

或る深い溜息が起る。一同石のやうになる。

アナテマ (書類を延ばし) ここに證書がある、印を——ごらん。

ダキツド (書類を押し退け) いいや、いらん、いらん。お前さんは神様の所から來たんじやない。神様はそんなにして人間をからかやしない。

アナテマ (一心に) まあ、冗談なものか。全くだ、嘘じやない——四百萬だぜ。先づわしにお祝ひを述べさせてくれ給へ、心からお前さんの正直な手に握手させて貰ひたいな。(ダキツドの手を取つて振る) 所で、レイゼルのお主婦さん、何だね、わしの持つて來たのは? 今度こそどつちだね、ロオザは美人か不器量か。ああ! お前さんは直き死ぬのかね、ナウム。ああ! (涙を流して) これだよ、わしが持つて來たのは、皆さん、だが、今度は行かせてくれ給へ……邪魔するのは止めにしてね……

半巾を眼に當てて一方へ退く、見た所感動してゐるやうである。

スウラ

ロオザ!

ロオザ

(同じく亂暴に) 何だい、おつかあ?

スウラ

顔をお洗ひよ! 顔をお洗ひといつたら、ロオザ! ああ、早く、早く顔をお洗ひよ。

まるで氣狂ひのやうにロオザを引き廻はす、そして震える両手で水を跳返しながら彼女を洗ふ。ナムは父の手を掴んで彼に吊り下るやうにする。此の瞬間に彼は意識を失つたやうである。

ダキツド

書類を持って行け。(頑固に) 書類を持って行け。

スウラ

氣が狂つたね、ダキツド。放つてお置きよ、お洗ひ、ロオゾチカ、お洗ひたら。みんなにお前の器量を見せてやるがよい。

ナム

(書類を掴み) 俺達んだよ、父さん。父さん——こいつあ神様のお返事だ。おつかあを

見なよ、

ロオザを見なよ——俺を見てくれよ、俺あもう死にかけちやねえか。

ブリケス

(叫ぶ) あ、あ、見ろよ、あいつら書類を破つちまうぜ。あ、あ、早く書類を取り上げねえか。

ナウム泣く。

美に輝きながら、髪は濡れてもう眼の上にかぶさつて居ないで、にこにこしてロオザは

父の前に立止まる。

ロオザ

妾だよ、お父さん。妾だよ。妾……だよ。

スウラ

(荒々しく) 何處に居たんだい、ロオザ。

ロオザ

居なかつたよ、お母さん。生れたんだよ、お母さん。

スウラ

ごらんよ、ダキツド、ごらんつたら、人間が生れたんぢやないか。ああ、皆さん、あの娘を見てやつて下さい、ああ、眼の前の戸をお開けなさい、眼の前の門を開けて下さい——

おの娘を見てやつて下さい、皆さん。

突然ダキツドは何が起つたのかその意味を理解する。頭から無縁帽を投げ捨て、彼の息を詰らせてゐる着物を引き裂き、一同を押し退けて、アナテマに飛びかかる。

ダキツド

(威嚇的に) 何だつてこんなものを持つて來やがつたんだ。

アナテマ

(溫和に) でもねえ、レイゼルさん、わしは辯護士に過ぎないよ。わしは本當に嬉し

いんだ。

ダキツド

何だつてこんなものを持つて來やがつたんだ。

力を籠めてアナテマを押し退け、よろめきながら路を去る。突然立止まり、後を振り返つて、両手を振りながら叫ぶ。

ダキツド　彼奴を追拂つちまへ——彼奴は悪魔だぞ。お前達は彼奴が四百萬圓持つて来たと思ふのかい。どうして、彼奴の持つて来たのは四百萬の侮辱だ。彼奴はダキツドの頭へ四百萬の嘲笑を投げつけたんだ……俺は苦い涙の大海を四つも一生の上へ注ぎかけたんだ、俺の溜息は地上の四つの風だつた、飢餓と病氣が俺の四人の子供を食やがつたんだ——今、俺が死なにやならん時に、老ひぼれて死なにやならん時に、四百萬持つて来やあがる。悲しみに押しつぶされ、悲哀に包まれ、苦しみを冠つて、俺が何もかも亡くして暮して来た青春を返してくれるのか。俺の飢えの一日、石の上へ落ちた涙の一滴、俺の顔へひつかけられた唾一滴でもいいから返してくれるのか。四百萬の呪——それだ、貴様の四百萬といふのは……ああ、ハンナ、ああ、ゼニアミン、ラファイエル、ああ、わしの可愛いモイシエ、お前達は冬の枯枝の上で、寒さのために死んだわしの可愛い小鳥だ——お前達の父さんがこの金に觸りでもしたら、お前達は何と言ふだらう？いいや、わしは金なんか欲しくない。金なんか要るもんか、なあ、わしは飢

えて死にかけてゐる老ひぼれの猶太人だ。此處ぢや神様に逢へない。だが、わしは神様の所へ行つて、ダキツドをどうなさるお積りだつて申し上げよう……わしは行くよ。

両手を振りながら退場。

スウラ　(泣く)　ダキツド、お歸り、お歸りと言つたら。

プリケス　(絶望して)　書類を、書類を拾へよ。

アナテマ　(戻つて来て)　落付きなさい、レイゼルのお主婦さん、今に戻つて来るよ。何時だつて初めはああさ。わしは何度も世間を歩いたんだから、そんなことはちやんと知つてゐる。血が逆上する、足が慄へる、それで人間は呪ふものさ。何でもないことだ。

ロオザ　まあ、ひどく曲つた鏡だね、おつかさん。

ナウム　(泣く)　おつかさん、お父さんは何處へ行つたんだい。俺あ生きてゐたいよ。

アナテマ　こんな硝子の片塊かけらなんか捨てつちまうさ、ロオザ。お前さんの器量はみんなが映してくるよ、世界が映してくれるさ——そいつを見りやいいさ……おや、未だ此處に居たのかね、音楽師さん。じゃあ、弾いてくれ給へ、願ひだから。こんなお目出たい日にや音楽をし

ない譯にはゆかないからね。

手風琴師 同じやつを弾くのかね。

アナテマ 同じやつさ。

手風琴は吠えたりびいびい鳴る。アナテマは両手を振りながら、音楽と口笛で一同を祝福するやうに激しく合せて口笛を吹く。

—幕—

第三幕

ダキツド・レイセルは豪華な暮しをしてゐる。妻や子供達にねだられて海岸に素晴らしい別荘を借り、多勢の召使や馬や馬車を持つてゐる。アナタマは辯護士の仕事に盡力してやつたといふ口實で、ダキツドの個人的な秘書役となつてゐる。ロオザの所へは多勢の男女の教師が来て、語學や禮儀作法を教へてゐる、すつかり病氣になつて、死に瀕してゐるナウムの所へは、彼の希望で、舞踏の教師だけが來てゐる。金は未だアメリカから來ないが、百萬長者のダキツド・レイセルは大した信用借を受けてゐる——然し現金よりも品物や商品の方が多し。

舞臺は巨大な伊太利風の窓とヴェランダへ通ずる出口のある、白大理石で隔てられた立派な廣間。眞晝。開け放した窓の向ふに半熱帯植物が見え、海が青々としてゐる。一つの窓から町の景色が見える。

卓の側には、ひどく陰氣さうにしてダキツドが掛けてゐる。少し離れて、立派ではあるが無趣味な服装をしたスウラが長椅子の上に坐つて、ナウムの舞踏の稽古を見てゐる。ナウムはひどく蒼ざめて、髪をしたり、殊に規則上片足で立たねばならない時には、衰弱の余り倒れさうにする、然し頑固に稽古を續けてゐる。服装は豪者なものだが、ひどく明るい色の斑らな胴衣と同じやうな首飾とは幾分印象を損ふ。ナウムの周圍では、舞踏の教師が釣合を取つたり、蹲んだりしながら、ヴァイオリンと弓とを持つて舞つてゐる——大層しやれた輕さうな人物である。白い胴衣、塗りの上靴にスモオキングといふ扮装である。

悲しさうな咎めるやうな様子をして、入口に立つてアナタマはこれ等を眺めてゐる。

教師 一、二、三！ 一、二、三！

スウラ ねえ、ダキツド、ごらんなさいよ、ナウムは本當に踊りが上手くなりますよ。妾はとてもあんなには跳べないわ——可哀さうな兒ね。

ダキツド さうだな。

教師 ナウムさんは實に天才です。どうぞ……一、二、三！ 一、二、三！ ああ、ちよつと少しいけませんな。足踏はもつとしつかり、右足を優美に廻してね。斯う——斯ういふ工合に。(やつて見せる) レイセルの奥さん、踊りは數字と同じで、圓が大切ですよ。

スウラ 聞いてて、ダキツド？

ダキツド うん。

教師 ナウムさん、どうぞ。一、二、三！ 一、二、三！ (ヴァイオリンを弾く)

ナウム (息を切らしながら) 一、二、三！ 一、二、三！

舞つて、突然倒れさうにする。ぐつたりして生氣のない顔をして立止まり、死人のやうに眺める——

咳が呼吸を止める。咳をして又續ける。

ナウム 一、二、三！

教師 さう、さう、ナウムさん。どうかもつと優美に、もつとすらつと。一、二、三！
彈く。アナテマは注意してスウラに近付き、聲を押へ、然しダキツドに聞える位の大聲で。

アナテマ レイゼルの奥さん、ナウムがちつとばかり疲れたやうに思へませんかね。あの踊りの先生はまるでお情を御存知ない。

ダキツド (振り向き) ああ、澤山だ。スウラ、お前は若いものを苦めようといふんだな。

スウラ (當惑して) わたしがどうしたつていふの、ダキツド、あの兒の疲れたこと位解つて

じやありませんか——だつて、あの兒は踊りたがつてるんですもの。ナウムや、ナウム。

ダキツド 澤山だよ、ナウム。お休み。

ナウム (息を切らせながら) 僕は踊りたいんだ。(立止まり、ヒステリックに足を踏みならす) 何故踊らせてくれないの——それともみんな早く死ねばいいと思つてるの。

スウラ 未だ生きられるよ、ナウム、未だ大丈夫だよ。

ナウム (泣きさうにして) 何故踊つちやいけないの。僕は踊りたいんだ。僕、掛金はうんと集めたんだから、面白く遊びたいよ。寢臺に轉がつて咳をしてるやうな老人かしら。咳、咳をするなんて。

咳をし、同時に泣く。アナテマが舞踏教師に何か囁くと、彼は悔むやうに氣取つて肩を聳かし、うなづいて退場しようとする。

教師 では又明日、ナウムさん。お稽古が少し延びたやうですから。

ナウム 明日……きつとね。ねえ。僕、踊りたいんだから。

教師挨拶をしながら退場する。ナウムは若々しい足取りで其の後に續く。

ナウム ねえ、明日きつと。間違ひなくね。

兩人退場する。

アナテマ 何をお考へです、ダキツド。わたしはただあなたの個人的な秘書役といふばかりでなく——もつともそれを名譽とは思つてますがね——あなたの親友にして戴きたいものですな。お金が来てからあなたはひどく悲しさうにしてゐらつしやるので、わたしはどうもあなた

を見るのが辛い。

ダキツド 何も喜ぶことなんか無いじやないか、ヌリユウス。

スウラ じやあ、ロオザは？神様の前でそんな大それたことを言ふものじやありませんよ、ダキツド——あの娘の器量や若々しきを見ると眼が休まるじやないの。昔は静かなお月様もあの娘をごらんなさかなかつたし、お星様だつてあの娘の噂なんかなさりはしなかつた——だのに今ぢやあの娘が馬車で行くと、みんな眺めるし、馬乗りはあの娘の後を追ひ駈けるんですよ。ねえ、ヌリユウス、馬乗りがあの娘の後を追ひ駈けるんですよ。

ダキツド ぢやあ、ナウムは？

スウラ ナウムですつて？あの兒はすつと病つてるのを御存知じやありませんか、舗石の上で死ぬよりは、柔らかい寝臺ベッドの上で死ぬ方がましですからね。きつと未だ大丈夫ですよ、死ぬものですか。(泣く) ダキツド、外庭でアブラム・ヘツシンとソンカの娘が待つて居ますよ。

ダキツド (氣難かしさうに) 何の用だい、お金か。スウラ、五六錢やつて、歸らせたらいい。

スウラ しまひには妾達をみんな持つてつちやうんだよ、ヌリユウス。もうヘツシンには二度

ちやつたのにね。彼は砂も同じで——いくら水をかけたつて、何時も干乾びてがつついてるんだからね。

ダキツド つまらない、俺達には金があり過ぎるんだよ、スウラ。だが、わしはみんなに逢ふのが辛い、ヌリユウス。お前さんがあんな富裕を持つて來てから……

アナテマ そいつはあなたの苦しみで得られたんですよ、レイゼル。

ダキツド あの時からみんな人が悪くなつてしまつた。お前さんは餘りべこべこされるのが好きかね、ヌリユウス。だが、わしは嫌ひだ——人間は腹這ひになる犬とは譯が違ふ。お前さんは生き物のうちで一番賢い、寛大な、善人だと言はれるのが好きだらう——所が、お前さんは外の大勢の奴同様老ひぼれた月並な猶太人だ。わしはそんなことは嫌ひさ、ヌリユウス、眞理と慈悲の神の子にとつては、厳しい眞理のために死にかけて居たつて嘘を言ふのは傲慢だ。

アナテマ (物思はしげに) 富——は恐ろしい力ですよ、レイゼル。あなたが何處からお金を手に入れたか訊くものは一人もない、みんなあなたの威力を見て敬意を表するのですからね。

ダキツド 威力？ では、ナウムは？ わし自身はどうだ、ヌリユウス——わしがお金をす

つかり出したら、たつた一日でいい、健康と生命とを買ふことが出来

アナテマ あなたは目に見えてお達者におなりのやうですが。

ダキツド さうか。わしにも舞踏教師を雇つたものかね——どうだい、ヌリュウス。

スウラ ロオザを忘れちやいけませんよ、お父さん。顔の器量を隠すなんて——神様には大變な罪惡ぢやありませんか。美しさは眼を樂しませたり喜ばせるために下すつたのです、神様は顔の美しさの中にお自分の美しさを現はしていらつしやるのよ、ロオザの顔が炭や煤で汚れたり、彼の娘を恐く悲しく見せたりしてゐた時分には、妾達は神様に毎日たてついてたじやありませんか。

ダキツド 器量は凋むものだ。みんな死んぢまうよ、スウラ。

スウラ 百合だつて凋めば、水仙だつて枯れるし、黄薔薇だつて散りませう——ダキツド、あなたは花といふ花をみんな踏みにつつて、黄薔薇を悪くおつしやりたいの。疑つちやいけませんよ、ダキツド、公平な神様はあんたに富を下すつたんです——不幸福の時にはあんなにしつかりして居て、一度だつて神様のことを悪くおつしやらなかつたのに、幸福になると弱くなるも

のでせうか。

アナテマ 全くその通りです、レイゼルの奥さん。ロオザさんには勝手に撰り好みしてもいいお嬢さんがうんとありますよ。

ダキツド (立上り、怒つて) ロオザをくれてやるものか。

スウラ 何ですつて、ダキツド。

ダキツド ロオザをくれてやるものか。あいつらは金の皿から食はうとする犬だ——犬なんぞ追ひ出してやる。

ロオザ登場。彼女の服装は立派だが、單純で餘計な所がない。幾分蒼ざめて、少し疲れてゐるが、大變美しい——彼女からは月の影と光が出て来るやうだ。話すにも身動きするにも美しく見せようとして、注意して自分に氣をつけてゐるが、時々うっかりして——亂暴になり、口やかましくなる。そしてそれを氣にしてゐる。馬に乗る時の服装をした二人の紳士がロオザに睨いて来る。一人は少し年上で、ひどく蒼ざめ、氣難しさうに又毒々しく顔を擧げる。ナウムは丁度ロオザの若々しさ、力や美に防禦を求めるやうに彼女に寄り添つて弱々しく歩いて来る。

ダキツド (かなり大聲に) スウラ——お嬢さんだぜ。

スウラ (手を振り) まあ、お黙りなさい、ダキツド。

ロオザ (そそつかしく母に接吻し) ああ、疲れた、お母さん。お機嫌よう、お父さん。

スウラ 氣をおつけよ、ロオゾチカ、餘り勉強しちやいけないよ。(年上の紳士に向ひ) あまり仕事をしないやうに言つて下すつたらね。——どうしてさう仕事をしなくちやならないんでせう。

若い紳士 (靜かに) お嬢さんのために祈りしなくちやなりません、レイゼルの奥さん。もう直きお嬢さんのためにお寺が建ちますからね。

年上の紳士 (笑ひながら) お寺の傍には——墓場もね。レイゼルの奥さん、お寺の傍には何時だつて墓場があるものですよ。

ロオザ さよなら。あたし疲れたわ。おひまでしたら——明日の朝いらつしやいね——きつと又お一緒に行かれますわ。

年上の紳士 (肩を揺り) おひま? え、え、無論ひまですとも。(鋭く) さよなら。

若い紳士 (溜息して) さよなら。

兩人退場。

スウラ (心配さうに) ロオゾチカ、お前、あの方に失禮したんでせう。何だつてお前さうなの。

ロオザ 何でもないのよ、お母さん。

アナテマ (ダキツドに) ありや未だ婚とはゆきませんな、ダキツド。

ダキツドは苦笑する。アナテマは性質を押へられないで、ロオザの方へ飛んでゆき、彼女に手を差出す。彼は手風琴で弾いたのと同じモチイヴを口笛で面白さうに吹きながら彼女を半ば踊りながら連れて行く。

アナテマ ああ、ロオザさん、年が若くて(口笛を吹く)病氣でなけりや(口笛を吹く)わたしが第一にあんたに結婚の申込みをしたでせう。

ロオザ (笑ひながら、高慢に) 死ぬよりか病氣の方がましさね。

ダキツド お前さんは大變面白い人だね、ヌリュウス。

アナテマ (口笛を吹きながら) 富もなきやあ、穩かな良心もないんですよ、ダキツド、穩かな良心もね。することが無いものだから、かうして腕を組んで歩いてるんです。死——さう言ひ

ましたね、ロオザさん。

ロオザ やつてごらんなさい。

アナテマ (立止まり) ロオザさん、兎に角あなたは美しい。(考へに沈んで) だが、若し……若し……駄目だ。何より義務だねえ、ロオザさん、例へ暗の公爵にした所で、公爵より下の者に身を委しちやいけませんぜ。

ナウム ロオゾチカ、どうして僕から離れちまうの。お前が手を握つてくれないと寒いんだよ。手を握つてよ、ロオゾチカ。

ロオザ (躊躇して) だつて、着更へをしなくちやならないのよ、ナウム。

ナウム 寢室まで送つてつて上げるよ。僕、今日も踊つたよ、大變巧かつたぜ、知つてる？ 今度はそんなに息が切れなかつたよ。(崇拜と軽い嫉妬の感情を籠めて) お前は本當に綺麗だな、ロオゾチカ。

スウラ お待ち、ロオゾチカ、わたしが髪を梳いて上げよう。いいかい。

ロオザ だつて、下手なんですもの、お母さん。梳いて下さるより接吻なさる方が多いわ——

接吻すると髪がこんがらかつちまうのよ。

ダキツド それでもお前はお母さんに返事をしてるのかい、ロオザ。

ロオザ (立止まり) 何だつて、あたしの器量を憎むの、お父さん。

ダキツド 昔はお前の器量が好きだつたよ、ロオザ。

スウラ (反抗して) まあ、何をおつしやるの、ダキツド。

ダキツド さうだね、スウラ。わしは眞珠が海の底にあるうちは好きだが、拾ひ上げられりや血になつちまうんだ——さうなるとわしは眞珠が嫌ひだよ、スウラ。

ロオザ 何だつてあたしの器量を憎むの、お父さん。他の娘があたしだつたら何をするか知つてて？——きつと気が狂つて、ピンを呑んだ犬みたいに地面を匍ひすり廻つてよ、所が、あたしは何をしてるでせう。勉強よ、お父さん。晝も夜も勉強よ、お父さん。(強く興奮して) あたし何も出来ないじやないの。話すことも、歩くことも出来ない——腰を曲げて、腰を曲げて歩くじやありませんか。

スウラ そんなことはないよ、ロオザ。

ロオザ (興奮しながら) まあ、あたし一寸ぼんやりしちやつたわ——怒鳴ったり、風邪を引いた鳥みたいに嘎れ聲でかあかあ言つたりして。あたし美人になりたいの、美人にならなくちゃならないんだわ——そのために生れたんですもの。笑ふの？ 駄目よ。知つてて、あなたの娘が公爵夫人に——王女になるのを。あたし王冠が冠りたいわ、それから笏も持ちたいの。

アナテマ おやおや。

三人退場。ダキツドは彼等の退場するのを待つて席から飛び降り、素早く部屋の中を行つたり来たりする。

ダキツド 喜劇だ！何といふ喜劇だ、ヌリュウス。昨日は天に向つて餅をねだつた癖に、今日は王冠でも足りないと言ふんだ。明日になつたらサタンの玉座を奪ひ取つて、その上へ坐ることたらう、ヌリュウス、そしてしつかり御腰をすへることたらうて！何て喜劇だ。

アナテマはもう表情を變へる。いかめしく氣難かしさうである。

アナテマ いや、悲劇だ、ダキツド・レイゼル。

ダキツド 喜劇だよ、ヌリュウス、喜劇だ——あの中にサタンの笑ひ聲を聞かなかつたかね。

(戸の方を指差し) お前さんは踊りをする死屍を見た筈だ——わたしは毎朝見るんだから。

アナテマ ナウムがそんなに危ないんですか。

ダキツド 危ないつて？ 醫者が三人に、眞面目な紳士が三人、昨日、彼を見て、わしにそつと話してくれたんだよ、ヌリュウス、一月もたつたらナウムは死ぬ、もう半分以上は死屍だつて——夢じやないかな、ヌリュウス。ありやサタンの笑ひ聲じやないかね。

アナテマ じゃあ、あなたの健康のことは何と言ひましたね、ダキツド。

ダキツド 訊いても見なかつたよ。お前も音楽につれて踊れるぞ、ダキツド、なんて言はれたくないからな。お前さん好きかね、ヌリュウス、白い大理石の部屋で踊る死骸が二つてやつは。陰鬱に毒々しく笑ふ。

アナテマ 吃驚させちやいけませんよ。あなたの心の中はどうなんです。

ダキツド わしの心に觸つちやいけない、ヌリュウス——心の中には恐怖があるんだ。

両手で頭を揉む。

ダキツド ああ、どうしたらいいんだ、どうしたらいいんだ。わたしは世界中で一人ぼつちなん

だ。

アナテマ どうしたんです、ダキツド、落ち付くんですね。

ダキツド (アナテマの前に立止まり、恐怖を抱いて) 死だ、ヌリユウス、死ぬんだよ。お前さんがわし等に死を持つて来たんだ。わしは死の前に無言であたではないか。わしは友達でも待つやうに死を待つてゐたではないか。だが、お前さんは富を持つて来た——わしは踊りたい。わしは踊りたい、だが、死がわしの心臓を掴んでゐる。わしは食ひたい、わしの骨の随までも飢えがはいり込んで来たからな——所が、わしの古びた胃袋は反つて食物を放り出してしまふのだ。わしは笑ひたい——所が、わしの顔は泣いてゐるし、眼は涙を流し、魂は死の恐怖に吠えてゐるんだ。わしの骨の中には飢えが潜み、血の中には毒がはいつてゐる——わしには救ひがない。死に掴つてしまつたんだ。

憂悶する。

アナテマ (意味ありげに) 貧乏人達があなたを待つてゐますよ、ダキツド。

ダキツド で、どうだつて？

アナテマ 貧乏人達があなたを待つてゐるんですよ、ダキツド。

ダキツド 貧乏人は何時でも待つてゐるものさ。

アナテマ (厳しく) 今になつてあなたがまるで滅びてしまつたのが解りますよ、ダキツド。あなたは神様に捨てられたんです。

ダキツドは立止まつて愕き且つ怒つて眺める。アナテマは傲慢に頭を投げ出しながら、程かにかめしく彼の視線を堪へてゐる。沈黙。

ダキツド それがわしに言ふことかね、ヌリユウス。

アナテマ さうです、あなたに言ふことですよ、ダキツド・レイゼル。もつと氣をつけた方が宜うがすぜ、ダキツド・レイゼル——あなたはサタンに征服されていらつしやる。

ダキツド (愕いて) ねえ、君、ヌリユウス、嚇かしちやいけな。わしが腹の立つことでもしたかね、お前さんがそんなひどい恐ろしいことをいふやうなことでもしたのかね？ お前さんは何時もわしやわしの子供にあんなに親切にしてくれたのに……お前さんの髪はわしのやうに白い、わしはお前さんの顔に隠れてゐる苦しみにとうから氣がついてゐる……わしはお前さん

を尊敬してゐるんだ、ヌリユウス。何だつてさう黙つてゐるんだね。お前さんの眼の中には何だか恐ろしい火が燃えてゐる——一體何者だね、お前さんは、ヌリユウス。だが、黙つてゐる……いけない、いけない、下を向いちやいけない。下を向くとわしは餘計怖くなるんだ。そんなことをするとお前さんの額に何だかぼんやりした、恐ろしい——死の眞理の火のやうな筆跡が出て来るんだ。

アナテマ (優しく) ダキツド。

ダキツド (嬉しそうに) ものを言つたね、ヌリユウス。

アナテマ 黙つて聞くがいい。わしはお前を狂氣から理智へ——死から生へ戻してやらう。

ダキツド 黙つて聞いてゐるよ。

アナテマ ダキツド・レイゼル、お前は一生かかつて神様を探した、所が、神様がお前の所へ来ると——お前は「お前なんか知らんよ」と言つたんだ、それがお前の狂氣だ。ダキツド・レイゼル、お前は暗がりで自分の圓を廻る馬のやうに、不幸に眼が眩んで人に氣をつけなかつた、そして病氣と富とを抱きながら孤獨でゐたんだ。お前の死はそこにあるのだ。あそこの處で生が

お前を待つてゐる、だが、盲目のお前は生の前へ戸を締めてしまつたのだ。踊れ、ダキツド、踊るがいい——死は弓を上げてお前を待つてゐる。もつと優美に、ダキツド・レイゼル、もつと優美に、足をもつと巧く廻して。

ダキツド わしに何をくれといふのだ？

アナテマ 神様に貰つたものを返してしまふがいい。

ダキツド (陰氣に) だが、神様はわしに何か下すつたかね。

アナテマ お前のポケットの金は——みんな飢えた奴の心臓を突き刺す刀だ。乞食に所有物を分けてやれ、飢えてゐる者にパンをくれてやれ——さうすればお前は死に打ち勝てるのだ。

ダキツド ダキツドがひもじい思ひをしてゐた時には、パンの上皮さへ呉れるものがなかつた——あいつらを満腹させたら、わしは骨まで滲み込んでゐるこの飢えを満足させることが出来るかしら。

アナテマ さうすりや、お前は満腹するといふものさ。

ダキツド 健康と力は返したものだらうかね。

アナテマ さうすりや、お前は強くなるよ。

ダキツド もう水のやうに薄い血の中に混つてゐる死を、乾いた鎖のやうに堅いわしの血管の中を流れてゐる死を追ひ出せるだらうか。生命を取戻せるだらうか。

アナテマ あいつらの生命でお前の生命は延ばせる。今、お前には心臓が一つしかない、ダキツド——だが、お前は心臓を百萬も持つようになるだらう。

ダキツド だが、わしは死んでしまふ。

アナテマ いや、お前は不死だ。

ダキツドは恐怖に捕はれて後退する。

ダキツド お前さんの唇は随分恐ろしいことを言ふ。不死を約束するお前さんは何者だ——人間の生命も死も神様の自由なのではないか。

アナテマ 神様は、生命に依つて生命を取り返せとお仰になつたよ。

ダキツド だが、人間は悪逆非道だ、飢えた者は満腹したものより神様の近くに居る。

アナテマ ハンナやヴェニアミンを思ひ出すがいい……

ダキツド 黙れ。

アナテマ ラファイルや可愛いモイシエを思ひ出すがいい……

ダキツド (苦しんで) 黙れ、黙れ。

アナテマ 冬の冷たい枝の上で死んだお前の可愛い小鳥を思ひ出すがいい……

ダキツド 苦しさに泣く。

アナテマ 雲雀が青空で鳴くと、お前は「黙れ、可愛い小鳥——神様はお前の歌なぞ聞きたくないよ」と言ふかね。そして小鳥が飢えて居ても穀粒をやらないかね。暖かいやうに、春まで聲を貯つて置かれるやうに、寒いので胸の中で包んでやらないかね。小鳥を可哀さうにも思はず、子供達を嵐の中へつき出す不仕合なお前は一體何者だ。お前の可愛いモイシエがどうして死んだか思ひ出して見るがいい。ダキツド、思ひ出して、人間は悪逆非道でわしの情なぞ受ける値打がないと言つてやるがいい。

恐ろしい重味に押へつけられたやうにダキツドは膝を折り、空からの打撃に頭を守るやうに両手を上へ舉げる。暖れ聲で言ふ。

ダキツド アデノイ、アデノイ。

アナテマは両手を胸に組みながら、無言のまま彼を眺めてゐる。彼は陰鬱である。

ダキツド お許し下さい、お許し下さい。

アナテマ (早口に) ダキツド、貧乏人達がお前を待つてゐる。今に歸つてしまふよ。

ダキツド いけない、いけない。

アナテマ 貧乏人達は何時でも待つてゐる、だが、あいつらは待ち疲れて歸つてしまふよ。

ダキツド (奇妙な風に) 歸るものか。ああ、ヌリユウス、ヌリユウス……ああ、賢いヌリユウス、ああ、馬鹿なヌリユウス、わしはもうとうから貧乏人達を待つてゐたんだ、あいつらの聲がわしの耳にも心にもついてゐるんだ、それがお前さんに解らなかつたのかね。車の輪といふものはな、雨にたたかれた埃り路を行くと、くるくる廻つて跡を残しながら「ほら、わしらが路を作つてゐるんだ」と、かう思ふものさ。だが、路はあつたんだ、ヌリユウス、路はとうからあつたんだよ。(快活に) 貧乏人達を此處へ呼んでくれ。

アナテマ ダキツド、誰を呼んでゐるのか考へて見るがいい。(ぼんやりと) 欺しちやいけないぜ

ダキツド。

ダキツド わしは欺したことなぞ一度だつてありやしないよ、ヌリユウス。(きつぱりと教堂と) お前さんは饒つてゐたのに——わしは黙つて聞いてゐた、今度はお前さんが黙つて聞くんだ。わしは自分の魂を人間にやつたんじゃない、神様に差上げたのだ、そして神様の力はわしの上にある。で、わしはお前さんに命令するが、わしの妻のスウラと子供のナウムとロオザとを此處へ呼んでくれ、家に居るものはみんな呼んでくれ。

アナテマ (従順に) 呼びませう。

ダキツド 外庭でわしを待つてゐる貧乏人達を呼んでくれ。それから通りへ出て、彼處でわしを待つてゐる貧乏人は居ないか見てくれ、若し見つかつたら呼んでくれ。わしの唇は彼等の渴望で燃へてゐる、わしの腹は彼等の飢えで限りなく苦しんでゐる、わしは民衆の面前で、わしの最後の不易の意志を傳へたいのだ。行け。

アナテマ (従順に) かしこまりました。

アナテマは戸口までダキツドの命令するやうな動作に答へながら退場する。沈黙。

ダキツド 神様の生氣がわしにかかつて、髪の毛が頭の上で立ち上つたのだ。アデノイ、アデノイ……彼奴がわしの死んだ可愛い子供達のことを言ひ出した時に、あの老耄れのヌリュウスの聲色を使つた恐ろしい男は誰だらう——あんなに正確にわしの心に當るのは、全智者の弓を離れた射撃だけだ。わしの可愛い小鳥達……本當にあなたは深淵の端でわしを支へて、悪魔の爪からわしの魂を引き離してくれたのだ。太陽を眞面に見る者は盲目になるものだが、時さへ経てば蘇み返つた眼にも光が歸つてくる。だが、暗を見る者は永久に盲目になるものだ。わしの可愛い小鳥達……(突然静かに嬉しさに笑ふ、そして囁く) わしは自分で彼等にパンと牛乳を持つて行つてやらう、わしは氣附かれないやうに寢臺の帳の蔭に隠れよう——子供達は優しくつて臆病なものだ、そして見ず知らずの人間を怖がるものだ、わしはこんな怖ろしい髭が生えてるからな。(笑ふ) わしは寢臺の帳の蔭に隠れて、彼等の食ふ様子を見て居よう。彼等には一寸あればいい。パンの片塊さへ食へば澤山なのだ、牛乳を一杯飲めばそれで喉の乾きを知らない。それから彼等は歌を唄ふ……だが、どうもおかしい、太陽が上れば夜は行く筈だ、嵐が止めば波は牧場に休む羊のやうに静かにひっそりする筈ではないか——だのに、一體何處

から不安や、軽い困惑や恐怖が來たのだらう。眼に見えない不幸の影がわしの魂の上を通つて音もなしにわしの思想の上を飛んで行く。ああ、わしが貧乏で、誰にも知られずに、埃塵の積つた垣の蔭で凍えてしまつたらなあ——あなたはわしを山の頂上へ上げて、わしの老耄れた、悲しさうな顔の世界にお見せなすつたのだ。だが、それがあなたの意志なのです。あなたが命令なされば——羊も獅子になるし、あなたが命令なされば——怒つた女獅子も力に満ちた乳頭を嬰兒に差し出すのです、あなたが命令なされば——日蔭に蒼白めてゐるダキツド・レイゼルも、平然として太陽に向つて立上りませう。アデノイ。アデノイ。

スウラ、ナウム、ロオザの三人愕いて登場。

スウラ どうしてあたし達をお呼びになつたの、ダキツド。お命令を傳へた時、あなたのヌリュウスはどうしてあんなに厳しい様子をしてたのでせう。あたし達は何にもあなたに悪いことをした覚えはありませんけれど、何かしましたらよくお調べ下さいまし、でも、そんな怖い顔はなさらないで。

ロオザ 掛けてもいいこと？

ダキツド 黙つて待つておいで。わしの呼んだ者は未だみんな来て居ない。ロオザ、疲れてるのならお掛け。だが、時が来たら立つんだよ。お前もお掛け——ナウム。

召使、即ち英國の大臣に似た下男、小間使、料理人、園丁、臺所女、その他、決し兼ねたやうに登場する。狼狽へてこたごたする。殆んど同時に十五人内至二十人ほどの一隊の貧乏人が登場する。その中には、アブラム・ヘツシン老人、ソソカの娘、ヨシフ・クワイツキイ、サツラ・レエブケその他若干の猶太の男女がある。然し、希臘人も居れば、モルダキヤ人も露西亞人、單に生活に喘まれた貧乏人、糞糞や塵埃に汚れた無籍者等がある。醉漢が二人。希臘人プリクセス、イロン・ベズクライニイ、刺落ちた壞れてびいびいふ樂器を持った手風琴師も其處に居る。然しアナテマは未だ登場しない。

ダキツド どうぞ、どうぞ。もつとすつとお這入り下さい、闕の上にお立ちにならないで、後から未だ来る人がありますからな。だが、足だけはお拭き下すつた方が結構ですな。この立派な家はわしのものじゃない、貰つた時そつくりいきちんとして返さにやなりませんのでね。

ヘツシン わしは未だ絨氈の上をどう歩いたらいいか知らねんでね、御子息のナウムさんが持つておいでのやうな漆塗の靴は持つちやねえんでさ。今日は、ダキツド・レイゼル。あんたの所に平和あれ。

ダキツド お前さんもな、アブラム。だが、昔はダキツドと呼ぶだけだつたのに、どうしてダキツド・レイゼルだなんてしやれた呼び方をするんだね。

ヘツシン 今じやあなたは強勢なもんだからな、ダキツド・レイゼル。さうだ、昔はあんたをダキツドだつて言つたもんだが、今じやあんたを外庭に待つ身分だからね、わしがあんたを待つては待つだけあんたの名前は長くなるんでさ、ダキツド・レイゼルさま。

ダキツド 全くだ、アブラム。太陽が沈んで行くと影は長くなるし、人間が小さくなると——名前が大きくなるものさ。だがね、アブラム、もう少し待つてゐてくれ。

下男 (醉漢に) もつとあつちへ行つてくんねえ。

醉漢 黙つてろ、馬鹿。手前はここの下男じやねえか、俺達あお客様だぞ。

下男 畜生。唾をはくやうな居酒屋にゐるのは譯が違ふぞ。

醉漢 レイゼルさま、老害れた悪魔みてえな奴が俺の襟首をふんずかまへて、かう言つたんださ、「財産の相続をしたダキツド・レイゼルがお前をお呼びだ」つてね。そこで俺あ「どうしてだ——つて訊いたんでさ。そいつは「ダキツドはお前を相続人にしたがつておいでなさる」と

言つて笑ひ出しやがつた。俺が来て見ると、あんたの下男めが俺を追ひ出さうとしやあがる。

ダキツド (笑ひながら) ヌリユウスは面白い奴だ、機會がありや冗談を忘れないからな。だがお前さんはわしのお客だ、どうぞ、一寸待つて貰ひたい。

スウラ (一寸躊躇してから、堪らなくなつて) 所で、イワン、商賣はどうだい。今ぢや競争者が少くなつたらうね?

ベズクライニイ 駄目さ、スウラ。お客がねえからね。

ブリケス (反響のやうに) お客がねえからね。

スウラ (氣の毒がり) おやまあ。お客がなくちやいけないねえ。

ロオザ お黙りなさいよ、お母さん——あたしの顔へ又煤を塗らうつての?

數人の貧乏人を前へ押しながらアナテマ登場——彼は、見た所、疲れて息を切らしてゐる。

アナテマ まあ、ダキツド、何時の間にこんなに。貧乏人達はあんたの百萬金におじけづいて

誰もわたしに躓いて來ようとしなひんです、何か欺瞞ごまかしがあると思ひやしてね。

醉漢 こいつだ、俺の襟首をふんづかまへたのは。

アナテマ おや、お前さんかい。これは、これは。

ダキツド ヌリユウス、有難う。今度はインキと紙を持つて來て、わしの傍の机に掛けてくれ。わしにはわしの古い勘定書をくれ——そこで、わしの言ふことはみんな大切なことなんだから、どうか間違へないで、きちんと書いて貰ひたい——一言一言神様にお知らせするんだからな。皆さん、どうぞ、立つて、わしが之から言ふ立派な言葉の意味を呑み込んで、よつく聞いて戴きたい。(嚴かに) お立ち、ロオザ。

スウラ 神様、わたくし共をお憐み下さいまし。何をしようといふの、ダキツド。

ダキツド 黙りなさい、スウラ。お前はわしに躓いてくればいい。

アナテマ よろしい。

一同立上つて聞く。

ダキツド (堂々と) わしの兄モイセイ・レイゼルが死んだので、わしは (勘定書を脇へ置き) 二

百萬弗の財産相続をしたのだ。

アナテマ (四本の指をそばと上げ) つまり四百萬圓ルッパだ。

一同興奮する。

ダキツド (厳かに) 邪魔をするな、ヌリユウス。さうだ、つまり四百萬圓ルッブです。そこで、わしはわしの良心と神様のお命令に従つて、且つは幼時に飢えと病氣のために死んだわしの兒、ハンナ、ゼニアミン、ラファイエル、それからモイセイの記念のため……

彼は頭を段々低く垂れて苦しさうに泣く。スウラも同じやうに涙を流して彼に答へる。

スウラ ああ、わたしの可愛いモイシエーダキツド、ダキツド、可愛いモイシエは死んだのね。
ダキツド (大きな赤いハンケチで眼を拭きながら) お黙り、スウラ。わしは何を言はうとしたのかしら、ヌリユウス？……だが、書いてくれ、ヌリユウス、書くんだ。わしは知つてる。(しつかりと) そこで、わしは眞理と慈悲の神の法則に従つて、——わしの全財産を乞食達に分配することに決心したのだ。わしの言ふ通りかね、ヌリユウス。

アナテマ 神様のお言葉を聞いてるやうです。

初めのうちは誰も信じない、然し嬉しさうな疑は急速に大きくなつて、豫期しない暗い恐怖が頭上を翔ける。丁度夢の中のやうに一同は魁盛されて「四百萬圓、四百萬圓」と繰り返して、兩手で眼を被



ふ。前へ手風琴師が進み出る。

手風琴師 (陰気に) わしに新しい楽器を買つてくれるかね、ダキツド。

アナテマ しつ。下れ、音楽家。

手風琴師 (後退りして) 新らしい猿も欲しいんだ。

ダキツド 不幸な人達、心を楽しくして、天の慈悲に對して唇に微笑を浮べて答へてくれ。幸福の報知者となつて此處から町へ行き、通りや廣場を大聲に「今に死ぬ年取つた猶太人ダキツド・レイゼルが遺産を貰つたから、貧乏人達に分けてくれるんだ」と怒鳴つてくれ。泣いてる人間や、血の氣のない濁つた眼の子供や、毛録した羊のやうに胸のこけ落ちた女を見たら「行け、ダキツドがお前さん達を呼んでゐる」と言つてくれ。その通りだな、ヌリユウス？

アナテマ さうです、さうです。だが、みんなお呼びですか。

ダキツド 吐いた上へ寝てゐる酔拂ひを見たら、そいつを起して「行け、ダキツドが呼んでるぞ」と言つてやつてくれ。市場で毆られてゐる盜坊を見たら、親切に命令する力のある言葉で「行け、ダキツドが呼んでゐるぞ」と言つてくれ。困つた揚句、憤怒と憎惡に陥つてお互ひに杖

や煉瓦の片塊で殴り合つてゐる人達が居たら、「行きなさい、ダキツドが呼んでゐなさる」と平和を通知してくれ。大通りを歩きながら、見られてゐると下を向く癖に、後からだどじろじろ眺める羞かしがり屋を見たら、その男の誇りを傷つけないように「ダキツドを探してるのじやないかね。行きなさい、あの人はさつきからお前さんを待つてゐらつしやる」とそつと言つてやつてくれ。それから、悪魔が夜の種子を地に播く晩に、異教徒が死屍を塗るくらいこつてり塗りたてて平氣で見たり、外分も失く肩を聳やかしたり、殴られるのを心配してゐる女を見たら「行きなさい、ダキツドがお呼だ」と言つてやつてくれ。わしの言ふ通りかね、ヌリュウス。アナテマ さうですとも、ダキツド。だが、みんなお呼びですかね。

ダキツド 憎悪と恐怖とを浸み込ませるどんな手段も貧乏を取りはしない、悲しみはどんな色でも塗られはしない、苦しみはどんな言葉でも守られはしない、大聲で疲れた者達を起し、生命の言葉で死人に生命を戻してやつてくれ。壁で路を塞いでゐる時に沈黙と闇を信じてはいけない。大きな聲で沈黙と闇に怒鳴つてやれ、そこには言ひようのない恐怖がゐるのだから。

アナテマ さうです、さうです、ダキツド。あなたの魂が頂上へ昇つて、あなたが永遠の鐵門

を「開ける」とひどく叩くのが見えますよ。私はあなたが好きだ、ダキツド、私はあなたの手に接吻しませう、ダキツド、私は犬みたいに腹這ひになつて、あなたの命令通りにしようとしてゐるのですよ。お呼びなさい、ダキツド、お呼びなさい。立て、大地よ！北よ南よ、東よ西よ、俺は御主人ダキツドの意志に依つてお前達に命令するのだ、呼ぶ者の聲に答へよ、涙の四つの大海となつて御主人の足下に來い。お呼びなさい、ダキツド、お呼びなさい。

ダキツド (兩手を上げ) 北よ南よ……

アナテマ 東よ西よ……

ダキツド ダキツドがみんなを呼んでるぞ！

アナテマ ダキツドがみんなをお呼びだぞ！

混亂、涙、笑聲。今度は一同信する。アナテマはダキツドの手に接吻し、すっかり有頂天になつて行つたり來たりする。手風琴師の襟首を掴んで真中へ引張つて來る。

アナテマ ねえ、ダキツド——音楽家でさ。(哄笑して手風琴を振る) 本當にお前この古樂器がいやなのかい、え？ 新らしい猿が入るのかい。えつ？ きつと、蚤取粉が欲しいんだらう——

—御願ひしろよ、何でもくれてやるぜ。

ダキツド 静かに、ヌリユウス、静かに。もう仕事をしなくちやならん。お前さん、勘定は出来るかい、ヌリユウス。

アナテマ 私が、おお、ダキツド先生！私自身が数字で、勘定でさ、私は——量で、尺度ですよ。ダキツド じゃあ、坐つて、書いてくれ、それから勘定も。だが、わしの可愛い子供達よ、わしは葱を十片に分けることの出来る年取つた猶太人だ、わしは人間に入るものを知つてゐるばかりではない、油蟲の飢えた原因も見たんだ、それに——可愛い子供達が飢えて死んだのもな……(頭を垂て深く溜息をする)わしを欺さないでくれ、どんな事にも勘定と分量のあるのを忘れないがいい。十錢入る所で三拾錢くれと言つちやいけない、粟一粒で濟む所を二粒くれと言ふな、一人には餘計なものでも外の者には何時だつて必要だからな。兄弟があつても母親は一人だ、乳房が張り切つてゐたつて直ぐ小さくなつてしまふものだ、お互ひに怒つてはいけない、親切で注意深い母親を苦しめてはいけない……初めてもいいかね。ヌリユウス、用意は出来たかい？

アナテマ よろしい。待つてゐるんです、ダキツド。

ダキツド じゃ、どうぞ、順に並んで下さい。お金は今ないんです、アメリカに未だあるんですがね、誰にどれだけ入るんだかきちんと書いて置かう。

スウラ ダキツド、ダキツド、あたし達をどうするの。ロオザを御覽なさい、可哀さうなナムを見てやつて下さい。

ナムは茫然としてゐる——何か言はうとするが出来ない。力無く指を擴げて空を掴む。彼から少し離れて、只一人若々しい、力があつて美しいロオザが、之等の貧乏人、瘦せかけた顔や、平べつた、丁度歴し潰されたやうな胸、惨めな唇の中に立つて、挑むやうに父を眺めてゐる。

ロオザ あたし達は町で集めて来たこんな子供達よりも少ないの、あたし達は死んだ子の兄妹じゃないの。

ダキツド ロオザの言ふ通りだ、お母さん、みんなそれ相應に貰へるんだよ。

ロオザ 本當？ でも、みんなにどれだけ上げたらいいか知つてて、お父さん。

輕蔑するやうに手を動かして路を求めながら、苦しさに笑つて退場しようとする。

ダキツド (優しく悲しそうに) 此處に待つておいで、ロオザ。

ロオザ 此處に居たつてすることがないんですもの。あたし、お父さんがみんなをお呼びになつたのを聞いてたのよ……ああ、大きな聲で呼びなすつたわ……でも、器量のいい人を——お呼びなすつたの？ 此處に居たつてすることがないんですもの。(退場する)

スウラ (愚圖愚圖と立上り) ロオゾチカ！

ダキツド (同じく微笑を浮べて優しく) 此處においで、お母さん——何處へ行くんだね。お前は——わしと一緒に居なくちやいけないよ。

ナウム二三歩ロオザの後から蹠いて行く、それから引返して、元氣なく母の傍に坐る。

ダキツド いいかい、ヌリュウス？ では、第一番に居られる名譽の方が来て貰ひたい。

ヘツシン (近寄り) さあ、わしでさ、ダキツド。

ダキツド 名前は？

ヘツシン アブラム・ヘツシン……だが、お前さん、わしの名を忘れたのかね——子供の時分にや一緒に遊んだじやないか。

ダキツド しつ！ きちんとするにはさうしなくちやならんよ、アブラム。名前をはつきり書

いてくれ、ヌリュウス。この人が第一番にわしを待つてゐたんだ、わしの神様の御心はこの人の上に現はれたのだ。

アナテマ (努力して書く) 第一番……私は後で書類に線を引きますよ、ダキツド。第一番、ア

ブラム・ヘツシン……

ナウム (静かに) お母さん、僕はもう踊らないよ。

—幕—

第四幕

歪んだ柱や、打捨てられた古番小屋のある同じ埃りつばい路。同じ店。以前と同様太陽は用捨なく照りつけてゐる。

然し路の上、店の傍は以前と違つて人が大勢居る……自分の財産を乞食達に分けてやつたダキツド・レイセルを迎へるために、貧乏人達が大量集つてゐる、そして白熱した空気は叫び聲や動き廻るのや、面白さうにはせ廻るので一杯である。幸福なブリクスマヤズクライニイヤソソカは、自分の家に商品の澤山あるのを誇つて、景氣よくソオダ水や糖果などを商つてゐる。然し、自分の店の傍にスウラ・レイセルが昔のまま小さつぱりとはしてゐるが、貧しい服装をして坐つてゐる。息子のナウムが肺病で死に、美しいロオザが多額の金を握つて行衛知れずなつてから、スウラは富を嫌つて、ダキツドが希望した通り好んで以前の仕事へ歸つて来るのである。もう殆んど全部の金は分配されて、ダキツド・レイセルと妻がイエルサレムまで行つて聖都の郊外で、一生を貧しく正直に終るに必要なものとして數十圓ルツプが残つてゐるだけである。

友人のアナテマと海岸へ行つたダキツド・レイセルのために莊嚴な観迎が準備されてゐる。凡ての店も、柱も、打捨てられた番小屋も、雑色の葎縷や木の枝で飾られてゐる。路の右側、焼かれて踏みにじられた草の上には歓迎のためにオオケストラが用意されてゐる——見た所、偶然に集められた種類の樂器、つまり、上等のヴァイオリンだの、木琴だの、壊れてひどくなつた喇叭だの、少し破れた太鼓などを持つた數人の猶太人である。オオケストラの仲間には弾き方は拙いが、今は他人の樂器を觀

察して辛辣に悪口を言つてゐる。

集つた人々の中に大勢の子供がゐる。まるで小さな、手に抱かれて連れて來られた乳兒さへ交つてゐる。群集の中には金を分配した最初の日に居合せたアブラム・ヘツシン、その他の貧乏人達の知つた顔がある。少し離れて、小塊壘の上に、自分の樂器を今にも弾きさうにして持つて、むつちりした手風琴師が立つてゐる。彼はもう新しい手風琴を掛て手に入れることが出來たが、新しい猿は探し出せない。彼が價を訊れた猿は全部全然能なしが、身體が弱いか、疑もない墮落の途中にあつたのである。

若い猶太人 (潰れた喇叭を吹き) だが、こいつ、何だつて同じ音ばかり出しやがるんだらう？

いい喇叭だなあ。

洋琴ヴァイオリンを持つた樂師 (興奮して) だが、俺をどうする氣なんだ——そんな喇叭を持つてダキツ

ド・レイセルのお迎へが出来る義理かい。猫を連れて來てよ、そいつの尻尾でも引きづつてさ、ダキツドがお前を息子つて言ふとでも思つてやがるんだらう。

若い猶太人 (強情に) いい喇叭だ。俺の親爺が陸軍の樂師だつた時分にやこいつを吹いたもんだ。みんな親爺に禮を言つたぜ。

樂師　そいつを吹いたなあ親爺だらうが、そいつの上へ坐つたなあ一體誰だい。何だつてそいつはさう潰されたもんだ？　そんなべちやんこの喇叭を抱へてダキツド・レイゼルのお迎へが出来るか。

若い猶太人　（涙を流し）本當にいい喇叭だ。

樂師　（殆んど泣きながら、氣難しい、刺りを當てた老人に）こいつはお前さんの太鼓かい。なにさ、こんなものが太鼓だなんて思つてるのかね。太鼓にや犬でも這ひづり込めるこんな穴があるのかい。

ヘツシン　興奮しちやいけねえ、レイブケ。お前さんは大した腕だ、お前さんの音楽は實に素晴らしい、ダキツド・レイゼルもひどく感動しようぜ。

樂師　所が、俺あ駄目だ。アブラム・ヘツシン、お前さんは立派な男だ、お前さんは永いこと娼婆の暮しをして来たんだが、何時か太鼓のこんなでつかい穴を見たことがあるかね。

ヘツシン　いや、レイブケ、こんな大きな穴を見たことはないが、そんなことあ大したことでもないよ。ダキツド・レイゼルは百萬長者になつて、二千萬圓もお持ちだつた、だのにあの人

は我儘にもならず、慎しみ深いよ、あの人はお前達の愛情をお喜びなさるんだ。魂が自分の愛情を見せるにや太鼓が入用さ。此處には太鼓も喇叭も持たず、餘りの幸福に泣いてる人達が居なさるが——その人達の涙は露みてえに音がしない、だがね、もつと高く上るんだ、レイブケ、もう少し空の方へ上るんだ、さうすりや太鼓こそ聞えまいが、涙の落ちる音が聞えるよ。

老人　喧嘩をしたり、こんな清らかな喜びの日を暗くするのはよくないね。そんなことはダキツドはお嫌ひだ。

一人の旅人が會話に聞き入つてゐる。——彼の顔は峻厳で、日焦げのために黒い。その他は皆、髪も着物も路傍の埃のために灰色になつてゐる。物思はしげな動作に注意深い所があるが、眼付は率直で眞直ぐである。そして眼は——夜中に人の住んでゐる家の明け放してある窓のやうに光がない。

旅人　あの方は地上へ平和と幸福とを持つて来なすつたのだ、もう世界中があの方のことを知つてゐる。わしはずつと遠くから来たんだ、其處の人間はお前さん方とはまるで違ふ、それに性質まで違つてゐる、苦痛と悲しみだけがお前さん方と兄弟ですよ。其處ではもうみんな、パンと幸福とをお分けなされたダキツド・レイゼルのことを知つて、あの方の名を祝福して居りま

すじや。

ヘツシン お聞きかね、スウラ。(涙を拭きながら)お前さんの亭主のことですぜ、ダキツド・レイゼルのな。

スウラ 聞いてるわ、アブラム。みんな聞いてるわ。妾、死んだナウムの聲だけが聞えない、それからロオザの舌たらずの聲もね。ねえ、お爺さん、あんたは世界を歩き廻つて、あたし達とは違つた人間を知つておいでださうだが——途中で美しい娘に、世界中で一番綺麗な娘に逢ひなさらなんだかね。

ベズクライニイ ロオザといふ綺麗な娘さんがあつたんだよ、その娘が自分の配分を貧乏人にやるのがいやだと云つて家を逃げ出したのさ。うんと金を持つてつたんだらうね、スウラ。

スウラ ロオザにしちや大金かも知れないね？じや、お前さん、王様の王冠に餘計なダイヤモンドがくつついてるとか、お天道様には餘計な光がありすぎるなんて言ふんだらう。

旅人 いいや、あんたの娘さんには逢はなんだ。大通りを來たんだが、金持も美人も居ませなんだよ。

スウラ だが、きつと大勢集まつて、一生懸命に別嬪の噂をしてゐる人を見なすつたらう？

それが妾の娘だよ、お爺さん。

旅人 いや、そんな人達には逢はなかつた。だが、大勢寄つて、バンと幸福とを分けて下すつたダキツド・レイゼルの噂をしてゐる人達なら見かけましたよ。あんたのダキツドが不治の病にかかつた女を癒したつてのは本當かね、その女はもう死んだかね。

ヘツシン (笑ひながら)なに、そりや嘘だ。

旅人 ダキツドさんが生れつきの盲人を見えるようになすつたつてのは本當かね。

ヘツシン (頭を振りながら)嘘だよ。誰かわし等とは違ふ人達を欺したんだ。奇蹟をやるのは神様ばかりさ。ダキツド・レイゼルはただの親切な偉い人だ、神様を忘れない者なら誰だつてさうならなくちやならんよ。

ブリケス いや、そりや違ふよ、アブラム・ヘツシン。ダキツドは——ただの人間じやない、あの人には人間らしくない力がある。わしはちやんと知つてゐる。

彼等を取り巻いてゐる人々は食るやうにブリケスの言葉を聞く。

ブリケス　わしはこの眼で見たんだが、人氣のない、日の照りつける街道をあの人やつて来たんだ、わしはお客だとばかり思つたが——そりやお客じゃなかつた。わしはこの眼でちやんと見たんだ、その人が手でダキツドに觸るていと、ダキツドはひどく恐ろしいお饒舌りを始めたんで、わしは聞いてられない位だつたよ。覚えてるかね、イワン。

ベズクライニイ　その通りだ。ダキツドはただの人間じゃねえ。

ソシカ　ただの人間が犬に石をぶつつけるやうに人間にお金を投げるものかね。ただの人間だつたら、死んだからといつて、生んだでもなきや可愛がつたといふでもなく、又埋めてやつたでもない他人の子供の墓場へ泣きに行くものかね。

両手に子を抱いた女　ダキツドさんはただの人間じゃありません。生みの母親よりも子供を可愛がる母親のやうなただの人を見た人があつて？　寢臺の帳の蔭に立つて、他人の子供の食ふ様子を見て、嬉しくつて泣くやうな人が？　ほんの未だ小つほけな赤ん坊だつて恐がりもしないで、お祖父さんの鬚をいぢくるやうに、その方の立派な鬚を玩具にするやうな方を。あの可愛いお馬鹿ちやんのルウヴィムが、ダキツド・レイゼルさんの立派な鬚から一房も白髪をむし

り取つたじやありませんか——それでダキツドさんはお怒りなすつたでせうか。痛くつて怒鳴つたり、足をばたばたなすつたでせうか。いいえ、あの方はまるで幸福なやうに笑つたり、まるで嬉しいやうに泣いていらつしたわ。

醉漢　ダキツドさんはただの人間じゃねえ。變人だ。俺あ、あの人に言つたんだ、わしに金を呉れるなあ如何ういふ譯だね。俺あ裸足で汚ねえには違えねえ、だが、お前さんの金で石鹼や長靴を買ふなんて思つちやいけねえ。俺あ一番近え酒場で飲んじまうんだつてね。俺あ、さう言はねえじや居られねえ、俺あ酔つ拂ひだが、正直者だからな。すると變人のダキツドさんがお人善しの狂人みてえに滑稽おかしなことを言ふじやねえか、「セミヨオン、お前さん、飲んで面白いのなら勝手に飲むがいい——わしは何も教へに來たんじやない、人を喜ばせに來たんだからね」だつてよ。

老猶太人　教師はいくらも居るが、喜ばせてくれる奴あ——居ねえもんだ。神様は人間を嬉しがらせるダキツドを祝福なさるよ。

ベズクライニイ　(醉漢に)じやあ、靴は買はなかつたのかい。

醉漢 どうして。俺は正直者さ。

樂師 (絶望して) おい、皆の衆、誰か良心を持つてるかい、人を喜ばせるダキツドさんにこんな音楽でもあるまいじやないか。わしはこんな拙いオオケストラを集めたのが恥かしいや、ダキツドさんの前で恥をかくよりや、死んだ方が餘程ましだよ。

スウラ (手風琴師に) お前さん、弾るんだらう？ 天使が合せて踊りさうな大した器械を持つてるじやないの。

手風琴師 弾るとも。

スウラ でも、猿はどうして居ないの。

手風琴師 いい猿が見つからなかつたんでさ。わしが見た猿はみんな老ひぼれか、碌でなしかまるつきり役に立たずで、蚤を取ることも出来ねえ代物ばかりでね。わしの猿が一匹蚤に食ひ殺されたことがあるが、又同じ目に逢ふのもいやだからね。猿に才能の入るなあ人間と同じでね——猿になるにや尻つ尾があるだけじや足りねえのさ。

旅人靜かにアブラム・ヘツシンに訊れる。

旅人 (靜かに) 本當のことを言つて下せえ、わしはみんなに送られて、情知らずのお天道様の下をこのよぼよぼ足で此處へ來たのも本當のことを知りたいばかりさ。人を喜ばせるあのダキツドつて一體何者かね。あの人に病人を癒させて見るがいい……

ヘツシン 人間に治療が出来るなんて思ふなあ——罪でもありや、神様に失禮に當るよ。

旅人 それでいいさ。だがね、ダキツド・レイゼルが白い石や青い硝子で大きな御殿を建てて、其處へ世界中の貧乏人達を集めたがつてるつてのは嘘かね。

ヘツシン (困惑して) 知らんね。そんなでつかい御殿が出来るもんかな。

旅人 (自信あり氣に) 出来るとも。あの人は金持から力を取つて、貧乏達に分けたがつてるつてのは本當かね。(囁聲で) 権力のある奴からは力をふんだくり、命令者からは権力を取つて、世界中の人間に、みんな同じやうに分けてくれるつてのは。

ヘツシン 知るもんか。(おつおつと) 威嚇かしちやいけねえ、爺さん。

旅人 (注意深く見廻し) 本當かね、あの人は公平に(不思議な囁聲でおどすやうに) 望みだけ一人一人に、同じやうに、白人と平等に黒人にも分けてやりたいからといふので、新らしい國を受取

る用意をしてゐるエフィオピアの黒人の所へ使者をやつたといふのは。

ダキツド・レイセルがゆつくりと歩きながら、路の曲つてゐる向ふから現れる。右手に杖を持ち、アナテマが恭々しく左手に支へてゐる。待つてゐた人々の中に興奮と騒めきが起る。樂師達は自分の樂器の方へ飛んで行き、女達は氣忙はしく遊んでゐる子供達を集める。「おいでだ、おいでだ」といふ叫び聲。「モイシエ、ムエチヤ、サツラ」などと呼ぶ聲。

旅人　それから、本當に……

ヘツシン　あの方に聞くがいいさ。あそこへおいでなすつたんだから。

群衆を見ると、アナテマは考へ込んでゐるダキツドを止めて、ゆつたりと勝ち誇つたやうな動作で待つてゐる人々の方を指差す。さうして二人は暫らく立つてゐる。ダキツドは白髪頭をふんぞらせ、アナテマは彼にくつついてゐる。アナテマはダキツドの顔へ自分の顔を近付けて何事か囁いてゐる、そして左手で指差し続ける。失望して驅け廻つてゐたレイブケはやつと自分の樂隊を集め、飛び散つてゐる色の襍練片のやうに、亂暴で多聲な、班らで面白さうな音樂(祝の後でする音樂)をやりだす。愉快な叫び聲、笑聲、子供達は前の方を這ひすり廻り、誰かが泣いてゐるし、大勢の者は祈るやうにダキツドに両手を差し延べる。ダキツドはその愉快な音の混沌の中をゆつたりと歩いて来る。群衆は彼に路を開け、大勢が杖を投げたり、着物を敷いたりする。女達は頭縮を引きちぎつて、彼の足元

の塊りつばい路上へ投げる。さうして彼は、立上りながら外の女達と一緒に彼に挨拶をしてゐるヌウラの所まで来る。音樂止む。然しダキツドは無言。混亂。

ヘツシン　どうして黙つておいでです、ダキツドさん。あなたのお蔭で幸福になつた人達が挨拶したり、あなたのお歩きなさる路に着物を擡げてゐるじやありませんか、みんなの愛情は大したもんで、喜びが胸にはいり切らん位ですぞ。何とかおつしやつて下さいよ——みんな待つてゐるんだから。

ダキツドは眼を伏せ両手で杖によりかかつて立つてゐる。彼の顔は嚴しく重々しい。アナテマは狼狽へて肩越しに彼を見てゐる。

アナテマ　あんたを待つてゐるんだすよ、ダキツド。何とか喜びをおつしやつて、みんなの愛情を鎮めておやりなさい。

ダキツド　(無言)

女　何故黙つておいでなさいます、ダキツドさま。みんな吃驚りするじやございませんか。あなたには人を喜ばせて下さるダキツドさまじやございませんか。

アナテマ (辛捧を切らして) お話なさい、ダキツド。みんな耳をいらだたせてお喜びの言葉を待つてゐるんです、あなたは石みたいに黙りこくつてみんなの魂を押しつけていらつしやる。何とか言つておやりなさい。

ダキツド (眼を上げ、嚴しく群集を見廻し) 一體こんなことまでして、わいわい言つたり、騒がしい樂隊までするのはどういふ譯だ——公爵か何か大事業を成し上げた者に似つかはしい光榮をするのは誰のためです。今に死ななくてはならんこの老ひぼれの惨めなわしのために、お前さん方は路の上へ着物を擴げなされるのか。そんなに有頂天になつて嬉しがつたり、氣狂ひじみた喜びの涙が眼から出るやうなことをわしがしたかな。わしはお前さん方にお金とパンを上げた——だが、それは神様のお金だ、神様から來て、お前さん方の手を通つて又神様の所へ歸つてゆくお金じや。わしは盜坊みたいにお金を隠して、神様を忘れた者のやうに強盜にならなかつたばかりだ。わしの言ふ通りだらう、ヌリユウス。

アナテマ いけない、ダキツド、駄目だな。あなたの話は聖人らしくもない、謙遜な人の口からそんなことが言はれたものじやない。

老人 愛のないパンは鹽氣のない野菜みたいなものさ。お腹がはつて、口の中にや、いやな苦い味が残るんだからなあ。

ダキツド わしは何か忘れたのかしら、ヌリユウス。さうだとすると思ひ出さしてくれないか。わしは年を取つて、眼がよくきかないんだ、だがね、わしは樂師達を見なかつたかしら、言つてくれ、ヌリユウス。わしの頭の上にあるのは鳥の舌のやうに斑らな旗じやないかね、聞かせてくれ、ヌリユウス。

アナテマ あんたはみんなを忘れてしまひましたね、ダキツド。子供達が見えないんですか、

ダキツド・レイゼル。

ダキツド 子供？

女達は泣きながら自分の子供達をダキツドの方へ差し出す。

聲々 わたしの息子を祝福して下さい、ダキツドさま——この娘に觸つてやつて下さいませ、

ダキツドさま。——祝福して下さい。——お觸り下さい——お觸り下さいませ。

ダキツド (兩手を空に向つて上げ) おお、ハンナにゼニアミン、おお、ラファイエルや、可愛い

モイシエ……

下方を見て子供達の方へ両手を差し延べる。

ダキツド おお、冬の枯枝の上で死んだわしの子供達よ……おお、子供達、子供達、子供達、可愛い子供達……なあ、ヌリユウス、わしは泣いては居ないだらう？ わしは泣いてやしないね、ヌリユウス？ まあ——みんな泣かせとくがいい。さあさ——樂師には弾かせといてやるがいいよ、ヌリユウス——わしはやつと解つたんだ。ああ、子供達、可愛い子供達、わしはお前達に自分のものをやつてしまつた、わしの古びた心もやつたよ、悲しみも喜びもやつてしまつたよ——わしはあれらに魂をすつかりやつたんじゃないかね、ヌリユウス。

泣き聲と涙に似た笑ひ。

ダキツド お前は又わしの魂を罪の良から引き離してくれたよ、ヌリユウス。喜びの日にわしはみんなの前に氣難かしくなつたのだ、みんなの喜んでゐる日に、この老ひぼれた悪者のわしは空を見ないで地を見てゐたのだ。わしは嘘を言つて誰を欺さうとしたのだらう？ わしは晝も夜も有頂天になつて暮してはゐないだらうか、両手一杯に愛と幸福を汲み取りはしないだらうか。どうしてわしは悲しさうな風をしたのだらう？……わしはお前さんの名を知らないが、お前さんの子供をわしに出来ないか、そら、その子だよ、あの子は伶俐だから、みんなが泣いてるのに一人だけ笑つてるのだね。(涙の中から頬笑んで)それとも、お前さんはわしがジブシイみたいにあの子を盗みはしないかと心配してるのかね。

女は跪いてダキツドに赤ん坊を差し出す。

女 どうぞ、ダキツドさま。わたし達も、わたし達の子供も、みんなあなたのものでございます。
第二の女 わたしのお取り下さいます、ダキツドさま。
第三の女 わたしのも、わたしのも。

ダキツド (子供を取り上げて、灰色の髻で包みながら胸に押しつける) ちえつ……髻だ。あゝ怖い髻だな。だが、何でもないよ、可愛い兒、もつとしつかりくつについて笑つてごらん、お伶俐さん。スウラ、此處へおいで。

スウラ (泣きながら) 妾、此處に居ますよ。

ダキツド ちよつとあちらへ行かうよ。ちき坊ちゃんはお返ししますよ、お前さん、ちよつと

連れて行くだけだから。さあ、行かう、スウラ。わしは悲しいにしろ嬉しいにしろ、お前の前なら泣いても恥づかしくないのさ。

一方へ離れて二人共泣く。年を取つて屈つた二人の背と、ダキツドが眼を拭く赤いハンケチと、涙に濡れた幼児の顔が見えるだけである。

静かに。静かに。泣いていらつしやるのだよ。邪魔をしちやいけない。静かに。静かに。

アナテマは爪先立つて「静かに、静かに」と囁きながら——樂師達に近付き、片手で指圖しながら何か説明してゐる。少しづつ騒ぎが大きくなる。もうとつくに、一杯はいつた洋杯を手にして、ベズクライニイやプリケスやソンカが待つてゐる。

ダキツド (戻つて来てハンケチで眼を拭き) 赤ちゃんをお返ししますよ、お前さん。わしらにはまるで氣に入らんのかな、さうじやないかな、スウラ。

スウラ (泣きながら) わたし達にはもう子供はありませんよ、ダキツド。

ダキツド (頬笑みながら) だつて、スウラ。世界中の子供はみんなわし達の子供ではないかね？ 子供の無いものもあれば、三人、六人、十二人もある者も居るよ、だが、子供の數を知ら

ん者はないね。

ソンカ ソオダ水を一杯召し上りませ、ダキツド・レイゼルさま——これはあなたのおソオダ水でございます。

プリケス 一杯召し上つて下さい、ダキツドさん、さうすればお客がやつて來ますから。

ベズクライニイ 高貴なクワスをお飲み下さい、ダキツドさん。今度こそ本物の高貴なクワスですよ。さうですとも、あなたのお金でみんな本物になつちまうんです。

スウラ (涙の中から笑つて) 妾何時もお前さんに言つたじやないの、イワン、お前さんのクワスはよくないつて。でも、今度本物になつてみると——もう妾に出来ないのね。

ベズクライニイ ああ、スウラ……

ダキツド 冗談だよ、イワン。有難う、だが、さうは飲めないね、みんなのを試つてみよう。之や實に甘いソオダ水だね、ソンカ。秘法が解つたからには、お前さん直き金持になるね。ソンカ もう少しソオダを入れませう、ダキツドさま。

旅人 (アナテマに向つて静かに) 本當かね——お前さんがダキツド・レイゼルさんの親しい友達

だといふのは、さう言ひなすつたね？　あの方が何か建てたがつていられるつてことは本當かね……

アナテマ　何だつてさう大きな聲をするんだ。ちよつとあつちへ行かう。

二人は囁き合ふ。アナテマは否定するやうに頭を振る、——彼は正直らしい——然し笑つて老人の背を撫でる。明らかに老人は彼を信じてゐない。順々にアナテマは少しづつ樂師達や手風琴師や人々をもう眼の届かない柱の蔭へ連れて行く。——然し騒音、叫び聲、笑聲、丁度調子を合はせるやうな樂器の短かい音等が聞える。残りの數人がダキツドと丁寧に話してゐる。

ヘツシン　本當にスウラを連れてイエルサレムへおいでですか、わたし達にや夢でもなきや見られんあの聖市へ。

ダキツド　ああ、本當だよ、アブラム。わしはずつと達者になつたし、もう胸もすつかり痛まなくなつたが……

ヘツシン　だが、それが奇蹟といふものでせうな、ダキツド。

ダキツド　喜びは身體を達者にするもんだよ、アブラム、神様にお仕へすると強くなれる。だ

が、スウラもわし達もみんなさう長生きは出来ない、だから、神様の土地の眼に見えない美しさを見たいのさ。でも、爺さん、どうして又そんなことを言ふのだね、未だわしらを許してくれなかつたのかね？

ヘツシン　（驚いて）まあ、お止しなさい、ダキツドさん。あなたが何ておつしやらうと、自殺しろとおつしやらうと、死んで見ますとも、だが、手前だなんて言やあしませんよ。あなたは——ただの人間ひとじゃあねえんでさ、ダキツドさま。

ダキツド　さうとも。わしはただの人間じゃない。わしは——仕合せ者だよ。だが、あの愉快なヌリユウスは何處に居るかね、何だか見えんやうだが。ふん、きつと、何か冗談でも饒舌つてるんだな——きつとさうだ。所で、アブラム、元氣のない風をしてこの世界の面を陰氣にしたり、草に降りた露みたいに、人生の中で、太陽の光りを受けていろんな色に光る笑聲をいやがらない人間があるかね？　うん、本當に、冗談をしてゐるな——聞えるかね。

柱の向ふで音樂。樂隊や手風琴がひどくがやがやと以前手風琴で奏されたと同じ音樂をする。音は切れ切れて、幾分荒々しく馬鹿々々しいが、妙に快活である。古びた手風琴の音を偲ばせながら、フ

リュウツトが馬鹿々々しい音をたて、何だか暖れ聲を出し、何處か側へからんで喇叭が溜息をする。音楽と同時にこちらへ来る人々が現はれる——それは完全な勝ち誇つた行列である。先頭には、むつちりして歩いて来る手風琴師と並んで、アナテマが踊つてゐるやうな足取りでやつて来る。肩から通して、革條に——手風琴と把手をつけ、それをひどく熱心に廻はしてゐる。そして鋭く口笛を吹きながら、自由の方の手で指揮をして、愉快さうな眼差した空や四方へ投げる。彼に續いて同じく踊りの足取りで樂師やはしやいだ貧乏人達がやつて来る。ダキツドの傍を通ると、アナテマは頭を一方へ曲げ、丁度彼に向つて自分の口笛や音楽や愉快さを投げるやうである。樂師達も一同もダキツドの方へ首をかしげながら通る。ダキツドは冗談に叱るやうに、笑つて首肯く、そして、灰色の大きな鞆を直す。行列は隠れる。

スウラ 何ていい音楽でせう。本當にいいわ。本當に立派だわ。ダキツド、ダキツド、みんな——あんたのためなの。

ダキツド わしらのためだよ、スウラ。

スウラ まあ、あたしが何でせう。あたし子供だけしか可愛がれないのに。あんたは、あんたは……(或る恐怖を抱いて) あんたは——ただの人間じゃないわね、ダキツド。

ダキツド さうだ、さうだ。だが、一體わしは何者だ——知事かな、將軍かな。

スウラ 冗談はお止しなさいよ、ダキツド。あんたは……ただの人間じゃないわ。

ずつと其處に居合せて莊嚴な行列を見て居た旅人は、今度はスウラの言葉に耳を傾けて首肯く、愉快さうなアナテマが幾分息を切らせて現はれる。

アナテマ どうですね、ダキツド。ひどく上出来だつたと思ひますがね。實に巧くいつた——

思ひがけない位でしたね。どうもあの拙い喇叭だけが……

踊りの足取りで、口笛を吹きながら、丁度彼に過去のことを思ひ出させるやうに、再びダキツドの前を通り過ぎる。哄笑する。

ダキツド (やさしく) うん、ヌリュウス。實にいい音楽だつたよ。あんなのは未だ聞いたことがない。お前の冗談でみんなひどく満足したんだね。

アナテマ (旅人に) 氣に入つたかね、お爺さん。

旅人 氣に入つたね。可なりよかつたよ。だが、世界中の人間がダキツドさんの足下にひれ伏したらどうなるだらうね。

ダキツド (驚いて) 何を言つてるのかね、ヌリユウス。

アナテマ ああ、ダキツド。こりや素晴らしい、犂が嫁に惚れるやうにみんなあんに惚れてますぞ。千里も向ふから来たこの不思議な人が……

旅人 もつと先だよ。

アナテマ ダキツド・レイゼルは奇蹟をしないかねつて訊いたんですよ。まあ——笑つちやいましたね、おかしいの何のつたら。

ヘツシン わしにも同じことを訊いたよ、だが、わしは滑稽しかなかつたね。待つてる者の耳は長いものさ——石が歌ふのだつて聞えるんだからな。

旅人 盲人は小刻みに歩くが、永いこと考へるものだよ。

離れて、影のやうにすつと遠くでダキツドを見張つてゐる。もう日没に近く地は影に抱かれる。空気は別離の深い静寂に満たされ、薔薇色の暖かい太陽を知つてゐる埃は夢のやうに横はつてゐる。明日は灰色の埃を重い轍が立たせるだらう、啞のやうな神秘的な行列の足音が幻のやうに現はれたり消えたりする、風が埃を吹き、水がまかれる——今日は薔薇色の暖かい、太陽を知る埃は光り、陽気に

なり、平和と美の中に休むのである。

アブラム・ヘツシンはダキツドに別れを告げて去る。商人達は商品を集めて、店を閉じる用意をする。静寂と平安。

アナテマ (休んで) やれやれ、おしまひだ。随分働きましたね、ダキツド——あの喇叭め(耳をふさぎ) 仕様がないな。(はつきりと) こいつあ不幸ですよ、ダキツド——この耳と來たら恐ろしく聴いんでさ、堪りませんよ、ええ、まるで犬の耳みたいだ。聞きさへすりや……

ダキツド わしはひどく疲れたよ、ヌリユウス、休みたいな。今日はもう人に逢ひたくないんだが、お前さん怒つちやいかんよ、ねえ、お前さん……

アナテマ 解りました。お案内申しませう。

ダキツド 行かう、スウラ——お前と二人でこのいい日の残りを穩かに嬉しく暮したいよ。

スウラ あんたはただの人間じゃありませんわ、ダキツド。わたしの望みをどうお推察りなすつて？

柱の方へ去る。ダキツドは立止まつて、後を眺め、スウラの肩によりかかりながら言ふ。

ダキツド　ごらん、スウラ。此處がわし達の一生を過した所だよ、——本當に此處は悲しさうで蒼ざめてるね、スウラ、荒れ果てて人の住む様子もない。だが、スウラ、わしが人の運命の偉大な眞理を知つたのは此處じやないかね。わしは貧乏で、孤獨で、今にも死にさうな、海の波に返事を求めてゐる馬鹿な老ひぼれだつた。だが、みんなが來たんだ——わしは獨りぼつちだらうかな。わしは貧乏で死にさうなのかな。なあ、ヌリユウス、人間は死ぬものぢやないよ。どんな死だね。死つて一體何のことだね。死なんて——悲しい言葉を考へ出したのは、一體どういふ悲しい人間なんだ？　大方、死はあるにはあるだらうが、わしは知らんよ——だがわしは、ヌリユウス……わしは不死だよ。

丁度輝かしい打撃に打たれたやうに、身體を曲げるが、兩手を上方へ上げる。

ああ、恐しいことだ、わしは不死だ。空の涯は何處だ——わしは失くしてしまつた。人間の最後は何處にある——わしは失くしてしまつたのだ。わしは——不死だ。ああ、人間の胸は不死に痛み、人間の喜びは火のやうに燃へるのだ。人間の最後は何處にある——わしは不死だ。アデノイ、アデノイ。人間に不死を與へた者の不思議な名を永遠に祝福し給へ。

アナテマ　(せかせかと) 名だ！ 名だ！ あんたはその名を御存知ですか。あんたはわたしを欺ましたすつたね。

ダキツド　(聞かず) わしは人間の魂を涯のない時に渡してやらう。さうすれば魂は不滅の火の中で死ぬことなく生き、生のある不滅の光明の中で死ぬことなく生きて居よう。そして不死の光明の住居の前に闇が立止まるだらう。わしは幸福だ、わしは不死だ——おお、神様。

アナテマ　(有頂天になつて) 嘘です。ああ、何時までそんな馬鹿なことを聞くんだらう。北よ南よ、東よ西よ、お前達を呼ぶぞ。早く、此處へ來い、惡魔を助けに來てくれ。此處を四つの涙の大海にしてしまへ、人間をお前の深淵へ沈めてしまへ！　此處へ來い、此處へ來い。

不死の歡喜に輝くダキツドも、スウラも、彼の莊嚴に輝かしい顔や空へ向つて上げられた兩手にじつと注意してゐる外の人々も、誰一人としてアナテマの號泣を聞かない。アナテマは一人叫びながら飛び廻る。叫び聲が聞える——路上に、町の方から、邪教徒が死屍に色を塗るやうに恐ろしく彩色をした女が駆け出して來る。彼女の安ほいしやれた中に恐ろしい所のある瘡物は何人かの邪惡な手に引き裂かれ、顔は奇形的に美しい。彼女は怒鳴つたり泣いたり亂暴に呼んだりする。

女　ああ、神様。富をお分けなすつたダキツドさんは何處にゐるんだ。二日二晩町中を探し廻

つてるのに、家は物を言はないし、みんな笑つてるんだよ。ああ、御親切な皆さん、話して下さい、ダキツドさんに逢はなかつて、みんなを喜ばせて下すつたダキツドさんに。ああ、でも、あたしのは、だけ胸なんか見ないで頂戴——悪い奴があたしの着物を引き裂いて顔を血だらけにしたのよ。ああ、あたしのは、だけ胸なんか見ないで下さいつたら。この胸は罪のない唇を養ふ幸福を知らなかつたんですよ。

旅人　ダキツドさまは此處にゐらつしやる。

女　（跪まづき）ダキツドさまは此處においでですつて？　みなさん、あたしを可哀さうに思つて欺さないで頂戴。あたしは欺されて盲目になつて、嘘を言はれて嘔耳になつたんですよ。あの本當でせうか——ダキツドさまが此處にいらつしやるといふのは？

ベズクライニイ　さうだよ、あちらに立つておいでなさる。だが、晩かつたよ、あの方は富を分けておしまひなすつた。

ブリケス　もう富を分けておしまひなすつたよ。

女　何ですつて、皆さん。二日二晩お探ししたんだわ、みんなが欺したんだわ、来ようが晩か

つたんですもの。此處で死んちまうわ——もう何處へも行く所がないんだもの。

涙にくれて路上でもだえる。

アナテマ　あんたを尋ねて来たやうですね、ダキツド。

ダキツド　（近付き）何の用かね、この女は。

女　（頭を下げたまま）あなたでございませうか、みんなを喜ばせなすつたダキツドさんといふのは

旅人　ああ、この方だよ。

ダキツド　さうだ、わしだ。

女　（頭を下げたまま）あなたを見る事が出来ないのでもございます。きつと、あなたはお天道様そつくりでございませう。（優しく信するやうに）まあ、ダキツドさま、随分永いことお探し申しましたよ……みんな何時も妾を欺したのでございます。あなたはもうお出掛なすつた、もういらつしやらない、決してお出でにはならないなんて申しましたの。所が、一人の男がわしがダキツドだ申しました、親切らしい男でしたけれど、妾に向つて盜坊みたいな振舞をしたので

ございます。

ダキツド お立ち。

女 ああ、あなたの足下で休ませて下さいまし。海を渡る小鳥のやうに——妾は雨に打れ、嵐に惱まされて、死ぬほど疲れてゐるのでございます。(泣く。信するやうに) やつと落付くことが出来ました、妾は幸福でございます。みんなを喜ばせて下さるダキツドさまの足下にゐるんですもの。

ダキツド (不決断に) だがね、晩かつたよ、お前さん。持つてるものはもうみんな分けてしまつて、何にも残つちやゐないんだ。

アナテマ (ゆつたりと) さうだ。お金はみんな分けてしまつた。家へ歸るがいい——何にもありやしないんだから。お前さんには氣の毒だが——少し晩かつたね。分つたかい——晩かつたんだよ。今朝方最後の一文をやつた所なんだ。

ダキツド さうひどく言ふものじやないよ、ヌリユウス。

アナテマ だつて、さうじやありませんか、ダキツド。

女 (信じないものやうに) そんな筈がありません。(眼を上げ) あなたがダキツドさまで。何て親切な方でせう。あなたでございませうか、晩かつたとおつしやつたのは? いいえ、この人です——邪悪な顔なこと。ダキツドさま、願ひでございませう、お金を少し下さつて、お助け下さいまし。死ぬほど疲れてゐるのでございます。あなたはスウラさまとおつしやいますの? 奥様でいらつしやいますの? あなたの噂も聞いたのでございます。

彼女の方へ這ひ寄つて着物に接吻する。

女 妾に代つて願ひ下さいまし、スウラさま。

スウラ (泣きながら) お金を上げて下さい、ダキツド。ねえ、お立ち、其處は埃だらけなんだから、本當に黒い綺麗な髪なこと。此處へ坐つて、お休み。ダキツドは直ぐお金をくれますからね。

女を起して自分の傍の石の上へ掛けさせる。そして自分の胸へ彼女の頭を押しつけて愛撫する。

ダキツド だつて、どうしたらいいんだ。(當惑して、赤い半巾で顔を拭きながら) どうしたらいいんだね、ヌリユウス。お前は惻巧者だから、どうにかしてくれ。

アナテマ (両手を振り) 本當に、知りませんよ。此處に證書があるんだが——一文だつてありやしません、私は正直な辯護士ですぜ、さう毎日のやうにアメリカからあなたへ遺産を持つて来るやうな贖金造りじやないんです。(口笛を吹く) 何にもすることがないものだから、私は世界を歩き廻つてゐるんです。

ダキツド (反抗して) そりやひどい、ヌリユウス。そんなことを言はうとは思はなかつた。どうしたらいいんだい、どうしたら?

アナテマは肩を揺る。

スウラ 此處へお坐りよ、お前さん、直ぐ来るからね。ダキツド、ちよつとあちらへ来て頂戴お話することがあるんだから。

二人離れて囁き合ふ。

アナテマ ひどく打たれたかい、お前さん? きつと、下手な奴がなぐつたんだな——奴、思ひ通りに眼の玉を叩き出せなかつたんだからな。

女 (髪で隠しながら) みなさん、あたしを見ないで下さい。

スウラ ヌリユウス、ちよつと。

アナテマ (近寄り) ええ、レイゼルの奥さん。

ダキツド (ひそやかに) ヌリユウス、イエルサレムへ行く金はいくらあるかね。

アナテマ 三百圓^{ルヴツ}。

ダキツド そいつをあの子^{ひと}にやつてくれ。(笑つたり泣いたりして) スウラはイエルサレムへ行きたくないと言ふんだ。死ぬまで此處で商賣がしたいさうだ。馬鹿な女だな、ヌリユウス、さうじやないか。

堪へるやうに泣いてゐる。

スウラ そんなに辛い、ダキツド。そんなに行きたいのね。

ダキツド 馬鹿な女だな、ヌリユウス。わしも商賣がしたいのが解らないんだからな。(泣く)

アナテマ (感動させられて) あなたはただの人間じやありませんね、ダキツド。

ダキツド ヌリユウス、聖市で死んで、そこに埋められてゐる正直な人達の灰と一つになるのがわしの夢想^{ゆめ}だつたよ。だが、(笑ふ) 何處の土地だつて死人には親切じやないかな? あの可

哀さうな女にお金をやつてくれ。わしは愉快になつたよ。さうだらう、スウラ。店を開けて上等のソオダ水の製造法をソンカに教へて貰はなくちやならないね。

アナテマ (嚴かに) お前さん。みんなを喜ばして下さるダキツドさんからお金と幸福を下さるんだ。

ベズクライニイ (ソンカに) お金をみんな分けてしまつたんだと言つたらう。何百萬も持つておいでだぜ。

旅人 (耳をすましながら) さうだ、さうだ。ダキツドさまはみんな下さるだらうよ。今下さりかけたばかりさ。

女はダキツドとスウラに感謝する。感動したダキツドは祝福するやうに、跪づいてゐる女の頭に兩手を置く。彼の背後に、野の方から、何か灰色の、埃に塗れて、ゆつくりと重々しく動いて来るものが路の上に現れる。沈黙のうちに動いて来る、それが人間だとは容易に信じられない——灰色の路の埃とは等しく、彼等の困窮や苦痛と兄弟になつたやうでもある。何か不安なものが彼等のぼんやりした不屈の動作の中にある——そして一同は不安さうにそつちを眺める。

ベズクライニイ あそこへ来るのは誰だらう。

ソンカ 何だか灰色をしたものが匍つて来るわ。人間にしては人間らしくもないね。

ブリケス ああ、ダキツドさんが心配だよ。背中を向けて見もなさらん。だが、あいつら盲目みたいに歩いて来るな。

ソンカ 今にあの方をつぶしてしまふよ。ダキツドさま、ダキツドさま。後を向いてごらんなさいまし。

アナテマ もう晚いよ、ソンカ。ダキツドさんにはお前の言ふことなんか聞えないんだ。ブリケス だが、一體誰だらう。あいつらが怖いよ。

旅人 ありや——わしらの仲間だ。わしらの國からダキツドさんに眼の見へるやうにして貰ひに來た盲人達さ。(大聲で) 待つた、待つた、着いたぞ。ダキツドさんはみんなの真中においでだよ。

盲人達は徒らに押し寄せる波に逆はうと努めてゐる愕いたダキツドを踏みつぶしさうにして——立止まつたり眼がないやうに歩いたりする。死のやうな空間を觸りながら力なく兩手を延ばす。もう或る者はダキツドを探し當てて、素早く鋭敏な指や——秋の風に吹かれる木の葉の呻きに似た聲で

彼を取り巻き、凍てついた空を微に振はせる。素早く訪れて来る黄昏が物の輪廓を隠し、色を消してしまふ。何か顔のない、ぼんやりとうごめき、静かに悶へるものが見へる。

盲人達　ダキツドさまは何處だ。——ダキツドさまを見つけてくれ。——みんなを喜ばせて下さるダキツドさまは何處においでだ。——此處だ。——わしの指に觸つたやうだ。——あなたですか、ダキツドさま。——ダキツドさまは何處においでだ。——ダキツドさまは何處にいらつしやる。——あなたですか、ダキツドさま。

闇の中に恐怖した聲々。

ダキツド　わしだ、ダキツド・レイゼルだ。わしに何の用があるのかな。

スウラ　(泣きながら)　ダキツド、ダキツド、何處にあるの？　わたしには見えない。

盲人達　(詰めよりにながら)　ダキツドさまは此處だ。——あなたがダキツドさまですか。——ダキツドさま。——ダキツドさま。

—幕—

第五幕

天井の高い、いかめしい、幾分暗い部屋——ダキツド・レイセルが最近住んでゐる立派な別荘内の書齋。室内には二個の大きな窓がある。一つは町へ行く往來に面し、一つは左手の壁にあつて、庭に面してゐる。この窓の近くにダキツドの大きな仕事机があつて、貧乏人達からの請願の小紙片、書類、最近綴られた長い帳面や、又大きな厚い、簿記帳に似た書物など——だらしくなく書類が散らかつてゐる。机の下や傍には引きちぎつた紙片がある。壊れた家の屋根のやうに、古い皮表装の大形聖書が背を上にし、二つに開き、下に紙片を挿んで轉かつてゐる。蒸し暑いのに、暖爐には薪が燃へてゐる——ダキツド・レイセルは熱があつて、寒いのである。日が暮れてゆく。降されたカーテンを通して、窓には未だ弱々しい黄昏の光がさしてゐる。然し室内は既に暗い。ただ机の上の小さなランプがダキツド・レイセルとアナテマとの二個の白髪頭を暗の中に浮き出させてゐる。

ダキツドは机に向つて坐つてゐる。久しく梳を入れたい白髪と髯とは彼に粗野な恐ろしい様子を與へてゐる。顔は疲れ、眼はぼつと見開かれ、両手で頭を擱んで彼は熱心に大きな鋼縁の顕微鏡から鉛筆で線をつけた書類を調べてゐる、それからそれを放り出すと、又外のを取つてひきつるやうに厚い本の頁を繰る。彼の安樂椅子の背に手を置いてアナテマがその上を見てゐる。彼は丁度ダキツドも眼に入らぬらしく——不動で、物思はしげに殿しい。戯れは済んだ。取入れ前の收穫者のやうに、彼は果しない不安な野原を眺めてゐる。

窓は締つてゐるが、硝子や壁を通して落付た轟音や個々の叫び聲が聞えて来る。それはゆるやかに

力と感動の中に搖れながら擴がつてゆく。それはダキツドに呼ばれた人々が彼の住居を圍むのである。
沈黙。

ダキツド　粉々になつてしまつた、ヌリュウス。天まで届く山は岩と碎け、岩は埃となつて、風が持つて行つてしまつた——山は何處にあるんだ、ヌリュウス。わしに持つて来てくれた何百萬の金は何處にあるんだ。請願人にやらうと思つて、錢を、たつた一錢カピカをもう一時間も書類の中を探してゐるのにちつともありやしない。——あそこに轉がつてるのは何だね。

アナテマ　聖書です。

ダキツド　いや、いや、あつちだ、書類の中だ。此處へくれ、何だか見たことのない勘定書らしい。幸福があるかも知れんよ、ヌリュウス。(熱心に眺める) 駄目だ、みんな消してある。ごらん、ヌリュウス、一寸ごらんよ、百、それから五十と、その後が二十一——その次が一錢カピカだ。だが、この一錢でも取戻せないかな。

アナテマ　六、八、二十一——その通りだ。

ダキツド いや、さうじゃない、ヌリュウス。百、五十、二十——一錢だ。碎けて、水のやうに指の間から漏れてしまつたんだ。それにもう指も乾いてゐるし——寒いな、ヌリュウス。

アナテマ 此處は蒸し蒸ししますよ。

ダキツド 寒いと言ふのに、ヌリュウス。——暖爐へ薪をくべてくれ……いや、待つてくれ。

——薪は幾らするかな。幾らだか忘れてしまつた……おお、随分するな、出してくれ、ヌリュウス——まるでこの一本一本の薪が——命だつてことを知らん顔に、この呪はしい火めが譚なく食つちまうからな。待つてくれよ、ヌリュウス……お前はひどく記憶がいいから、本みたいでみんな憶へてゐるだらう——アブラム・ヘツシンに幾らやつたか覚えてゐないかね。

アナテマ 初めに五百です。

ダキツド うん、さうだ、ヌリュウス——彼はわしの古馴染だ、一緒に遊んだものさ。だから五百は——友達としちや餘り多くもないね。さうだよ、無論、古馴染だ、彼に同情して、しまひまで外の者より餘計残してやつたんだ——友情つてさういふ優しい心を言ふんじゃないか、ヌリュウス。だがね、友達のために見ず知らずの者を侮辱するのはよくないよ、他の人達は友

達も保護者もないんだからな。アブラム・ヘツシンとこから減らさうじゃないか、ほんのちよつとヘツシンからな……(恐怖を抱いて) 所で、今度はヘツシンに幾何だね？

アナテマ 一錢。

ダキツド そんな筈はない。間違へたんだと言つてくれ。わしを氣の毒に思つて、間違へたんだと言つてくれ。そんな筈はないよ——アブラムはわしの友達だ——わしらは一緒に遊んだものだ。子供の時分には一緒に遊んだものが大きくなつて白髯が生える、そして昔のことを一緒に笑ひ合ふといふことはどんなものだか解るだらう。お前も白髯が生えたな、ヌリュウス……

アナテマ ええ、私の髯も白くなりましたよ。あなたはアブラム・ヘツシンに一錢やるようにお定めなさいました。

ダキツド (アナテマの手を掴み、囁き聲で) だがね、彼女は子供が死にさうだと言つてたよ、ヌリュウス——もう死にかけてるんだつてね。察してくれ、お前さん、わしは金が要るんだ。お前は立派な人間だ、(彼の手を撫でる) お前は親切だ、本のやうに何でも覚えてゐる——もう少し探してみてくれ。

アナテマ　しつかりして下さいよ、ダキツド、理性があんたを裏切つたんです。もう二日二晩この車に向つて、在りもしないものを探していらつしやる。あんたを待つてる人達の所へ行つて、何にもないつて言つておやりなさい、そして歸しておしまひなさい。

ダキツド　(腹を立てて)　もう十遍もみんなの所へ行つて、何にもないんだと言つたじやないか……所で、一人でも歸つたかね。みんな立つて待つてるんだ、悲しがつてみんな石みたいに堅くなつてるんだ、母の胸に抱かれた子供のやうに依^レ地^ナなんだ。じや、子供は母親の胸にお乳があるかなんて聞くかね。子供は乳首を唇でくはへて、用捨なしに引きちぎるものだ。わしがものを言ひ出すと、みんな黙つて、道理の解つた人間のやうに聞いてゐる。わしが黙ると……みんなの中に氣狂ひじみた絶望と不足が起つて、澤山の聲が泣き喚くんだ。わしはみんな彼等にやつてしまつたじやないか、ヌリユウス。わしが涙をすつかり出し切らなかつたといふのかね。わしは心臓からありつたけの血をやつてしまつたじやないか。……彼等は一體何を待つてるんだ。彼等はもう自分の生命を使い盡した哀れな猶太人から何を欲しがつてゐるのだ？

アナテマ　奇蹟を待つてるんですよ、ダキツド。

ダキツド　(恐怖を抱いて立上り)　黙れ、ヌリユウス、黙れ……お前は神様を試してゐるのだ。奇蹟を行ふといふわしは何者だ——よく考へて見ろ、ヌリユウス。一錢を二錢にすることがわしに出来るか。山へ行つて、「土の山よ、パンの山となつて、飢えた者達を満腹させてやれ」などとわしが言へるか。大海へ行つて「涙の如き鹽辛き水の海よ、牛乳の海、蜜の海となつて、渴ける者達の渴を癒やしてやれ」などと言ふことが出来るか。考へて見るがいい、ヌリユウス。

アナテマ　盲人達をごらんになりましたか。
ダキツド　たつた一度わしは眼を上げて見た……だが、わしは奇妙な灰色の人達を見たのだ、その人達の眼に誰だか白いものをひつかけたのだ、するとその人達は空氣を危険なものやうに思ひ、地を恐怖のやうに怖がる。彼等に一體何が要るのだ、ヌリユウス。

アナテマ　病人や肢體の不足した不具者を見ましたか、さういふ人達が地面を這ひ廻るのを。みんな血の汗のやうに地の下から出て來るのです——地が彼等を作るのですよ。

ダキツド　黙れ、ヌリユウス。

アナテマ　良心の失くなつた奴等を見たことがありますか、そいつ達の顔は火に焼かれたやう

に黒くつて、眼は白い輪に取り巻かれ、氣の狂つた馬のやうに圓を走り廻るのです。眞直ぐに見つめて、路を測る長い杖を持った人間を見ましたか——それは眞理を探してゐる人間ですよ

ダキツド わしはもう見ようとはしなかつた。

アナテマ あんたは地の聲を聞きましたか、ダキツド。

スウラ 登場して、恐々ダキツドに近付く。

ダキツド お前かい、スウラ。戸をしつかり締めて、隙間を残しちやいけないよ。何の用だね、スウラ。

スウラ (恐怖と信仰とを抱いて) 未だ何も仕度をなさらないの、ダキツド。忙いでみんなの所へいらつしやいよ、もう待ち疲れて、死ぬのを怖がつてる者が随分あるわ。歸らせないと、後から又やつて来てよ、ダキツド、今にももう立つてる場所もなくなつてしまふわ。もう泉水の水も汲み盡しちやつたし、あんたの言ひつけ通り町からパンを持つて来ませんよ、ダキツド。

ダキツド (両手を上げ、恐怖を抱いて) 眼をお醒まし、スウラ、夢が狡猾い網でお前を包んでしまつたのだよ、心臓が氣狂ひじみた愛に汚されたのだ。わしだよ、ダキツドだよ。わしはパン

を持つて来いなんて言ひ付けはしなかつた。

スウラ 未だお仕度が出来ないのですからね、ダキツド、みんな待つてくれますわ。でも、火を焚いて、女や子供には寝糞をやるように言ひつけて下さいまし。今に夜になつて地面が冷えて来ますからね。子供達には牛乳をやるようにつてね——お腹が空いてゐますから。あつちで、ずつと向ふでいろんな足音が聞えましたわ。あれは牛乳をどつさり取るために、あんたのお言ひつけで此處へ追つて来る牛や羊の群ではありませんか。

ダキツド (腹れ聲で) おお、わたしの神様、神様……

アナテマ (スウラに向つて静かに) あつちへ行らつしやい、スウラ、ダキツドはお祈りをしてゐるんです。お祈の邪魔をしちやいけませんよ。

スウラは矢張りびくびくして注意深く去る。

ダキツド お慈悲を！ お慈悲を！

窓外の轟音静まる——それから一時に驟々しく嵐のやうになる。それはスウラが少し待つてゐなくてはいけないと一同に通知したからである。

ダキツド (跪まづき) お慈悲を！ お慈悲を！

アナテマ (命令的に) 立て、ダキツド。偉大な恐怖の面前の良人とおなりなさい。彼等を此處へ呼んだのはあなたではないか。言はれない恐怖の眠つてゐる沈黙と闇に向つて愛の聲で大聲に呼んだのはあなたではないか。だから、みんな來たのだ——北も南も、東も西も、四つの涙の大海もあなたの足下に横たはつたのだ。お立ちなさい、ダキツド。

ダキツド わしはどうしたらいいのだ、ヌリュウス。

アナテマ 彼等に本當のことを言つておやりなさい。

ダキツド わしはどうしたらいいだらう、ヌリュウス。繩を取つて、木にかけながら、昔し裏切りをした者のやうに首を縊つて死ねないものかしら。呼んで置きながらやらなかつたり、みんなの滅びるのを喜んでゐるわしは謀叛人ではないか、ヌリュウス。ああ、心臓が痛い……ああ、心臓が痛い、ヌリュウス！ おお、寒い、氷に閉された地面のやうに、だが、体内は暑くつて白い火が焼えてゐる。ああ、ヌリュウス——お前は白い火を見たことがあるかね、その火の上に乗ると月は黒くなり、太陽は黄色のやうに燃えるのだ！ (囁へる)

ダキツド ああ、わしを隠してくれ、ヌリュウス。光の通らない暗い部屋はないか、あの聲の聞えない厚い壁はないものか。彼等はわしを何處へ呼んでゐるのだ。わしは年取つた病人だ、わしはさう永い間苦しんではゐられない——わしだつて小さい子供があつたよ、彼等は死んだのじやないかな——何て名だつたかしら、ヌリュウス——わしは忘れてしまつた。人を喜ばしたのはダキツドだと言ふが、それは一體何者だ？

アナテマ あなたのことですよ、ダキツド・レイゼル。あんたは欺されたんだ、レイゼル、私のやうに欺されたんだ。

ダキツド (哀願して) わしを守つてくれ、ヌリュウスさん。彼等の所へ行つて、みんなに聞えるやうに大きな聲で「ダキツド・レイゼルは——年取つた病人だ、彼は何にも持つちやゐない」と言つてやつてくれ。みんな聞くと、ヌリュウスさん、あんたは立派な様子をしてるからなそしてみんな家へ歸つて行くよ。

アナテマ さうです、さうです、ダキツド。もう本當のことが解つたんだから、今にあんたはみんなにそれをおつしやるでせうな。ハツハツ！ ダキツド・レイゼルが奇蹟を行ふなんて一體

誰が言つたんです。

ダキツド (兩手を組みながら) さうだよ、さうだよ、ヌリユウス。

アナテマ レイゼルに奇蹟をして貰はうなんてしたのは誰です、彼はみんなと同じやうに死ぬ……年取つた病人じゃありませんか。

ダキツド さうだ、さうだ、ヌリユウス、人間だよ。

アナテマ レイゼルは愛に欺されたんじゃないかな。「私は何でもします」つて愛は言つたが——騒々しい音を立てて抜け出したかと思ふところ静まるあの隅つこから起る盲目の風みたいに、路上の埃を立てるばかりだ……そいつは眼を見えなくして埃塵をかき廻すんでさ。ダキツドに愛をくれた奴の所へ行つて、「何だつてお前はわしらのダキツドの兄弟を欺したんだ」つて聞いておやりなさい。

ダキツド さうだ、さうだ、ヌリユウス。愛が無力ならどうして人間に要るんだらう。不死がないのならどうして生が要るんだらう。

アナテマ (素早く) 行つてみんなにさう言つておやりなさい——みんなあなたのおつしやるこ

とを聞きますよ。彼等は天に向つて聲を上げるでせうから、私達は天の答が聞かせよう、ダキツド。みんなに本當のことを言つておやりなさい、さうすりや地を持ち上げることが出来ますよ。

ダキツド わしは行かう、ヌリユウス。そしてみんなに本當のことを言つてやらう——わしは嘘を言つたことはない。戸を開けてくれ、ヌリユウス。

アナテマは忙しさに露臺へ通ずる戸を開けて、恭々しくダキツドを通す、ダキツドは悠たりした重しい足取りで濫面作つて歩いて行く。アナテマはダキツドの出た後を締める。瞬間の吼聲が墓場のやうな静寂に代り、その中でダキツドの聲がぼんやりと弱々しく震へてゐる。夢中でアナテマは部屋の中を轉々する。

アナテマ ああ！ お前は俺の言ふことを聞かなかつたんだから——あいつらの言ふことを聞くがいい。ああ！お前は犬みたいに俺を腹匂ひにさせやがつた。お前は俺に隙間も窺かせてくれなかつたぞ——お前は黙りこくつて俺を嘲弄しやがつたな——不動で俺を打ちのめしやがつたな。じゃあ、開け——出来るものなら返事をして見ろ。お前と話をしてゐるのは悪魔で

はないぞ、大膽な聲を立ててゐるのは曙の子ではないぞ——ありや人間だ、お前の愛してゐる子供だ、お前の心配だ、愛だ、優しさだ、傲慢な希望だ——そいつがお前の踵の下で蛆蟲のやうにのたくつてゐるのだぞ。どうだい——黙つてゐるのかい？雷で彼奴に嘘をついてやれ、稲光で彼奴を欺してやれ、どうしたら彼奴が天を見られるかといふことをな。アナテマのやうにしてやるさ……

苦しがる。

犬のやうに腹匍ひになる可哀さうな辱かしめられたアナテマのやうに……(憤然と)もう一度人間に暗い穴の中を匍はせてやるがいい、無言の中へ閉じ込めて、言ふに言はれぬ恐怖のひそむ暗闇の中に隠してしまふがよい。

窓外に再び多くの吼聲。

アナテマ 聞えるかい——(嘲笑的に)ありや俺ではないぞ。彼奴等だ、六、八、二十——確かにさうだ。悪魔には何時だつて間違がありつこないぞ……

戸を開けてダキツドが走り込んで来る、恐怖に捉はれてゐる。彼の後から叫び聲が波をなして突び

込んで来る。ダキツドは閉じて肩で押へてゐる。

ダキツド 助けてくれ、ヌリユウス。みんな直ぐ此處へ這入つて来る——戸は丈夫でないから叩き壊してしまふよ。

アナテマ 彼奴等は何を言ふんです。

ダキツド 信用しないんだ、ヌリユウス。みんな奇蹟をしろと言ふんだ。死人達が怒鳴つてるんじゃないかな。——わしは彼奴等が連れて來た死人を見たんだ。

アナテマ (憤然と)じや、彼奴等に嘘を言つてやれ、猶太人！

ダキツドは戸口を離れて混惑と恐怖のうちに神秘的に言ふ。

ダキツド 何だかわしの身に起るのが解るだらう、わしは何にも持つちやゐない、だが、みんなの所へ出て行つて、彼等を見ると、不意にそれが嘘で——わしは何か持つてるやうな気がしたのだ。そこで話したんだが——自分じや信じられん、話こそしても——自分じやみんなと一緒になつて、心にもないことを怒鳴つたり、怒つて求めたりするのだ。口では斷つてゐる癖に、腹の中では約束して、眼で怒鳴るんだ。さうだ、さうだ、さうだ……わしはどうしたらいい

いんだ、ヌリユウス？聞かせてくれ、お前は確かなことを知ってるんだがら、わしは何にも持つちやゐないね？

アナテマ微笑する。戸の外部の右手からスウラの聲と戸を叩く音。

スウラ 入れて下さい、ダキツド。

ダキツド ああ、開けちやいけない、ヌリユウス。

アナテマ 奥さんですよ、スウラでさ。

戸を開ける。何だか両手で抱いてゐる蒼ざめた女の手を引いてスウラが登場する。

スウラ (温和に) 許してね、ダキツド。だつて、此の女めがもう待つては居られないつておつしやるのよ。あんたが未だお延ばしなさるようなら、この子は生き返るまいつておつしやるの。名前を知らなくちやならないのでしたら——モイシエつて名ですわ、可愛いモイシエ。妾見たんだけど——黒い子ですわ。

女 (跪つき) ダキツドさま、順番を待つてゐなくつて御許し下さいませ。でも、あちらでは、先刻死んだ者がございます、妾はもう三日三晩此の子を抱いてゐるのでございますよ。きつと

此の子をごらん下さいませうね では、出しますわ——嘘を申しは致しません、ダキツドさま。

スウラ 妾もう見ましたわ、ダキツド。此の方が抱かして下さつたの。随分疲れていらつしやるのよ、ダキツド。

掌を前へ向けて両手を擴げながらダキツドは壁に届くまで後退りをする。さうして両手を延ばしたままで居る。

ダキツド お慈悲を！ お慈悲を！

二人の女は辛捧強く待つて居る。

ダキツド どうしたらいいんだ。もう駄目だ、ああ、神様。ヌリユウス、わしに死人を生き返らせる力はないとみんなに言つてやつてくれ。

女 お願ひでございます、ダキツドさま。長生きをしたり、よくない事をした罰で死んだ年寄に生命を返して下さいとお願ひしてゐるのでございませうか。誰が生き返れるか、返れないか、妾に解る筈がないではございせんか。でも、きつと、もう死んでから餘程になるので難かし

いのでせうね？——それに気が付かなかつたものですから——お許し下さいまし、でも、妾
れが死ぬ時に——モイシエや、死ぬのを怖がるんぢやないよ——みんなを喜ばせて下さるダキ
ツドさまが、お前の小さい命をお返し下さるからね——つて約束したのでございますもの。

ダキツド その子を見せてごらん。

頭を振りながら眺め、赤い半巾で拭きながらそつと泣く。信するやうに彼の肩によりかかつてスウ
ラが見て居る。

スウラ 幾歳になるの。

女 二年、もう三歳でございます。

ダキツドはアナテマの方へ涙に濡れて、殆んどうつろな顔を向けて、別な聲で言ふ。

ダキツド わしには駄目かね、ヌリユウス？（然し突然かがんで腹れ聲で叫ぶ）アデノイ！——ア
デノイ！——此處を去れ。去れ！悪魔がお前を寄越したのだ。さうだ、みんなに言つてくれ、
ヌリユウス、わしに死人を生き返らす力はないつて。彼女等はわしを笑ひものにしに來たんだ
見ろ、向ふで二人共笑つてるぢやないか。此處を去れ。去れ。

アナテマ （スウラに向つて静に）行らつしやい、スウラ、女を連れてね。ダキツドは未だまるで
用意が出來てないんですよ。

スウラ （嘆き聲で）妾の部屋へ連れて行きますせう。じや、ダキツドにさう言つてね、此の女は
妾の部屋に居ますからつて。（女に向ひ）お前さん、行きますせう……ダキツドは未だすつかり仕
度が出來てないんですよ。

二人退場する。ダキツドはぐつたりして、安樂椅子に掛け、力無く白髪頭を垂れる。静かに何か讀
む。

アナテマ 行つちやいましたよ、ダキツド。聞きましたか、行つちやつたんですよ。

ダキツド 見たかい、ヌリユウス、子供は死んでたな。ああ、ああ、あの子供は死んで居た、
死んで居た、死んで居た。モイシエ……あ、さうだ、モイシエだ、黒い子だ、わしらはあの子
を見たんだ……（憂鬱と絶望のうちに、大聲で）どうしたらいいんだ？ 救へてくれ、ヌリユウス。
アナテマ （早く）逃げるんですよ。

窓外の出來事に耳をすまし、しつかりと首肯き、ゆつくりと共謀者の注意を籠めてダキツドに近付

く。祈るやうに両手を組んで、ダキツドは心配さうに自信ありげな微笑を浮べて彼の近付くのを待つてゐる。彼の背は老人らしく曲り、彼は何度も赤い半巾を取り出す、然しどうしていいか解らないのである。

アナテマ (熱心な囁き聲で) 逃げるんです、ダキツド、逃げるんです。

ダキツド (嬉しさうに) さうだ、さうだ、ヌリユウス……逃げるんだ。

アナテマ 誰も知らない暗い部屋へお隠しませう。待ち疲れて腹を減らしてみんなが寝てしまつたら、寝てる奴等の中をお連れして……お助けしますよ。

ダキツド (嬉しさうに) さうだ、さうだ、わしを助けてくれ。

アナテマ 所が、彼奴等は待つてやがるんだ！ 奴等は寝ながら恐ろしく結構な夢でも見て待つてるんです……所が、あんたはもう居ない。

ダキツド (嬉しさうに首肯しながら) 所が、わしはもう居ないんだ、ヌリユウス。とうに逃げてしまつてるんだな、ヌリユウス。(哄笑する)

アナテマ (哄笑する) あんたはもう居ない。逃げちやつてるんです。さうなつたら奴等に天と

ものを言はせてやるんですね。

お互に眺め合つて哄笑する。

アナテマ (親しく) じや、一寸待つて下さい、ダキツド。直ぐ行つて、家は大丈夫か見て來ますよ。彼奴等ひどく氣狂染みてゐるからな！

ダキツド さうだ、さうだ、見て來てくれ。全くみんな氣狂みたいだよ。そのうちにわしは仕度をするからな、ヌリユウス……だが、わしを永いこと一人ぼつちにしといちやいけないよ、

御願ひだ。

アナテマ退場する。ダキツドは注意深く、爪先まで窓に近付き、見ようとするが決して兼ねる。卓の方へ行く——散らばつてゐる書類に愕き、それらの一つさへも踏まないやうに努めながら、丁度銅の中を踊るやうにして隅へ行く、其處には彼の衣服が懸つてゐる。忙しさうに着物の上から着ようとする。暫らく髪をどうしようかと迷つてゐるが、やつと思ひ當つて、フロックコートの縁の下へ突込みその下へ隠し初める。

ダキツド あ、さうだ。鬚を隠さんけりやならん。子供達はみんなわしの鬚を知つてゐるからなだが、どうして彼達は抜いてしまはなかつたらうな——さうだ、さうだ……黒いフロック

だなー よし、よし、貴様が隠してくれるだらうて。さう、さう、ロオザが鏡を持つて居たつ
け……だが、ロオザは逃げ出す、ナウムも死んだ、所が、スウラは……ああ、ヌリユウスはど
うして来ないんだらう。みんなの怒鳴つてるのが聞えんのかな？……

戸を叩く注意深い音。

ダキツド (停いて) 誰だ。ダキツド・レイゼルは此處には居らんぞ。

アナテマ 私ですよ、ダキツド、入れて下さいよ。

登場。

ダキツド どうだ、ヌリユウス……まるでわしとは気が付くまい、さうじゃないかね。

アナテマ こりやうまい、ダキツド。だが、どうして出たらいいのか解りませんや。スウラが
家中お客で一杯にしちまつたんで、どの部屋も嬉しさうにここにこしてあんたを待つてる盲人
や不具者ばかりでさ。死にかけてる奴も居りや、まるで命のない奴も居ますな、ダキツド。あ
んたのスウラは大した女だが、どうも餘りお主婦さんらしくてね、ダキツド、奇蹟で立派な家
政を作らうとしてるんですな。

ダキツド だが、彼女に出来るもんか、ヌリユウス。

アナテマ もう戸口のところに夢を見ながらにこにこして寝てる奴がうんと居ますぜ——他人を

追ひ越さうとする大膽な幸福者がね……庭にも外庭にも……

ダキツド (恐怖を抱いて) 未だ外庭に何かあるな？

アナテマ 静かに、ダキツド。氣を付けて聞いてごらん下さい。

部屋の火を消し、それから窓掛を開く。窓々の四角の隅が照ぼく赤いむらむらとした光に注がれる。
室内は暗いが——凡てのものは白い。ダキツドの頭や放り出されてゐる紙片が弱い血のやうな色に
彩られる。鬼怪な、照ぼく紫色の影が音もなく天井を動いて来る。手を振り、押し合ひ、突然長い連
續體になる、すつと走るでもなければ、亂暴な恐ろしい舞踏をするでもない。空色の遠方から新ら
しい、未だよく聞き取れない轟きが傳はつて来る——海が岸から上つて来て乾燥地へ動いて来たもの
とすれば、押へつけた、不可避的で、威赫的なさういふ音を立てるものである。

ダキツド (停いて囁き聲で) 何だ、あの火は、ヌリユウス——わしは怖いよ。

アナテマ (同じく囁き聲で) 寒い晩だから、薪を焚いてるんです。スウラが未だ永い間待たな
くちやならないつて言つたものだから あんなことを初めたのですよ。

ダキツド 何處から薪を取つて來たんだらう。

アナテマ 何か叩き壊したんです。スウラはあなたが薪を持つて來いと言つたつて言ふものだから、彼奴等はそこらにある木をおとな溫和しく燃やしてゐるんです……だが、あつちに、ダキツド、ずつと向ふに、もつと向ふに……

ダキツド (絶望して) 何だ、ヌリユウス？ 何がずつと向ふに、ずつと先にあるんだ。

アナテマ 知りませんよ、ダキツド。あの開放しになつてる上の窓から、何だか波が岩にあたつて痛さに慄える寄波時の大洋の吠える聲のやうなものを聞いたんです。まるで銅の喇叭の吼えるやうな音をね、ダキツド——奴等は空やあなたに向つて怒鳴つたり、あなたを呼んだりしてゐるんですぜ……聞えますかね。

音の落付いた森と混沌の中に「ダーアーキーイード。ダーアーキーイード、ダーアーキーイード」と引延ばして永く響き渡るやうである。

ダキツド わしの名が聞える。あれは誰だ？ 何の用があるのだ。

アナテマ 知るものですか。大方、あなたを王様にでもしたいんでせう。

ダキツド わしを。

アナテマ あんたをね、ダキツド・レイゼル。彼奴等は権力と力とを持つて來ませうよ——それから、奇蹟を作り出す力もね——彼奴等の神様になりたくはありませんか、ダキツド。一寸見て、聞いてごらんなさい。

窓を開け放す。一時に、遠くの音楽が勝利の力強い波となつて火の煙の渦巻の中に混ざる——その音楽は高く上げられた手に持たれて運ばれる色々の種類の喇叭の銅のやうな叫び聲である、それは地や空に向つて投げられた彼等の呼び出しの號泣だ。喇叭は消える。動いて來る群集の足音、「ダーアーキーイード、ダーアーキーイード」といふ無数の呼び出しの號泣は——アコールドに代り、歌になる。再び喇叭の音。再び執拗な恐ろしい力強い呼ぶ聲。

——ダーアーキーイード、ダーアーキーイード。
喇叭の最初の音が聞えると、ダキツドはよろよろして壁に寄り付き、それから一足づつ——一層大膽に——一層素早く——一層眞直ぐに窓の方へ進んで行く。眺める——そしてアナテマを押し退けながら、両手を地面の貧乏人達を迎へるやうに差し延べる。

ダキツド (呼ぶ) 此處へ來い！ 此處へ！ わしの所へ來なさい。わしは此處に居る。わしは

お前さん方と一緒だ。

アナテマ (愕いて) ええつ? 彼奴等と呼ぶんですか——あなたは——彼奴等を——呼ぶんですつて——考へ直して下さいよ、レイゼル。

ダキツド (怒つて) 黙れ——お前には解りやしないんだ。わし達は人間だ、わし達は一緒に行くんだ。(有頂天に) わし達は一緒に行くんだ。此處へ来いよ、兄弟、此處へ来い。見ろ、ヌリユウス……みんな頭を上げて見て居るぞ、聞えたんだ。此處へ来い、此處へ来いよ。

アナテマ あんたは奇蹟をしようといふんですか。

ダキツド (怒つて) 黙れ——お前は別物だ。お前は神様や人間の敵のやうな口のきき方をするお前は哀れみも慈悲も知らない。わし達は疲れてぐつたりしてゐる——もう死人達も待ち疲れてゐるんだ。此處へ来い——一緒に行かうよ。此處へ来い。

アナテマ (見互し) 盲人に道が分りつこないじやありませんか?

ダキツド だから、眼の要るのは盲人ではないか——此處へ来い、盲人。

アナテマ (見互し) 蹠は路を探つて埃を吸ふじやありませんか。

ダキツド だから、路が要るのは蹠ではないか——此處へ来い、不具者達。

アナテマ (見互し) よろよろしながら、轎に乗せて死人を運んで来るじやありませんか。ねえ、

ダキツド、「此處へ来い、俺の所へ来い。俺が死人を生き返らしてやるぞ」と言つておやりなさい。

ダキツド (苦しみながら) お前は愛を知らんね、ヌリユウス。

アナテマ 盲人に眼が見えるようにするのは俺だぞ。(窓から大聲で) 此處へ来い。神様を探してゐる地面の人達、ダキツドの足下に集るがいいぞ——此處においてなさるんだ。

ダキツド 静かに。

アナテマ おい、こちらだぞ。苦しんでる母親達も——悲しくつて分別をなくした父親達も——腹が減つてお互ひに噛み合つてる兄妹達も——みんなを喜ばせて下さるダキツドの所へ来るがいい。

ダキツド (彼の肩を掴み) 気が狂つたんだな、ヌリユウス。みんな聞きつけて、此處へ飛び込んで来るぞ——何うしようてんだ、考へて見るがいい、ヌリユウス。

アナテマ (叫ぶ) ダキツドが呼びだぞ!

ダキツド 黙れ。一口でも怒鳴つて見ろ、息の根を止めてやるから——犬めが。

アナテマ (逃げながら) あんたは馬鹿ですね、人間そつくりだ。私が逃げようとする、私を呪ふし、愛さうと思や——殺すといふんだからな。(輕蔑して) 人間だ!

ダキツド (がっかりして) ああ、わしを滅ぼさないでくれ、ヌリユウスさん。ああ、お前を怒らせたんだつたら許しておくれ、わしは記憶を失くした老ぼれの馬鹿だ。だが、わしは奇蹟をすることが出来ない——出来ないじゃないか!

アナテマ 逃げませう……

ダキツド さうだ、さうだ、逃げよう。(不信を抱いて) だが、何處へだね。わしを何處へ連れて行かうといふんだね、ヌリユウス。神様が……(苦しみながら) おいでなさらんやうな場所が此の世にあるのかな

アナテマ 神様の所へお連れしますよ。

ダキツド わしはいやだ。神様がわしに何とおつしやるだらう。わしは神様に何をお答したら

いいんだ。なあ、ヌリユウス、今となつて何かでも神様にお答することが出来るだらうか?

アナテマ 人氣のない所へお連れしますよ。此處へあの、痒がつてる小豚みたいに發病に苦んで柱や桓根をぶち倒す惡魔共を置いて行きますせう。

ダキツド (ためらつて) だが、みんな人間だよ、ヌリユウス。

アナテマ 彼奴等を打ちちやつて、さつぱりして淋しい所で神様の前に立つてごらんなさい。石をあなたの寢床とし、吠えてゐる豪狗を友達として、空と砂にだけダキツドの後悔の呻き聲を聞かせておやりなさい……他人の罪の一寸した班點も彼の魂の清らかな雪の上へ踏み込むとはありますまい。癩病患者と一緒に居るものは、癩病患者になつてしまうのです……あなただつたら孤獨の中で神様を見ることが出来るでせう。人氣のない所へ行くんですね、ダキツド、人氣のないとこへね。

ダキツド わしはお祈りしよう。

アナテマ お祈りなさい。

ダキツド わしは斷食で身體を弱らせてしまふよ。

アナテマ 断食でさうなさい。

ダキツド わしは頭へ灰をかけるよ。

アナテマ どうして？ 不仕合せな人はさうしますね。あなたは罪がなくて幸福になれますよ

ダキツド。人の居ない所へ行きませう、ダキツド、人の居ない所へね。

ダキツド 淋しい所へ行かう、ヌリユウス、淋しい所へ。

アナテマ (忙き込んで) 逃げませう。誰も知らない洞穴がありますよ。其處には古樽があつて

酒の香がするんです、あんたをお隠ししますよ。みんなが寝込んだら……

ダキツド 人の居ない所へ行かう、人の居ない所へ。

忙いで駆け去る。部屋中は無秩序と静寂。開け放された窓から、祈るように、銅の喇叭の聲、地面で上げる呻き聲や號泣——ダーアーキーイード——が聞えて来る。転倒した家のやうに、頁を下へ曲げて、表紙を上に向けて聖書が横はつて居る。

——静かに幕——

第六幕

ダキッド・レイセルは一晚と翌日の一部を人目に届かない荒れた場所を知つてゐるアナテマが、案内してくれた、打ち捨てられたままになつてゐる石坑に隠れて居た。夕方になると、アナテマの忠告に従つて、彼等は隠家を大通りに出て、東の方へ行く路を辿つた。然し、もうダキッドに出逢つた最初の人が彼に氣が付いたのである、それ程彼の名聲は非常なもので、直接彼を見るか、彼を害いたものを知つてゐるかしないやうな女、子供、或は成長した男はなかつたのである。ダキッドだと知ると、餘りの嬉しさに叫び聲を上げて、行衛へ知れずになつた人が見付かつたと報知しながら町へ駆けて行つた。そしてやがてダキッドの家を取巻いて絶望しさうにしてゐた貧乏人達の無数の群が、追跡を初めたのである。その上彼等に大きな町や村の人々や、神を求めて居る凡ての人々が加つた。ダキッドは自分の希望と意志とで皆の所から逃げ出したのではなく、「恐怖と闇の公爵」にさらはれたものと思つて、ダキッドの無数の友人達は彼を掠奪者から奪ひ返して、地上の凡ての貧乏人達の上に君臨する王國を彼に提出しようとして決定したのである。

近づく追跡の聲に傳いて、ダキッドは助けるか殺すかしてくれと頼みながら、アナテマにすがりついた。アナテマは大通りから折れて、入口はあるが出口のない小路の網の中へ連れ込んでしまつたのである、その路は迂曲してゐるのである。出口がなかつたので、狡猾なアナテマが、到頭、欺かれぬ路に見切をつけた時に、ダキッドは失望しはじめた。其處で彼等は漁夫の所で舟を手に入れて助かるか、波の上で死んでしまふかといふ希望のうちに、遠くの海のどよめきの方へ一直線に進んで行つ

た。尙晝夜二人は歩き廻つた、そしてダキッドは疲勞にぐつたりしてしまつた。彼等が眞直ぐに進んで行くと、途中で、多くの高い垣や、小川や、深い堀や外の障害物に出逢つたからである。二人が最後の垣を匍ひ越えて、やつと海岸に辿り着いた時には、太陽はもう西に傾いて居た、ダキッドは下り口のない高い断崖があつて、町の建物の微かな輪廓が見える位町に近いのに恐ろしくなつてしまつた。

第六幕はこんな風である。舞臺の左手の隅から、断崖の碎けた線が上部へ向ひ、右手へ折れてゐる。下方、左手には水平線を高く上げてゐる不安な海。右手から、山の傾斜に沿つて、石の落込んだ半壊の石垣があり、その後には繁つて茫々とした庭——木立の間に二本の高い黒い絲杉。

嵐はまだ初まらないが、海も空も今にも起りさうな氣色。海は暗く、所々まるで光を失つて、夜の中に浸つて居るやうである、又他の場所では不吉なぼんやりした光の中で揺られて、丁度、幾千もの蛇が冷たい濕つた鱗を仄めかせながら、戯れたり、尻尾を打つてはれ返したを飛ばしたり、騒々しい音を立てしゆしゆ音をさせてゐるやうである。然し、空には暗い重い塊となつて、もやもやした、丁度おびやかされたやうな雲が水平線の彼方で交りあつて居る。上部の風に追はれた雲は水平線の彼方へと輕快に又重々しく滑つて行く紫紅色の太陽を素捷い動作のうちに追ひ越す。太陽は雲の緻密なカーテンを通してやつと見える、そして只時々、丁度生肉を食ひ、生血を飲んで、満腹して寝に行く、然しそれで

ゐて絶へず見廻しては探してゐる大男のやうに——血を浴びた眼差しをちらちら投げて、地や海を威嚇してゐる。

地上は静かだが、木々は夜になつて起る風をもう感じて、木の葉を揺がし、丁度内部から静かにひそめき合つてゐるやうである。凡ての部分の完全な黒い絲杉だけは——不動で無言である、そしてその尖つた頂の上で颯々を消してしまふ。

幕が開くと舞臺は空虚、それから垣を越してアナテマが匍ひ出し、疲労のためにやつと歩いてゐるダキツドの越すのを助ける。彼等の黒いゆつたりした着物は汚れて所々裂けてゐる。途中で二人共帽子を失くし、ダキツドの白髪は岩に碎ける白波のやうに頭の上で立つてゐる。

アナテマ　早く、早く、ダキツド。直き近くへ追つかけて來ましたぞ。こんなにひつそりとした暗い庭に居ると、あつちの方から遠くで怒鳴る聲が聞えますよ——まるであつちにも別な海があるやうだ。早く、ダキツド。

ダキツド　駄目だ、ヌリユウス。わしを此處へ置いて死なせてくれ。

アナテマ　足を此の石の上へおやりなさい。もつと氣を付けて。

ダキツド　わしの眼の前にはくるくる廻つて壁の方へ行く小路があるよ。それから又壁だな、

ヌリユウス、あの暗い堀には死んで脹れ上つた馬が居るな……わしらは何處へ來たんだね、ヌリユウス。

アナテマ　海岸ですよ。漁夫から舟を取つて波のまにまにやりませう——氣の違つた人間共よ、早く馬鹿の波の所で慈悲をお探さない、ダキツド。

ダキツド　さうだ。死んだ方がいい。(垣の傍に横になる) わしはもう五拾八歳だ、ヌリユウス、わしは休まにやならんよ……だが、大通りで逢つたら恐ろしく嬉しがつて、みんなを喜ばせるダキツドがおいでだなんて怒鳴りながら飛んで行つた、あの男は一體何者だらう。どうしてわしを知つたものか？ わしはあの男を一度も見たことがないんだが。

アナテマ　(海岸を調べる風をしながら) あんたの評判は大したもんです、ダキツド……おかしいな、下り口が見付からんぞ。

ダキツド　(眼を閉じ) 絲杉が黒くなつたよ——夜になると風が出さうだな、ヌリユウス。石坑に居た方がよかつたよ、彼處は暗くて静かだし、良心のさつぱりした人間のやうに寝られたかな。(咳くやうに) 何故黙つてるのだね、ヌリユウス？　もう人の居ない所へ來たやうに、わ

しは一人で饒舌らにやならんのかな

アナテマ 探してゐるんですよ。

ダキツド (不満さうに) 未だ探すものがあるのかね——もう今日はいいだけ探して、藝を仕込んだ犬みたいに跳ね廻つたじやないか。ヌリュウス、林檎を盗む小供みたいに、垣を越した時には恥かしかつたよ。此處へ来て、お前の旅の話でも聞かせてくれた方がいいな。わしは餘り疲れたんで眠りたいよ。

アナテマ 寝る譯には行きませんよ。(近付きながら) 此處には海へ降りる路がありませんぜ。

ダキツド それでどうだと言ふのだ? 他所ほかで探すがいい。

アナテマ (町の方へ手を伸し) ごらんなさい、ダキツド——何だかすつと向ふに白く見えますね。

ダキツド (頭を上げ) わしには見えない。

アナテマ あれはあなたを待つてる町ですよ。今度は聞いてごらんなさい。すつと向ふで何だか鳴つてるじやありませんか。

ダキツド (耳をすましながら) あれはな——ヌリュウス、無論、波の反響さ。

アナテマ 違ひます。今に此處へやつて来る人間共ですよ、そして彼奴等はあるから奇蹟を求め、あなたには此の世の貧乏人達の王國を捧げようといふんです。わたし達が岩に隠れた時町へ忙ぐ二人の人間の話を聞きましたかね、あなたは悪者に取られてしまつたから、あなたを奪ひ返して王國を差上げねばならんなんて言つてましたよ。

ダキツド わしは老ひぼれた病身の猶太人じやないか、わしは奪ひ取る價值のある一片の黄金でもあるのかね? かまはないでくれ、ヌリュウス、お前はみんなと同じやうに囃語ばかり言つてゐる……わしは寝たいよ。

アナテマ (辛捧なく) だつて、みんな此處へ来るじやありませんか。

ダキツド 勝手に來させるがいい。ダキツドは寝てしまつた、奇蹟なぞしたがつては居ない、みんなにさう言つてやつてくれ。

寝るのにもつと都合のいいやうに用意する。

アナテマ しつかりして下さいよ、ダキツド。

ダキツド (強情に) さうだ、奇蹟をしようなんて思つちやゐない。お休み、ヌリュウス。わたしは老人だから、つまらんことを饒舌りたくないよ。

アナテマ ダキツド!

ダキツドは答へない。両手を頭の下に置いて眠る。

アナテマ お起きなさい、ダキツド。みんなが此處へ來ましたぜ。(毒々しく眠つてる者をこづく) 起きなさいと言つたら! 寝たふりをしてるんですね——本當にするものですか。聞いてるんですか。(齒の間から) 寝てしまつた——呪はれた肉め!

離れて耳をすます。

アナテマ ははあ! 來るぞ——來るぞ——だが、奴等の王様はお休みだ。來るな——所が、奴等の奇蹟をする御本人は水を汲みに行く馬の夢を見てる始末よ。王冠と死を持つて來やがるな——奴等の犠牲と大將は口を開けて風をひつつかんで甘い接吻をしてござるて。可哀さうな奴等だな。お前達の骨の中には裏切、血の中には謀叛、心臓の中には偽が居るんだ、流れる水のまにまに、橋でも渡るやうに波の上を歩いた方がよささうだぜ。石によりかかるやうに、空

氣によつかかつた方がましさ——謀叛人に自分の高慢ちきな怒りや苦い夢を委すよりはね。(ダキツドに近付き、荒々しく彼を押す) 起きた。起きた。ダキツド、スウラが來ましたぜ——スウラが。

ダキツド (目を覺まし) お前かい、スウラ?……直ぐだよ、ひどく疲れてゐるからな、スウラ………何だ? お前か、ヌリュウス? スウラは何處にゐるんだ、今わしを呼んだじやないか。疲れた、疲れたよ、ヌリュウス。

アナテマ スウラが來ますよ。スウラがあんたの所へ赤坊を連れて來ますぜ。

ダキツド どんな赤坊さ。わしに赤坊なんぞありやしないよ。わし達の子供は……(立上り偉いて見廻す) 何だい、ヌリュウス? 誰だね、彼處で怒鳴つてるのは?

アナテマ スウラが死んだ赤坊を連れて來るんでさ。死んだ赤坊を生き返らせてやらなくちやいけませんよ、ダキツド。黒い子ですぜ、モイシエつて名のね——モイシエ——モイシエ。

ダキツド (立上つて、二三歩踏みつける) 逃げやう、ヌリュウス。逃げるんだ。道は何處にある? 何處へ連れて來たんだ。(アナテマの手を掴み) おい、みんなが怒鳴つてるじやないか。わしを追

つかけて、此處へ来るんだ——ああ、助けてくれ、ヌリュウス。

アナテマ 道がないんです。(ダキツドを抑へ) 彼處に深淵がありますよ。

ダキツド どうしたらいいんだ、ヌリュウス。下へ飛び降りて、頭を岩にぶつつけて粉味塵にするのか——だが、わしはお呼びなならないのに神様の所へ行くやうな悪者かしら？ああ、神様がお呼びなすつたら——わしの老ひぼれた魂は矢よりも早く神様の所へ飛んで行くだらう——(耳をすまし) 怒鳴つてゐる。みんなが呼んでゐる、呼んでゐる——あつちへ行つてくれ、ヌリュウス、わしはお祈りがしたい。

アナテマ (離れて) だが、急いで下さい、ダキツド、奴等はそこまで来ましたからね。

ダキツド (跪つき) 聞えますか。みんながやつて來ます。わたしはみんなを愛して居るのですけれど、わたしの愛情は憎しみよりもいけないのです、冷淡なのと同じやうに無力なのでございます……わたしを殺して、お自分でみんなにお逢ひ下さいまし。わたしを殺して——お慈悲でお逢ひ下さいまし、そしてあなたの愛をかけてやつて下さいまし。わたしの肉體で飢えた地を肥やし、其の上へパンを造り、わたしの魂で悲しみを慰めて、笑聲を大きくして下さいまし。

そして喜び——ああ、神様——人間のための喜び……

多くの群衆の近付くのが聞える。個々の聲は未だ解らないが——凡て一つののろい、こちらへ来る叫び聲になる。

アナテマ (近付き) 早く、早く、ダキツド——近付いて來ませ。

ダキツド 直ぐだ、直ぐだよ。(失望して) 喜びは——それから何だらう？ たつた一言、一言

だけ……だが、忘れてしまった。(泣く) ああ、言葉は随分あるんだが……たつた一言が言へない……だが、お前には一言も要るまいね？

アナテマ たつた一言が言へないんですつて？ おかしいな。奴等は自分の言葉を見つけたやうですぜ——ダキツド、ダキツドつて奴等が喚めいてるのが聞えませう。お立ちなさい、ダキツド、奴等に威張りくさつて逢つておやりなさい、何だかあんたを馬鹿にしかけたやうですよ

ダキツド立上る。下から、明かに彼を認めて——叫び聲が嵐にも似た嬉しさうな吠聲となる。誰かが他の者を追ひ越し、走り出して、「ダキツド」と叫ぶ、そして両手を振りながら、後方へ走り去る。太陽は血のやうな眼差で高い丘や緑杉やダキツドの白髪頭を掴み、溢れた眉のカアテンの下にある

眼のやうに雲の後に隠れる。或る一場所で、海は血を注ぎかけられて、丁度、致命的な戦闘が深淵の無言の中で起つたやうである。

ダキツド (二歩退き) わしは怖いよ、ヌリユウス。ありや道であつた赤髭の男だ……わしは彼奴が怖い、ヌリユウス。

アナテマ 彼奴等に威張りくさつて逢つておやりなさい。真理で、真理でなぐりつけておやりなさいよ、ダキツド。

ダキツド わしを捨てちやいけないよ、ヌリユウス、さもないとわしは又真理が何處にあるか忘れてしまうからな。

下から垣を越して忙しく走つて来た人々が現れる。彼等はダキツドのやうに汚れて疲れてゐる、そして盲人のやうである。然し顔には火のやうな喜びがあり、言葉^もを言ふ代りに「ダーアーキーイード、ダーアーキーイード」といふ勝ち誇つた、幾分貪慾な吠聲。

ダキツド (両手を伸し) 歸れ。

一同彼の言ふことを聞かないで、同じやうなろい號哭の聲を上げて這つて来る。一番遠い列まで

それが傳はつて行く、そして前の者がもう黙ると、何處かずつと遠方で、幾重にも重つた反響のやうに、ダーアーキーイード、ダーアーキーイードといふ弱々しい呻聲が消えて行く。

アナテマ (大膽に) 何處へ行くんだ。歸れ——歸れと言つてるじやないか。

前の者恐怖に捉はれて立止まる。

大勢の聲 待て。待て。ありや誰だ。——ダキツドさんかい？——なあに、ありや泥坊だ——泥坊だ——泥坊だ。

或る不安な男 靜かに。靜かに。ダキツドさんが何か言ひたさうだ。ダキツドさんのおつしやることを聞くがいい。

靜まる。然し遠方では未だ、「ダーアーキーイード、ダーアーキーイード」といふ引伸した聲がする。

ダキツド 何の用だ。ああ、さうだ、わしだ、ダキツド・レイゼルだ、お前達と同じ町から来た猶太人だよ。何だつて盜賊みたいにわしを追つかけて、強盗みたいに喚きたててわしを嚇かすんだ

アナテマ (大膽に) 何の用だい。此處から歸つちまへ。俺の親友のダキツド・レイゼルはお前達に逢ひたくないさうだぜ。

ダキツド さうだ。わしを此處で死なせてくれ、わしの心へもう死が近付いてるんだから。女房や子供の所へ行くがいい。わしはどうしたつてお前達の苦しみを軽くする譯にはゆかないよ、行くがいい。わしの言ふ通りだらう、ヌリュウス。

アナテマ さうです、さうです、ダキツド。

或る不安な男 わしらの女房も子供も此處に居るんです。ほら、みんな立つて、あなたの優しいお言葉を待つてるんです、みんなを喜ばせて下さるダキツドさん。

ダキツド わしにはもう力も無きや、言ふこともない。歸るがいい。

女 もうちよつと前へおいで、ルウキム、さうしてわしらのダキツドさまにお辭儀をおしよ。

あなたはきつと彼を覚えておいでせう、ダキツドさま……もう一遍お辭儀をおしよ、ルウキム！

少年がおつおつとお辭儀をして、再び群集の中に隠れる。人の宜きさうな笑聲。

旅人 (笑ひながら) 彼奴はあんたが怖いんでさ、ダキツドさん。怖くないよ、お前。

堪えた笑聲。旅人進み出る。

旅人 ダキツドさん、お呼びなすつたから——わしらは来たんです。わしらはもう随分黙つてあなたのお慈悲深いお呼び出しを待つて居たのです。そしてあなたのお聲が地球の一番遠い端れまで届いたんですよ、ダキツドさん。道は人間で黒くなつて、邊鄙な小路は動き出すし、狭苦しい路は足で一杯になつて、今に大通りになつちまうせうよ——身體中の血がたつた二つの心臓へ走るやうに、世界中の貧乏人がみんなあなた一人の所へやつて來ますよ。あなたをお迎へ申して——みんな土地も命もあなたにお贈り申しますよ、ダキツドさま。

ダキツド (苦しんで) 何が欲しいんだ。

旅人 (静かに) 正義でござりますよ。

ダキツド お前達は何が欲しいのだ。

一同 正義でござります。

さう言ふ言葉一つである——然し雷が地上に鳴り渡つてしまつたやうに、もう静かになる、近くのもの

も、遠くの者も、もう誰も聞いたのが、言つたのが、考へたのが——或は何も無かつたのが知らない。期待。

ダキツド (突然な希望を抱いて) おい、ヌリユウス、言つてくれ、正義つて奇蹟じやないかな。

アナテマ (苦々しく) あつちに盲人達が居るが——みんな無邪氣なもんだ。あつちには死人共が居るが——みんな矢張り無邪氣なもんだ。地は墓場をあなたの贈物にして闇でお迎えしてまさら。奇蹟をやつてごらんなさい。

ダキツド 奇蹟? また奇蹟か?

旅人 (疑ふやうに且氣難かしく) わしらが名を言ふのもいやな奴と、あなたが話をなさるのを見んな嫌つて居るのです。彼奴は人間の敵です、彼奴は夜中に、あなたが寝ておいでの方に、あなたを盗み出して此の山へ連れて來たのです……だが、彼奴はみんなの心を盗まうとしなかつたんで、始終動悸を打ちながら——心がわしらをあなたの所へ連れて來たんです。

アナテマ (當、するやうに) どうも、此處じやわしは餘計者らしいな。

ダキツド 違ふ、違ふ。わしを棄てないでくれ、ヌリユウス。(苦しみながら) 行つた、行つた、

此處から歸つてくれ。お前達は神様を試してるんだな——わしはお前達なんか知らんよ。歸れ……歸れ。

アナテマ (手短に) あつちへ行け。

多勢の聲 (傳いて) ダキツドさまがお怒りだ——どうしたら宜からう——旦那様がお怒りだと?——ダキツドさまがお怒りだ。

旅人 スウラさんは呼ぶがいい。

女 スウラさんと呼ぶがいいよ、スウラさんを。

多勢の聲 スウラさん。スウラさん。スウラさん。

スウラ、スウラと遠くの列へ傳つて行く。

ダキツド (恐れて) 聞いてるかね? みんなスウラを呼んでるよ。

嬉しさうな聲 スウラさんだ。

群集は一層大膽になる。

ヘツシン (幾重にも鮮儀をして) わしですよ、ダキツドさん、わしです。御機嫌宜しう、ダキツ

下さま。

ソンカ (類笑みながら、幾度も證をして) 今日は。御機嫌宜しうございます、ダキツドさま。

ダキツドは他所を向き手で頬を被ふ。

アナテマ (冷淡に) あつちへ行け。

二筒の混亂、途切れた微笑、堪へた歎息。恭々しく手を引かれてスウラが現はれる、さうしてダキツドを隔てて居る眼に見えない線まで来る、その線から先へは一人として出ることが出来ない。尙數歩一人で進む。

アナテマ 後を向いてどらんない、ダキツド……スウラが来ましたぜ。

スウラ (優しく) 御機嫌よう、ダキツド。あなたのお邪魔をして許してね、でも、皆さんがあなたとお話して、何時家へ、あなたの御殿へお帰りなさるか訊いてくれとおつしやるんですもの。それから忙いして下さるようにつてお頼みですわ、ダキツド、もう餘り苦しくつて死んだ者が随分あるんですもの——死人達はもうしびれを切らし初めたのよ。餘り苦しくつて氣狂ひになつた者が随分あるわ、今に人殺しを切めてよ。あなたが早くしてくれないとね、ダキツド、み

んなお互に敵同志になつてよ——さうなつたら死んだ土地に國を建てるのは容易じやないわ。

速くの列で「ダーアーキーイード、ダーアーキーイード」といふ苦しい慟哭の聲。

ダキツド (落付いて) お歸り、スウラ。

スウラ (優しく) 着物が破れたのね、ダキツド、何處か身體にお怪我はなかつて。どうしたの。

何故あたし達と嬉しく暮してくれないの。

ダキツド (泣きながら) ああ、スウラ、スウラ。わしをどうしようといふのだ。考へて御覽、

スウラ——みんな考へてくれ——わしは何も彼もやつてしまつたじやないか——何にも残つちや居ないじやないか、わしがお前達を氣の毒に思つたやうに、わしに同情してくれ、そしてわしの無用な身體を石で叩きつけてくれ。わしはお前達を愛して居る——わしが言ふのでは怒つた言葉も力が無いし、愛する者の口から出る恐ろしいこともお前達を怖がらせはしない——わしを憫れに思つてくれ。わしにはもう何にも残つちや居ないのだ。わしの血管には血も少ししかないが、お前達の苦しい渴を愈すことが出来たら——最後の一滴までお前達に上げるではないか。海綿のやうにわしはわしの白石のやうな掌で自分の心臓を押しつぶししょう——生命

を惜しがる狡猾な心臓だつて一滴も隠させはしないよ。

力を籠めて着物を引き裂き、爪でむき出しの胸をひつ掻く。

そら、血が出た——血が出たぞ——お前達のうち一人でも嬉しいと思つて笑つたものがあるかね。お前達の足元へ——わしが髭を引き抜いて、白髪の房を放り出した所で——死人が一人でも起きるだらうか？ お前達の眼へ唾をはいたら——一人でも盲人が見えるやうになるだらうか？ かうしてわしが石を……石を氣の狂つた獣みたいに噛み砕いたら——一人でも飢えた者を満腹させられるだらうか。わしが斯うしてわしの身體をお前に投げ出したら……

素早く數歩進み出る——群集は恐れて後退りする。驚愕の叫び聲。

アナテマ さうだ、さうだ、ダキツド。毆つてやりなさい。

スウラ (後退りして) ああ、あたし達を罰しないで下さい、ダキツド。

旅人 (群集に向ひ) あの人は盜坊の言ふことを聞いてるんだ。みんなには何にもやりたくないつて言つてるぞ。唾をはいて、みんなの眼へかけてやるんだつて言つてるぞ……

驚愕と起つた憎惡の叫び聲。然し遠くの列では依然として「ダーアーキーイード、ダーアーキーイー

ドといふ慟哭の聲。

或る男 唾なんぞみんなにかけるものか。わしらはあの人に何にもしないんだからな。

他の男 見たぞ、見たぞ、あの人は石を取つたんだ。助けてくれ。

アナテマ 用心なさいよ、ダキツド、今に奴等石を拾やがるから。彼奴等あ黙だ。

旅人 (ダキツドに向ひ) お前さんはわしらを欺したんだ、猶太人。

スウラ (進つて) さう言ふものじやないよ。

ヘツシン (旅人の胸を掴み) もう一度言つて見ろ、息の根止めてくれるから。

ダキツド (叫ぶ) わしは誰も欺しはしない。わしは皆やつてしまつたから、何にも残つちや

居ないのだ。

アナテマ 聞いたか、馬鹿共。ダキツドは何にも持つちや居ないんだ。(笑ふ) 何にもありや

しないんだ。さうでせう、ダキツド？

旅人 聞いたかね——何にも持つちや居ないんだつて。じやあ、何だつてわしら呼びなすつた

あの人は欺したんだ。欺したんだ。

へツシン (疑つて) だが、本當だらうな、スウラ、何にも無いつて——御自分でおつしやるんだから。

スウラ ダキツドの言ふことを聞いちゃいけない。病氣なんだよ。疲れて居るのさ。あたし達に残らずくれるよ。

旅人 (悲しみ怒つて) どうしようつてんだ、ダキツド? みんなをどうする気なんだ、畜生。或る不安な男 さあ、人を喜ばせるといふダキツドが、わしにしたことを聞いてくれ。十圓やるつて約束して置きながら、後になつてそいつを取上げた上、たつた一錢くれやがつたんだ、そこでわしはこいつ偽物だと思つたから、そいつを持つて店へ出掛けて、うんと買物をしたんだ——するとみんな笑つて、盗坊みたいに俺を追ひ出しやがつたんだ。貴様——盗坊だな。手前——牛乳も寄越さないで俺の子供を放つたらかして置きやがつた大盗坊だぞ。そら、手前のくれた一錢だ。

錢をダキツドの足元へ投げ出す。大勢の者が彼の通りにする——皆一錢宛持つて居る。

スウラ (ダキツドを守り) ダキツドを馬鹿にするんじゃないよ。

ダキツドは兩手で額を隠して無言のまま泣いて居る。

或る怒つた男 謀叛人め! あいつは死人を嘲笑ふつもりで、墓場から引き出しやがつた。石で殴りつけてやれ。

石を取りに届む。其の瞬間に強い風が起つて、遠くで雷鳴がする。群集の中に恐怖が起る。

ダキツド (頭を上げ、胸をはだけながら) わしを石で殴つてくれ——わしは謀叛人だ。

雷鳴尙烈しくなる。アナテマは面白さうに哄笑する。

旅人 謀叛人だ! あいつを石で殴りつけてやれ——欺しやがつたんだ。裏切つたんだ、諺を言やがつたんだ。

混亂。一同石を擲んで、ダキツドに近付く。慟哭しながら逃げ去る者もある。

ダキツド わしを連れて行くがいい。お前達の所へ行かう。

アナテマ 何處へ行くんです。殺されちまひませ。

ダキツド お前は敵だ。放せ! (離す)

旅人 (頭上に石を差し上げ) さがれ、悪魔!

アナテマ (せかせかして) 呪つてやりなさい、ダキツド。今に殺されますぜ……早く。

ダキツドは両手を上げ——石に打たれて倒れる。殆んど言葉なく、憤怒のために口をつぐむで、丁度地に向つて怒るやうに激かに眩きながら——一同は新しい石、新しい石と不動の肉體に投げつける。雷鳴は聞えない。アナテマのきいきいした笑声も聞えない。突然誰か大聲にわあと泣き出す。女である。それに續いて他の女も泣き出す。叫ぶ聲、吠える聲。一同身體を曲げて逃げ出す。ダキツドの頭に投げようとして、最後の男が石を拾ひ——見廻すと——只一人である——石を落し、荒々しい叫び聲を上げて頭を抱へて逃げ去る。遠方の叫び聲。何か怖ろしいことが群集の中で起る。

アナテマ (身體を揺つて、石の上へ飛び上り、降りて再び飛び上つて眺める) ああ、あなたの勝利ですぜ、ダキツド。(哄笑する) ねえ、ごらんなさい、あんなを呪つた奴等の走つて行くさまを。あつはつはつ！ 崖からどんぶりこだぞ！ あつはつはつ！ 海へ飛び込みやがらあ。はつはつ！ 子供を踏んづけやがらあ！ ごらんなさいよ、ダキツド、子供を踏んづけてらあ！ あんたがしたんだ、偉大な強いダキツド・レイゼルがね。神の愛兒——あんたがしたんだ！ あつはつはつ！

身體が揺れるほど哄笑しながらくるくる廻る。

ああ、この喜びを抱いて何處へ隠れようかな。ああ、この報知を持つて何處へ行つたものかな——それにや地上の場所は餘り小さ過ぎらあ。東西南北よ、見ろ、聞け——人間を喜ばせるダキツドは——人間と神とに殺されたんだ。あいつの臭い死骸の上にこの俺は——アナテマは立つて居るんだぞ。(空に向ひ) 聞いてるか？ 出来るものなら返事をしろ。

ダキツドの肉體を踏みつける。と、足の下から呻き聲が聞え、慄えて、奇妙に揺れながら、血塗みれの白髪頭が起き上る。

アナテマ (後退りして) 未だ生きてるのか。此處でも嘘を言やがるのか。

ダキツド (匍ひながら) お前の所へ行くよ。待つてくれ、スウラ。直ぐだよ。

アナテマ (屈んで、好奇心を抱いて調べる) 匍つてるのか——俺のやうにかい——犬みたいにかい？——彼奴等についてかい？

ダキツド (死の苦しみを抱いて) ああ、とても行けない、わしを連れて行つてくれ、ヌリユウス。わしを石でぶつちやいけないと言つたじゃないか——ああ、石でぶたして置くがいい。連れて行つてくれ、ヌリユウス。わしはそつと鬮の上になつて、隙間から、可愛い子供達の……

……食ふ様子を見るんだ……ああ、髭。ああ、恐ろしい髭だ……ああ、怖がるんじゃないよ、お前——お前だけは伶俐だよ、一人笑つてるな。娘や、わしの可愛い娘。

アナテマ (足を踏み鳴らし) 違ふよ、ダキツド。お前は死んだんだ——餓鬼共も斃ばつたんだぞ。地も死んだんだ——死んでるぞ——死んでるぞ。見ろ。

ダキツドはやつと立上り、もう弱く半ば死んだ両手を伸ばしながら眺める。

ダキツド 解るよ、ヌリユウス。古馴染み……わしの古馴染み、此處に居てくれ、お願いだ、わしはみんなの所へ行くからな。知つてるかね、ヌリユウス…… (迷ふ) 一錢見付けたやうだ…… (静かに笑ふ) おい、ヌリユウス、この書類を調べてくれ……アブラム・ヘツシンはわしの友人だ…… (熱心に) アブラム・ヘツシンはわしの友人だよ。(倒れて死ぬ)

丁度巨大な石の階段を、重い石の着物を着た人間が降りて行くやうに遠くで雷鳴が微かになりながら鳴る。黒い、渦を巻いてゐる雲のためにもう暗い、然し烈しい風は止んでゐる。赤い太陽は水平線まで下つて、雲のむくむくとした中に圓い上部を、丁度接合したやうな、巨大な近い塊を現はす。隠れる。

アナテマ (屈んで) 今度は本當かい。斃つたかい。それとも又謙かい。いや……本當のお駄佛だ。握り拳を寄せ。開ける。いやかい? だつて、俺の方が強いぜ。(立上つて何か手の中のものを探る) 一錢だ。

輕蔑するやうに捨てる。足でダキツドの死骸を動かす。

あばよ、馬鹿。明日になつたら此處の奴等が死骸を見付けて、人間の習慣通り立派に埋めてくれるだらうぜ。親切な人殺しは自分の殺した奴を好くもんだて。可愛がつて貰つた御禮にお前を殴り殺したあの石で、丈の高い、曲つた記念碑を建ててくれるだらうよ。

笑ふ。急に笑ふのを止めて、高慢な役者のやうなボオズをして立止まる。

アナテマの手から勝利を奪ひ取るものは誰だ? 俺は強者を殺し、弱者を酔つ拂ひの踊りで——氣狂ひ踊で——悪魔踊で廻はしてやるんだ。

足で地を打つ。

鎮まれ、地よ、俺におとなしく贈物を持つて来い、お前の主人の名で、殺せ——焼け——叛け人間。甘い香の血の海に、赤々と輝く眞紅な帆をはつて、俺は獨木舟を浮べるんだ…… (空に

向つて素早く) ……返答を聞きに貴様の所へ行くぞ。腹匍ひの犬ではない、立派なお客となつて、大地を治める公爵となつて、貴様の啞の岸へ船をつけるぞ。(堂々と)用意をしろ。俺は確かな返答が聞きたいんだ。はつはつはつ!

笑ひながら闇の中に隠れる。

—幕—

第七幕

何事も起らず、何の變化もない。

依然として永遠に閉された鐵門が重く地を押しつけ、その向ふに萬物の根源、宇宙の大理性が沈黙と神祕の中に住んで居る。同じく入口を護る男は無言で威嚇的である——何事も起らず、何の變化もない。

灰色の石のやうに無口な灰色の光は恐ろしく、その場所も恐ろしい——然しアナテマはそれが好きである。其處で彼は再び現はれる、然し犬のやうに腹匈ふでもなければ、盜坊の様に石の蔭に隠れるでもない——勝利者然と高慢な足取りで、悠々とした重々しい態度で自分の勝利を堅くしようと努める。だが、悪魔は決して正直ではあり得ないし、彼の疑惑には限度がないから、彼は此處へ自分の永久的な二重性を持つて来る。歩き振は支配者のやうであるが、内心は怖れて居る、君主のやうに頭を上方へ投げて傲然としてゐるが、自分では自分の誇張した重々しさを嘲笑して居る。陰鬱で邪惡な道化者の——彼は偉大さを求め惱んで居るが、笑を餘儀なくしながら笑を嫌つて居る。

かうして、非常に重々しい態度で山の中央まで来て、傲慢な態度で待つて居る。然し火が乾いた木が燃やすやうに——沈黙は彼のあやふやな尊大さを燃やしてしまふ——拙劣な樂師のやうに、間が待ち切れなくなつて、自分を、自分の疑惑や忌はしい恐怖を、色々な冗談や大聲や忙しさうな動作で隠さうと忙し初める。足を踏み鳴らし、わざと威嚇的な聲で叫ぶ。

アナテマ どうして喇叭とお祭がないんだ？ 何だつてこんな古ぼけた錆つこの門を締めてを

くんだ？ 何だつて誰も俺に鍵を寄越さないんだ？ 上流の社會じゃこんな風に立派な客人を、俺達の親しい地を支配する公爵をお迎へする習慣になつてゐるのかい。門番だけだ、それもお休みのやうだて、外に誰も居やあしない。駄目だ。駄目だ。

嗤笑する。ぐつたりと身伸びをして石の上に坐る。優しく、勿體振つて——疲れたやうに言ふ。

だがな、俺は自慢をするんじゃないぞ。喇叭も、花束も、喚聲も——みんなつまらんものさ。俺は何時かダキツド・レイゼルの名聲をちやほやした話を聞いたが——それでどんなことになつたんだい？ (嘆息する) 考へるだけでも氣が減入らあ。(悲しさうに口笛を吹く) お前は俺の親友のダキツド・レイゼルがどんな不愉快な目にあつたか、無論、聞いたらう？ 忘れもしないが、あの最後にお前と話をした時には、お前は未だ彼の名を知らなかつた——だが、今じゃもう知つてるだらう？ 誇るに足る名だ。俺が地上を去ると、世界中の幾萬の飢えた奴等が一口に、詐欺漢のダキツド、謀叛人のダキツド、謔つきのダキツドとあの立派な名前を怒鳴つたんだ。すると、俺にや、その中にそそつかしく誰か外の奴のことを叱つてる者があるやうな氣がしたんだ。だつて、不意に死んだ俺の正直な友人があんなそそつかしい振舞をしたのも自分の名か

らじやないからな。

門を護る男無言。憎悪に息を切らしながら、今度はわざとでない勝利を抱いてアナテマが叫ぶ。

名だ。ダキツドと幾千人を殺した奴の名だ。俺はアナテマだ、俺に心臓はない、俺の眼は地獄の火の上で干乾びてしまつて、涙もなくなつてしまつた、だが、若し涙があつたら、俺はみんなダキツドにくれてやつたらう。俺に心臓はないが——何だか胸の中で動いたことがあるが、心臓が生れるやうなことがあるかしらと愕いた。俺はダキツドが数千の人間と一緒に死ぬ様子を見たんだ、俺は太陽に當つて斃つた蟲けらみたいに、彼の魂が黒く、痛ましくねじれて俺の闇と死の虚無の深淵へ沈んで行くのを見たのだ——言つて見ろ、ダキツドを殺したのはお前じやないか？

門番　ダキツドは不死を得たのだ、そして不滅の火の中で死ぬことなく生きてゐるのだ、ダキツドは不死を得て、生命である不滅の光の中で死ぬことなく生きてゐるのだ。

愕いてアナテマは地上に倒れ、一瞬間じつと横はつて居る。それから蛇のやうに怒つた頭を上げる。そして立上つて、限りのない憤怒から来る程かさを持つて言ふ。

アナテマ　　嘘だ。俺の無禮を許してくれ、だが、お前の言ふことは——嘘だ。無論、お前の力は無限だ——お前は太陽に當つて黒くなつて死んだ蟲けらにも不死を與へることが出来る。だが、それが公平だらうか。それともお前も服従してゐる數が嘘を言つてるのか。凡ての尺度の示す所が嘘なのか、お前の世界はみんな嘘の連続つなぐなのか——法則に對する慘酷で野蠻な遊技なのか、奴隷の無言と従順に對する暴君の邪惡な嘲笑なのか。

不滅な盲目の苦しみの中で陰鬱に言ふ。

アナテマ　　俺は探し疲れた。俺は永遠に消え失せたものを追ひながら、生きることにも無駄な苦しみをすることにも疲れてしまつた。俺を殺してくれ——だが、馬鹿なことをして俺を苦しめないでくれ、俺が奴隷の反抗にも正直だつたやうに、正直に返事をしてくれ。ダキツドは愛さなかつたか——返事をしろ。ダキツドは魂を返しはしなかつたか——返答をしろ。魂を返へしたダキツドを石で殺しはしなかつたか——返事をしろ。

門番　　さうだ。魂を返したダキツドを石で殺したのだ。

アナテマ　　(陰鬱に笑ひながら) 今度は正直だな、おとなしく返事をしたな。飢えた者達の腹を

満たさず——盲人達の眼に見えるようにもせず——罪もなく死んだ者に生命を返さず——喧嘩口論や、血を見る惨酷なことを起しながら、人間共はお互ひに敵対し、ダキツドの名で暴行、殺人、掠奪をしてゐる——ダキツドは愛の無力を示しはしなかつたか、數で數へ、尺度で測ることの出来る大悪をつくりはしなかつたか？

門番 さうだ、ダキツドはお前の言ふ通りのことをしたのだ。人間はお前の答めてゐることをしたのだ。數は讒を言はないし、重量は正しい、凡ての尺度はあるがままだぞ。

アナテマ (勝ち誇つて) そら見ろ！

門番 だが、お前の知らないものは尺度で測り、數で數へ、秤量ではかることが出来ないぞ、アナテマ。光には境界がなく、眞紅の火には境がないのだ。太陽が黄色の藁のやうに燃える下には赤い火も、黄色の火も、白い火もあるのだ——未だその外に、眼に見えぬ、誰一人知らぬ火もある——赤々と燃へる火には境がないからだ。數の中で滅び、尺度と量の中で死んだダキツドは不滅の火の中で不死を得たのだ。

アナテマ お前は又讒を言ふ。

絶望して地上を轉々とする。

アナテマ ああ、正直なアナテマを助けてくれる者はないか。彼は永久に欺されてゐるんだ。

ああ！ 誰か不幸なアナテマを助けてくれる者はないか、彼は不死に——欺されたのだ。悪魔を慕つた者よ、泣け、眞理を憧れ、智慧を尊敬した者よ、泣き悲しめ——彼は永久に欺されてゐるのだ。俺が勝てば——彼奴が奪ひ取つてしまふ、俺が勝てば——彼奴は勝利者を鎖に縛りつけ、支配者の眼を刺し、高慢な者には犬の身體をさせ、ぶらぶらと慄える尻尾を與へるのだ。ダキツド、ダキツド、俺はお前の友人だつた、彼奴の言ふことは讒だと——彼奴に言つてやれ

犬のやうに伸ばした両手の上に頭を置いて、苦しきうに呻る。

眞理は何處にある——眞理は何處にあるんだ——眞理は何處だ。石で殺されたのか——堀の中で腐肉と一緒に轉がつてやしないか——ああ、光は世界の上で消へてしまつた、ああ、世界には眼がない——鴉が喙き出してしまつたのだ——眞理は何處にあるんだ——眞理は何處だ——眞理は何處だ。(悲しきうに) 言つてくれ、アナテマは眞理を知つてるのか。

門番 知るものか。

アナテマ　　言つてくれ、アナテマは門の開くのを見るだらうか。俺はお前の顔を見るだらうか
門番　　いや。決して見ない。俺の顔はむき出しになつてゐるが——お前には見えないのだ俺は大
きな聲で話してゐるが——お前にはそれが聞えないのだ。俺の命令ははつきりしてゐる——だ
が、お前にはそれが解らないのだ、アナテマ。お前は決して見も——聞きも——知りもしない
のだ、アナテマ——數の中で不死な、尺度と量の中に永久に生きてゐるが、未だ生命のために
生れない不幸な魂だ。

アナテマ飛び上る。

アナテマ　　誰だ——無口な牡犬め、鐵で入口を塞いで、世界から眞理を盗み出した盜坊め。あ
ばよ——俺は正直な遊びが好きなんだ、損は返してやるよ。だが、お前が返さなきや——全世
界に向つて、盗人だ——助けてくれと怒鳴り散らしてやるぞ。

　　・ 哄笑する。口笛を吹きながら、數歩離れて振返る。不注意に。

俺はすることがないから、世界中をうろつくんだ。これから俺が何處へ行くか知つてゐるかい。
ダキツド・レイゼルの墓場へ行くんだぜ。後家さんみたいに、隅つこから謀叛人に殴りつけら

れて死んだ親爺の悴みたいによ、——俺はダキツド・レイゼルの墓に腰を掛けてさ、世の中の正
直な心だつたら、人殺しを呪はないやうなものはないといふ位苦しうに泣いて、大聲に喚き
散して、恐ろしく呼んでやるんだ。餘り悲しくつて分別を失くした俺は、こいつが人殺しじや
ないかつて、右も左も指してやるぞ。こいつがああ血だらけの悪業を手傳つたんじやないか、
こいつが裏切をしたんじやないかつてな。レイゼルの名で、ダキツド・レイゼルの名だよ、人
を善ばせてくれるダキツドの名だよ——世の中の奴がみんな人殺しや首斬役人になる位ひどく
泣いてやるんだ、嚴しく訴つてやるんだ。死骸の山から、汚ららしい、臭くつて穢ない死骸
の山から、ダキツドや人間を殺したのは貴様だつて——知らせてやつたら、みんな俺を信ずる
ぞ。

哄笑する。

お前には誰つき——詐欺師——人殺し——なんてひどく悪い評判があるぜ。あばよ。

笑ひながら退場。もう一度後景から彼の哄笑する聲が聞えて来る。そして萬象は無言に返る。

大洋の上には霧深い二月の黄昏が立ちこめて居る。今しがた雪が降つたが、それも溶けて、暖い空気は重く濕つて居る。大陸の奥に向つて海の南西風が空気を音くなく押し追ひたてて居る。その交代する所には——海の鹽氣、無限の遠がり、何物にも破壊されない、自由な神秘的な廣々しさの香はしく鋭い結合がある。太陽の沈むべき方面には、見えない都會、見えない國の音もない破壊が起る。火や煙の中に建築物、塔等のある華麗な宮殿が破壊され、凡ての山脈は音もなくひびが入り、ゆるく傾き、永くくずれ落ちる。然し叫聲も、呻聲も、くずれ落ちる轟きさへも地に達しない——影の奇怪な戯れは音もなく完成され、何物かの用意をし、何物かを待つて居る大洋の偉大な廣々しさは、弱々しく反射しながら、それを聲もなく受け入れる。

漁村は静寂、漁夫達は魚獲に去つて、子供達は眠つて居る。只、不安な女達が、家々に集つて、靜かに語つて居る。そして眠りに去るのを延ばして居る。その夢の向ふには常に不明があるのだ。海や家の後方の空の光や家や暗いその屋根は、黒く鋭い、遠景はない、遠く又近くは並んで、丁度次々に出て、屋根や壁に抱かれ、相互に身を寄せ、同じ永遠の不安に捕えられて居る。其處には小さな教會、その横壁は花崗岩やうの削られた石で粗野につくられ、深い隠された窓がある。不安と夜の訪れに柔げられたる女達の聲の注意深い音。

—今日はぐつすり寝られさうね。海は靜かだし、浪はダン爺さんとの鐘樓の時計みたいいきちきちと鳴つてるからね。

—みんな朝の上汐と一緒に来るのだよ。夫が朝の上汐と一緒に来るんだつて言つたんだもの。

—晩の上汐かも知れない。待ちほけを食ふより、さう思つた方がまだからね。

—だが、暖爐を焚かなくちやあ。

—夫が家に居ないと、火一つ焚かうとしないのだね。妾は決して火をたかないんだよ、寝る時でさへ、火が嵐を連れてくるやうに思へるからね。隠れて黙つてた方がいい。

—風の音が聞えるかい、いや、あれは恐ろしいね。

—妾は火が好きさ。火の傍で寝たいのだけれど、夫が許してくれないのだよ。

—何だつてダン爺さんは来ないのだらう。もう時計を鳴らす時刻だのにね。

—ダンは今日教會で弾くだらう、あの人は今日のやうに靜かだと堪らないんだからね。海が鳴ると、ダンは隠れて黙つて居るのだよ。

—海が怖いのだね。波がひつそりして居ると、ダンはこつそり這ひ出して自分のオルガンに向

ふのだよ。

女達靜かに笑ふ。

海を叱るのだよ。

神様におつくさ言ふのさね。あの人は随分ぶつぶつ言ふんだよ。海で死んだ人達のことを神様に話す時には泣きたくなるのだね。マリエツト、お前さん、今日ダンを見たかい。何だつて黙つてるの、マリエツト。

マリエツトは僧院長の養女、彼の家にはオルガン弾きのダンが住んで居る。深く物思ひに沈んで、マリエツトは質問を聞かない。

マリエツト、お前さん聞いてるの。ダンを今日見たかつて、アンナが聞いてるのだよ。

ええ、さうね。覺えて居ないわ。あの人自分の部屋に居るわ。父さんが漁獵に出掛けると、部屋を出るのをいやがるの。

ダンは町の坊さんが好きなんだよ。坊さんがただの漁夫みたいに魚を捕つたり、妾達の夫と一緒に海へ行くなつてことにはどうしても慣れる事が出来ないのだね。

あの人は海を怖がつてるだけよ。

お前さんはどう思ふか知らんが、妾の考へだと、妾らのところには世の中で一番いい坊さんが居るよ。

その通りだわ。妾、あの人が怖いけれど、父さんのやうに愛してるわ。

神様、お許し下さいませ、でも、若し妾があの人の養女でしたら、何時も自慢して喜んで下さいます、聞いて、マリエツト。

女達靜かに優しく笑ふ。

お前さん、聞いてるの、マリエツト。

マリエツト答へる。

聞いてるわ。だつて一つことばかりを笑つてて飽き飽きしないこと。さうよ、妾、あの人の本當の娘だわ——お前さん達が一生笑ふ程そんなことがおかしいのかしら。

女達狼狽して辯解する。

だつて、あの方は自分でその事を笑つてるんだもの。

——住職は冗談が好きなんだわ。あの方は随分滑稽に私の養女つておつしやるのだよ、でも、後で拳で叩いて、養女じゃあない、本當の娘だぞ。親爺は憎さの餘りはちきれるがいい、彼女おれはわしの本當の娘だぞつて怒鳴るのだよ。

マリエツト　妾はお母さんを一度も知らなかつたわ。でも、こんなに笑ふことなんかいやだつたでせう、妾、さう思ふわ。

女連黙る。岸を打つ大きな振子のやうな正確さを持つて、均しくぼんやりと波の音がする。未だ絶へず空には火と煙に抱かれた見えないう都會が落下するが、凡て落ち切らない。海は待つて居る。マリエツト下げた頭を上げる。

——お前さん、何を言ひたいの、マリエツト。

——あの人通らなかつたの。(マリエツト靜かに訊れる)

女びくびくして言ふ。

——しつ。何だつてあの人のことなんか言ふの、妾、あの人が怖いよ。

——いいえ、通りやしなかつたよ。

——通つたわ。妾、あの人の通つたのを窓から見たんだもの。

——お前さん間違へたのだよ。誰か他の者だつたのさ。

——外の人つて誰が此處に居るの。あの人の歩くのを一遍でも見たら間違ふことなんかないわ。

誰だつて外にあんな歩き方をする人なんかないんだもの。

——英國の海軍士官もあんな歩き方をするよ。

——いいえ、妾、町で海軍士官を見たんじやあないの、どつしりとすすつと歩くよ、娘達でも

あの人達を信する事が出来るね。

——まあ、氣をおつけよ。

おつおつした注意深い笑聲。

——いいえ、笑つてはいけない。あの人は歩いて来て足元を見ない、まるで地が氣を付けて、足を受取つて置く筈だといつたやうに足を降すんだよ。でも、石があつたら？——妾達の所には石が多いからね。

——風に向つても身體を曲げないし頭も隠さないね。

—さうよ、さうよ。あの人は頭を隠さない。

—美しいつてのは本當かい、あの人を近くで誰か見たの。

マリエツト 妾よ。

—いいえ、いいえ、あの人のことを話してはいけない。私、夜中眠られないんだから。あの人が山の呪はしい城へ引越してからといふものは、妾、どうも落付けないし、怖くて死にさうだよ。お前さんもさうだらう、本當の事をお言ひよ。

—まあ、そんなでもないよ。

—何だつてあの人は此處へ来たんだらうね。あの二人——こんな石や海ばかりの貧乏な國で何をするんだらう。

—あの人はジンを飲むのだよ。水夫が毎朝ジンを取りに来るのさ。

—飲む邪魔をするのをいやがる只の酔拂ひさ。水夫が通りを歩いてゆくと、後にまるでラム酒の口の開いた壺を持つてゆくやうな香が残るんだよ。

—でも、ジンを飲むのが——仕事なのかしら？妾、怖いよ。あの人達を乗せて来た船は何處にあ

るのだね。あの人は海から来たのだよ。

マリエツト 妾、船を見たわ。

女達愕いたやうに彼女に訊れる。

—お前さん、何だつて妾達に何にも話さなかつたの。お前さんの知つてることを話しておくれ。

マリエツト無言。突然一人の女が愕いたやうに叫ぶ。

—ああ、御覽、あの人の所で火が燃えてるよ。城に火が。

右手、村から半哩程の所に、黄昏と遠景の青々した中に弱々しい火、赤い石炭が燃え立つ。其處の、海に切り立つた高い岩の上に、古代の城、灰色の不思議な古代の痛々しい遺物が立つて居る。もう破壊されて死んだやうな城は岩と混じ、續き、その砲臺、投落された屋根、半ば散らされた塔の齒狀のあつちを砕けた線で敷いて岩を完成して居る。今、岩も城も黄昏と遠がりの煙りばい屍衣を着て、氣狀をなし、重味を失ひ、殆んど高い空に登り、音もたく倒壊するあの奇怪な建物の堆のやうに透明である。然しそれは落ちるが、之は立つて、連続した青がりの中に生きた火が赤ばみ——その方を見るのは、丁度若し雲の中に人の手が火を燃やしてゐるやうに痛々しく奇妙である。

頭を廻して愕いたやうに女達は眺める。

—お前さん、見て？（一人が言ふ）墓場の火よりもつといけないよ。墓の中で誰に光が入るんだらう。

マリエツト 夜になると寒くなるので、水夫が煖爐へ枝を放り込んだのだわ、それだけよ。兎に角、妾、さう思ふわ。

—妾はもうとつくに院長さんがあそこへ灌水刷水を持って行く筈だつたと思ふよ。

—それとも、憲兵を連れてだね。あれが悪魔自身でないのなら、きつとその救助者の一人だよ。

—あんな隣人が居るんでは落付いて暮せやしないよ。

—子供の爲に怖ろしいね。

—では、魂の爲には？

二人の年を取つた女無言のまま立上つて去る。第三の老婆立上る。

—院長さんに訊ねて見なければならぬね。あんな火を見るのも罪ではないかつてね。

退場。

空の煙益々多く、火は益々少く、既に見えない都會はその暗い最後に近い。海はより強く堅く香ふ。地からは夜が来る。

女達頭を廻して退場した者を見送り、再び火の方を向く。

マリエツトは誰かを守りながら靜かに語る。

—火の中に悪いものなんか無いわ。神様の前の蠟燭にだつて火があるんだもの。

—サタンの前の地獄にだつて火があるよ。（第二の老婆は腹立しさうにむにやむにや言ひながら去る。）

今四人残り、皆若くて娘である。

—妾、怖いわ。（友達に身體を押しつけて一人が言ふ）

空の音もない冷たい火事は終り、都會は破壊され、見えない國は破壊される。もう壁もなく、倒れた塔もない——青味がかつた蒼白い巨人の肉體の塊が無言に大洋と夜の深淵へ落下する。小星が眼を震はして地を突き、城の傍に雲の中から現れようとする、重い城は何も知らない附近から益々暗く、窓の火は益々赤く仄暗くなる。

—さよなら、マリエツト。（一人坐つて居た娘別れを告げて去る。）

—妾達も行きませう、寒くなつて来たんですもの。（同じく二人さう言つて立上る。） さよなら、

マリエツト。

— さよなら。

— あんた、どうして一人居るの、マリエツト。どうして夜も晝も、仕事日にも面白いお祭りにも一人で居るの、マリエツト。許婚者の事を考へるのが好きなの。

— ええ、好きだわ、フィリップのことを考へるのが好きだわ。

娘達笑ふ。

— でも、あの人に逢ふのがいやなの？ あの人が海へ行くと、あんたは始終海を眺めて居るんだけど、歸つて来ると——あんたは居ないのね。何處へあんた隠れてしまうの。

— 妾、フィリップのことを考へるのが好きだわ。

— あの人は家の中を盲人のやうに歩き廻つて「マリエツト、マリエツト。お前さん、マリエツトを見なかつたかね」つて呼ぶのよ。

笑ひながらかう繰り返して去る。

— マリエツト、さよなら……お前さん、マリエツトを見なかつたかね？……マリエツト……

少女一人。城の火を眺めてゐる。静かな決断のない足音に耳をすます。教會の後から、右手から、年取つたダンが登場、丈は高くない、顔の髯を剃つた瘦せて咳をする老人。不決断の爲か、或は眼の弱い爲か、彼は不確實に歩み、注意深く幾分おづおづと地に觸る。

— おほ、おほ。

— お前なの、ダン。

— 私ですよ。

— 海はひつそりしてるのね、ダン、お前、今日弾くの？

— おほほ、私七遍鐘を打ちます。七遍打つて、神様に七つの清い時をお送りしますよ。

鐘の紐を取り七つの響きのある長い打撃——時を打つ。風がその音と戯れる。地に落す、觸ることゝさせないで、相答へ、優しく揺れ、靜かに輕やかな音をたてて暗くなつてゆく地の奥へ去る。

— ああ、いけねえぞ。(ダンが咳く) 拙い時だな、地に落ちやがる。神様の清淨な時じやあないな、神様がやつらを後へやつちまうんだな。ああ、嵐が来る。神様、海で死んだ人達を憐れみ下さいますし。

眩き、且咳をする。

—ダン、妾、今日又船を見たわ。お前、聞いてて、ダン。

—海へ行く船はどつさりありますさ。

—黒い帆をはつたあの船だよ。又、お天道様に向つて行つたわ。

—海へ行く船はどつさりあります。ねえ、マリエツト、或る賢い王様があつてね、——ああ、どんなに賢い王様だつたらうな。——海を鎖でひつばたけつて言ひつけたんでさあ、おほほ。

—知つてるわ、ダン。お前が話してくれたんだもの。

—おほほ、鎖でさ。だが、王様は大洋に洗禮することを察しなかつたんだ——何故察しなかつたんだらう、マリエツト。ああ、何だつて察しなかつたのだらうな。今時そんな王様なんてありやあしない。

—その時分にやあつたつていふの、ダン。

—おほほ。

静かに騒ぐ。

—もう河も小川も洗禮を受けて、澤山な流れない沼迄に神様の十字架が觸つたんでさ。で、残つたものつていふと——汚はしい、鹽ばい、深い水溜だけでさ。

—どうしてお前、あの人を悪く言ふの、あの人はそんなこと嫌ひよ。(マリエツト答める)

—おほほ、嫌はせとくがいいや、私はあんなもの恐くねえんだからな。彼奴もオルガンで神様の音楽だと思つてるんだ。あいつだよ、汚はしい、びつびついふ氣狂ひのやうな水溜は。悪魔の鹽ばい啖ころだ。ちえつ、ちえつ、ちえつ！

教會の入口の扉の方へ行き、腹立たしきうに咳拂ひして、威嚇しながら宛も何か勝利を祝ふやうに。

—おほほ、おほほ。

—ダン。

—家へ行きなさい。

—ダン、弾く時に何故お前は火を焚かないの。ダン、わたし許婚者が嫌いだわ。聞いてて、ダン。

ダンいやいや頭を向ける。

—わしはもうとつくにそれを聞いてるよ、マリエツト。父さんに言つたらいい。

——わたしのお母さんは何處に居るの、ダン。

——おほほ、お前さん又氣が狂つたんだな、マリエツト。お前さん餘り海を見過ぎるといふものだ——全くだよ。わしが話さう、お父さんに話さうよ、さうだ。

教會の中に隠れる。其處から間もなくオルガンの音が聞えて来る。初めのゆるい、重苦しい、物思はし氣なアコオルドの中の弱々しい音は素早く強くなる。その人間的な歌の情熱的な愛慕で、ぼんやりして暗い疲れることのない白浪の愛慕と争ふ。嵐の中の鳴のやうに、音は高い大浪の間を走り、高く壓迫された翼では上に上ることが出来ない。永遠にして威赫的な大洋は音を粗野で永遠な魔法の捕虜にする。然し高く上つたが、もう沈んでゆく大洋はよりぼんやりと騒ぐ。尙高く——既に力無く下方に重い、殆んど聲なき塊が揺れて居る。他の聲が光々とした遠くの廣々した中に響く。晝には或る憂愁があり、夜には他の憂愁がある。——そして突然傲慢な、永遠に押される黒い大洋が永久の奴隸に思へる。壁の冷たい石に頬を當てて、孤獨のマリエツトは耳をすまして、凡て靜かに憂ひながら、何物かと和解して居る。然し道に重々しい依怙地な足音がして、丈夫な足の下に小石をかむ音がする——教會の後から彼が出て来る。彼はゆるやかにいかめしく歩く、それは徒らに地上を歩く者のやうではなく、地の兩端を知つて居る者のやうである。帽子を手にし、自分の前方を眺めながら何事かを考へて居る。巾廣い肩の上には圓くがつしりした頭があり、短い髪が生えて居る。

暗い外形は峻烈で命づるやうに暗示的で、半ば軍人のやうな服装をして居るが、肉體は着物の軍紀について居ない。自由人の如くそれを支配して居る。褶は從順に横にり、——強い肉體は穩に必要な所へそれらを追ひやつて居る。

マリエツト彼に挨拶をする。

——今晚は。

彼は、もう遠くへ去つたが、立止つて、ゆるやかに頭を返す。口を切るのを惜むやうに期待せるやうに無言。

——今晚はといふのは、わしに言つたことなのかい。(やつと訊れる)

——ええ、あんたによ、今晚は。

彼は無言の儘眺める。

——では、今晚は。此の國で挨拶されるのは之が切めてだよ、お前の聲を聞いて吃驚りしたぜ。もつと近くへお寄り。皆が寝てるのに、何故寝ないのだね。お前は誰だな。

——わたし此處の僧院長の娘だわ。

彼は笑ひ出す。

——じゃあ、坊さんに子供があるつてんだな。それともお前さんの國にや特別な坊さんがあるのかね。

——ええ、特別なのがね。

——ホオレが此處の坊さんの事をわしに話した事を今やつと思ひ出すよ。

——ホオレつて誰なの。

——わしの水夫さ。ほら、あのお前さん達のところで酒を買ふ奴。

彼は再び幾分思掛けなく笑ひ出して言ひ續ける。

——さうだ。あいつが何だか話したつけ。法王を呪つて自分の教會を自由だと呼んだなあお前さんの父親かい。

——さうよ。

——自分で祈禱をつくるんか。自分で漁夫と一緒に海へ行くんかい。自分の手で言ふ事を聞かないやつらを罰するのかい。

——ええ。わたしあの人の娘だわ。マリエツトといふ名なの。で、あんたの名は。

——わしの名は随分あるよ。お前にどの名を言つたものかな？

——洗禮名よ。

——何だつてわしが洗禮を受けたなんて考へるのだ。わしは自分のお袋を知らないんだよ。

マリエツト靜かに語る。

——わたしもお母さんを知らないわ。

二人無言の儘で、親し氣に相互に眺め合ふ。

——おや、さうかい。(と言つて) お前もお母さんを知らないのか。ふん、じゃあ、俺をハガアルトと呼ぶがいいや。

——ハガアルトなの。

——さうだよ。氣に入つたかね。わしはそのハガアルトと言ふ名を自分で考へ出したんだ。もうお前の名のついてるのが残念だな、わしがいい名を考へ出してやるんだつたのによ。

突然彼は眉をひそめる。

——ねえ、マリエツト、お前の國はどうしてかう辛氣臭いんだ。わしがお前んとこの路を歩いて

行くと——足の下で石ころが鳴るばつかしだな。大きな石がほかんと立つてるな。

——そりやあ城へ行く路だわ、誰もあそこへ行く者が無いの。あの石が行く者は誰だといふ問題をかけて通行人を立止まらせるつていふのは本當だわ。

——いや、あいつらは物言はずさ。どうしてお前の國はから辛氣臭いんだらうな。もうわしは一週間も自分の影を見ないのだが——そんなことあつた事じゃあないよ。——わしは自分の影を見ないんだ。

——いいえ、わたしたちの國はそりやあ晴々して嬉しさうだわ。今は未だ冬だけれど、今に春が来ると一緒にお天道様も戻つていらつしやるのよ、あんた見るわ、ハガアルト。

彼は嘲けるやうに言ふ。

——で、お天道様の来る迄坐つておとなしく待つてるのかい。結構な人達だな。ああ、俺に船があつたらな。

——そうしたらどうするの？

彼は溢々眊め疑ふやうに頭をふる。

——お前は餘り物好きすぎるよ、娘さん、誰かそつとお前さんを送つて寄越したのかね。

——いいえ、どうしてあんたに船が入用なの。

ハガアルトは人の善ささうに且つ嘲笑的に笑ふ。

——どうして人間に船が入用だつて訊ねるのか、結構な人達だな、何故人間に船が入るのか知らないなんて。(そして突然眞面目に)わしに船があつたら、太陽を追つかけたらうになあ。どんなに太陽がああ金色の帆をはつたつて、わしはわしの黒い帆で追つかけたらう。そして甲板へもつていつて、わしの影を描かせてやつたものに、それに足でその上に立つたにな。——その通りだよ。

重々しく足で打つ。マリエツト注意深く訊れる。

——あんた黒い帆でつて言つたの？

——さう言つたよ、わしは。何だつて聞いてばかり居るのだ。お前は知つてるだらうが、わしの所には船なんぞありやしないよ。さよなら。

帽子を冠つたが去らない。マリエツト無言、彼は腹立しさうに言ふ。

— お前んとこの、あの老ひぼれの馬鹿者のダンが弾いてるやうなものがお氣に召すてんだらうな。

— あれの名を知つてるの。

— ホオレが話したんだ。だが、わしは好かないよ、いや、いや。此處へいい正直な犬か獣を連れてくるがいい、——あいつ吠え出しやがるだらうな。あいつは音楽を知らないつていふのかい——いんや、あいつは知つてる、だが、嘘は我慢が出来ないんだな。ほら音楽だ、聞いてごらん。

マリエットの手を取つて荒々しく顔を大洋の方へ向ける。

— 聞えるかい、あれが音楽といふものさ。お前のダンは海や風を盗んだのだ。——いや、あいつは泥坊よりいけない——あいつは嘘つきだ。あの、お前のダンを桁でつつてやらねばならんな、さよなら。

行く、然し二歩進んで、振返る。

— さよなら、俺がお前に言つたな。家へお出で。あの馬鹿者に一人で弾かせてをくがいい。さ

あ——おいで。

マリエット無言のまま動かない。ハガアルト笑ふ。

— 俺がお前の名を忘れやしなかつて氣にしてるのかい。どうして、忘れるものか、マリエットつて言ふんだらう。おいで、マリエット。

彼女は靜かに語る。

— わたしあんたの船を見たわ。

ハガアルト素早く近附き彼女の方へ傾く、彼の顔は恐ろしい。

— 嘘だ。何時のことだ。

— 昨日の晩よ。

— 嘘だ。何處へ行つたんだ。

— お天道様の方へ。

— 俺は昨晚酔拂つて寝て居たんだ。だが、そんなことは嘘だ。俺は一度も見やあしなかつたんだ——お前、俺を試してるんだな。氣をつけるがいい。

——もう一遍見たらあなたに話してあげるわ。

——どうして話せるのだ。

——わたし、山のあるあなたの家へ行くわ。

ハガアルト注意深く彼女を眺める。

——お前、嘘を言ってるんでなかったらな。お前の國の人達はどうかんだ、嘘つきか、それとも違ふかい。他の奴も船を見たのかね。

——知らないわ。わたし一人で岸に居たの——今やつとあれはあなたの船でないつてことが解つたわ。あなたはあれをいやがつてるのなもの。

丁度、彼女の居るのを忘れたやうに、ハガアルトは無言。

——あなた綺麗な着物を持つてるわね。黙ってるの、わたしあなたのとこへ行くわ。

ハガアルト無言。暗い外形は峻烈に且つ粗野に暗い。永い間の、恐らく一日、一生の、ぼんやりした沈黙と無言に依つて、彼の頑丈な肉體の動作、各々の着物の襷が満たされる。

——あなたの水夫がわたしを殺しはしない？——あなた黙ってるの——わたしフィリップといふ

許婚者があるんだけど、わたしあの人を愛して居ないわ。——今、あなたは城へ行く路に立つてるあの石見たいね。

ハガアルトは無言のまま振返つて行く。

——わたしはあなたの名を覚えてるわ。ハガアルトつて言ふのね。

彼立去る。

——ハガアルト（マリエット呼ぶ。然しもう家敷の向ふに隠れて、只撒かれた石を踏む音だけが霧の空気の中に消えゆく。再び休んで居たガンが弾く。海で死んだ者のことを神に語るのである）

夜は深くなつてゆく。もう岩も城も見えない、單に窓の火が以前よりも明るく赤くなるのみである。微かに音を立てて、跳ね返る、疲れない波が他の人生に就て物語つて居るのである。

第
二
幕